

る爲めの儀式にして、其の際此の矢に附したる五色の帛を、打ち振り、フーレーの歌を悲しげに唱ふる時は、死者の靈魂再び歸り來ると信ぜらるゝなり。余は曾てフーレーの歌及び風習に就て、多少調査する處ありしが、其の儀式に斯る特別の矢を用ふるは、此の時始めて知り得しなり。内蒙古地方にて其の儀式は一種の昔話の如く残り、小説的に語り傳へられつゝあるが、此の附近に於て、今猶ほ行はれつゝあるは最も面白き事なり。

此處を出發して旅行を繼續せるが、此の附近の土地の模様は、前日經過せし塔湖附近より連續せる、即ち高原の平原なり。此は濕氣を帯びて柳樹多く草亦多し。櫻草の盛んに咲くをも見たり。實に蒙古に入りてより始めて此の花を見たり。

余等は之等の草花を摘みつゝ進みしが、十清里計りの間は等しくマンハの草原にして、南方に向つて進み行き、漸く一小溝のある處に達す。此處をフルレンコロと稱す。此の河流を渡れば喇嘛廟あり。余等は此處に下車し、其の寺院の附近なる一小村に入りて茶を喫す。此の村落は盡く喇嘛僧の住家にして、全村喇嘛以外の人を見ず。

余等は前夜宿せる處より此處に至る迄、主として此の河流に沿ひたる處にて、例のクキル民族の遺物たる土器を得たり。據りて此の附近亦住民ありしを知る可し。更に車に上り、ヤ

始めて櫻草
を見る
フルレンコ
ロ河

喇嘛の村落

丸太建の喇
嘛住家

デツタバイ
シン王府

ンブインソムの廟を右にして進む。此の寺院には立ち寄りしも、車上より之を見るに、支那風の形式を帯びたる建築にして、僧侶の住家は我が國の校倉、或は黒龍江方面乃至コサツク兵の作る兵營の如く、丸木を以て建てたるものなり。余は斯る形式の家屋は此處に於て始めて見たるが、之等は喇嘛僧自身に建築するものにして、其の材木は黒龍江上流地方より買ひ入るゝなり。斯かる住家を建造するは、蒙古人固有の習慣なるか、或は他民族の影響なるか、研究の餘地ある事なり。而して支那人の決して斯る家屋を作らぬは事實なり。

余等は河を渡りて、此の寺に來る迄の道に於ても、例のクキル人の土器の破片を得たり。此處を出發してより道は一步步々上りとなり、無人の丘陵を西南方に進む事三十五清里計り、漸くデツタバイシンの王府に到着す。王府にては豫め余等の到着を知り居りしかば、余等の爲めに既に一つの天幕を張りて待ち居れり。余等即ち之に一泊する事とせり。本日の行程五十清里計り。

王府は丘陵の下に位し、而して王の居る處は一種の木造家屋なり、又た其の附近にある住家は、校倉的バイシングル三四と、天幕張りのもの二三十にして、役所の事務を執る處も亦天幕なり。かくの如く家屋の群集し居るは、蒙古にては町とも稱すべく、殷賑なる地の一と

云ふを云ふを得べし。此の町は即ちデツタバイシン王及び其の家臣の住家なり。

王府の位置
四凸なき平
原

衙門の位置は丘陵を後にし、前は打ち開きたる處にして、凹地の中に設立せられ居るの右様なり。此の王府の後方を走り居る丘陵は、曾てフブチン王府に滞在在中、南方に見たるもの即ち之なり。即ち同地より此邊に至る迄殆んど大凹凸なき平原にして、唯だ此の王府の後を走り居る丘陵丈け突起をなし居る事は、其のフブチン王府より望み見らるゝものにて之を知らん。此の王府よりフブチン王の王府迄は、西北の方八十清里計りを隔つ。而して此の丘陵は更に西方に走り、先きの日途上遙かに望みたる、チャンガンオーラ山迄延長し居るもの如し。

王府の好遇

衙門にては余等の待遇最も努め、チョソラクチの役人等、始終來りて旅行の勞を慰め、又た余等に隨行し來れるフブチン王の、タイチ等に迄非常の待遇を與へたり。此處にては色々役人余等の天幕に來りて、諸種の事に就て語り合ひ、余等も多く利益を得たり。此處にも亦フブチン王府の如く、小さき年若の書記あり。始終余等の處に話しに來れり。

此の王府は外蒙古に於て最東部に位置するものにして、其の領地の區域もフブチン王に比して小さきもの如し。余等は此處にて諸種の調査をなし、愉快に一夜を送れり。

王への贈物
と役人への
贈物

此の時デツタバイシン王は、庫倫の大喇嘛廟へ、參拜に行かれしとて不在なりし。元來蒙古にては、王に而謁するに夫々の儀式あり。即ち其の際には王への贈物には、白き絹にて作れる長さ昂ハダツと稱するものを添へて贈呈するを禮とし。其れに對し王より夫々の返禮をせらるゝの風あり。余等從來の經驗によれば、王に直接に贈物するよりも、却て其の下に位するトソラクチ、チョソラクチ、メリオン等の、役人に物を贈る方大に必要なり。如何となれば、王は總ての事は殆んど之を知らず。トソラクチ、チョソラクチ等の役人に於て、總ての事務を統轄するの有機なればなり。即ち彼等二人さへ受け合ふ時は、其の管下を旅行するに當り多大の便宜を得べく、飲食物は勿論、車、若者等の徵發等も全く自由にして、其の管下に於て是等の爲めに、金錢其他のものを要求せざる程なれば、此の地方を旅行するものは、王と共に彼等役人にも贈物するを利益とす。單に王にのみ贈物するは、トソラクチのみに贈物するよりも効果尠なし。是れ今回の旅行によりて特に確めたる事實なり。

デツタバイ
シン王府を
出發す
蒙古人誌別

六月六日。デツタバイシン王府を出發するに當り、新にタイチ一名及び料理番の如き男一人隨行する事となれり。而して此の時迄隨ひ來れる、フブチン王のタイチ及び其の従者なる老人等は、此處より歸る事となりしかば、余等は彼等に相當の贈物をなせしに、彼等は蒙古

の禮
フブチン
役人決を惜
しむ

の禮によりて喫煙草入を出し來り、之を互に喫ぎ合ひて訣れたり。外蒙古人は概して温厚質朴なるが、彼等も余等に決るゝに當り、是迄従ひ來りしものを、一旦袂を分たば何日亦相會ふやも期し難しとて、非常に決れを惜しめり。然れども斯くてあるべきにもあらねば、余等は更に前途の旅を繼げざるべからずとて、強て彼等と袂を訣てり。

王府より隨行の役人は、内蒙古の東烏珠穆沁余等と同行する等なり。出發に臨みチョンラクチの子息及び、年若き書記二人を直立せしめて寫眞を撮影し、午前八時愈々出發せんとする際、昨日余等の待遇に盡力し呉れたるチョンラクチ出て來りて別辭を述べ。余等は例によりて車に乗りて出て立てり。

一小河を渡
る

王府を出て、進む事少時にして一小河に達し、之を渡れり。此の河は、水の溜りてジク／＼せる湿地を貫流し、河中一面に水草密生す。此時は水量尠かりしも、雨期に際會すれば急に大河となり、王府と河の南岸との往來、絶ゆるに到ると云ふ。

蒙古人の住

余等は前日、王府の位置は低き處なりと思ひしに、此の河畔に立ちて王府の方を望むるに、其の却て高臺の上に位置するを發見せり。即ち王府は高臺に位置し、丘陵を後にし、南方は打ち開きたる低地を控ふるものにして、地勢最も佳なり。元來蒙古人は、其の住宅の位置を

居は丘陵を
北にし平地
を南にす

ンヤラオラ
ン村

定むるに當り、其の王府たると普通の民族たるとを問はず、總て丘陵を北にし、南方開けたる處を喜ぶ。余の從來經過し來れる地方も、丘陵の無き地方に非る限りは、悉く然らざるは無かりしが、此の王府も亦其の一例なり。

河を渡りてより、道は再び丘陵に向ひ、漸次上り／＼つゝ南方に向ふ。十清里計にして一村あり、ンヤラオランと稱す。此の村のタイチ、余等を途中迄出迎へ、是非其の村に休息せん事を請ひしも、十清里位にて休みては旅程抄取らざればとて、折角の厚意を斷りて進む。道は愈々爪先上りとなり、方向は少しく南に片よりたる西方なり。行く事更に十清里、また一小村あり。此は喇嘛僧のみの部落にして三四の天幕あり。前途の都合上、此處に下車して茶を喫せり。

デツクバイシン管下の蒙古人は、フブチン王管下のものに比して、一般に貧しきが如く、其の住居する天幕等も、殆んど古き汚れたるもののみにして、白く新らしきものなく、殊に此の喇嘛僧等に到りては最も甚しく、前日途中にて見たるも亦然りき。

蒙古人貧富

蒙古語にて富者をバインファン、貧人をヤトファンと云ふ。又た前者をチャガングル即ち白き家、後者をハラグル即ち黒き家とも稱す。此は天幕の毛氈の白く新しきと、黒く汚れたる

ハ區別

とによりて分てるものにして、富者は新しく白き家に住し、貧者は黒く古き家に住するの意
味なり。其の語を以て、余等此の日旅行しつゝある地方の状態を評すれば、役人を除くの外
は、殆んどハラグルのみなりと言ふを得べし。

大喇嘛廟

余等は茶を喫み、休息をとりたる後、復び乗車して行を続け、十清里計り來りし頃、右方三
清里計り隔て、一喇嘛廟を見たり。此の喇嘛廟はインフラインソム即ち大喇嘛廟と稱し、山
の麓にあり。此の廟の西方は凡て山にして、地形概ね高原的丘陵の性質を帯び、東方より西
南方に向つて走る一小山脈あり、此は更に西してフブチン王府下の、チャガンオーラ山に向
ひて走るものゝ如し。喇嘛廟は即ち此の山の麓にあるなり。余は此の丘陵を假りに山と稱す
れども、實は大陸の一ウツリに過ぎず。此の附近一の樹木を見ず。

一大池の跡

喇嘛廟附近に、小池あり。又た此の附近の低き處には、處々に小水溜あり。思ふに此の附
近は往時一大池なりしものゝ如く、今は廣き原を成す。蒙古人は此處をバインホラーと稱
す。即ち富みたる原と言ふ意味なり。

クキル族の遺物

此のバインホラーには、處々にマンハの潰れたるものあり。例によりてクキル族の遺物を
存す。今其れに就て詳細に語らんに、土器は例の突つつき模様のもので、赤き素焼のものとな

陶器の矢の根

り、又た褐色の陶器をも存せり。之等は彼の南方地方に於て、發見せるものと同一なり。尙ほ
又た此處にて、面白き事實を發見せるが、其は陶器の破片を利用し、是にて矢の根を作らんと
せし形跡ある事是れなり。其の他二個許り、何物をか作らんとせし、陶器の破片の存するを見
たり。之に依りて考ふるに、當時の住民は陶器を以て、矢の根を作りしものならんか。尙テム
ルスバン即ち鐵錐をも存せり。之によりて彼等の鍛冶をなせしことも考へ得べく、又た鐵の
破片をも得たり。其の他、鐵にて作れる帶留をも發見せしが、是は曩にフブチン王のチャガ
ンオーラ山附近にて得たるものと同一形式なり。陶器の初歩の時代とも稱すべき褐色の陶器
は、何處の遺跡にても素焼の土器と共に存せしが、是等は蓋し當時他より輸入せられたるな
らん。又た鼠色の土器に、突つつき模様を附けたるもの、赤色の素焼土器に、幾何學的模様を
施せるものあり。此の二者は一見相異なるが如くなれども、共に同一民族の手に成れるものな
るべし。又た此處には石鏃を製造せる跡、石錐、石剃刀等の破片の夥しく落ち散るあり。之
等を綜合して考ふるに、彼等は不完全ながらも、金屬を使用すると同時に、石器をも併せ用ひ
たる事明かなり。

石器と金屬
とを併用せ
る民族

是等遺跡のある處は、何れも一段小高き處にして、低き場處には全然之れ無し。即ち當時

バインホラ
の學術的
價值

景

此の地の池なりし頃には、今此の遺物を存するは、生活に最も適する水邊たりしものならん。要するに此のバインホラは、學術上最も價值ある所たり。

バインホラ
村

余等は此處にて諸種の調査を爲したる後ち、更に行を続けんとせしが、前途數十里の間泊る可き家なしとの事なりしかば、日は未だ高かりしも、即ち喇嘛廟附近の一小村、バインホラと稱する地に一泊する事とせり。時に漸く午後三時にして、本日の行程僅かに三十五清里計りなり。

富の程度淺
し

騎馬に巧な
る蒙古女子

此の村も亦一寒村に過ぎず。余等は役人の差圖により、一軒の蒙古人の家に入りしが、其の家の主人は不在なりしに、其の妻は出て、周旋する事もせず、唯だ坐視するのみなりしかば、余は役人を呼びて之を叱せしに、始めて狼狽し出し余等の待遇に盡せり。此の附近の蒙古人は性質もフブチン王のものより悪しく、且つ富の程度も甚しく降るが如し。此の日余等は諸種の調査に一日を送れり。此の夕暮、馬に騎して蒙古の一女子遊びに來りかば、余は早速其の馬上の姿を寫眞せり。此の附近の婦人は一般に馬に乗るに巧なり。

第十一 東烏珠穆沁

一 東烏珠穆沁領に入る

東烏珠穆沁
に向ふ

六月六日。午前八時バインホラを出發す、道は等しく大陸的丘陵にして、其の東西の方面及び、余等の經過し來れる北方を見るに、何れも山の狀を呈せり、思ふに余等の目下歩み居る地も、遠くより是を望まば全しく山の形を呈するならん、以て地勢の益々高まりつゝあるを知るべし、此の地勢より考へて、余等の既に興安嶺の山中に入り居るを感ず、此の途上にも亦クキル民族の遺物を處々に見たり。

シヤチンキ
ヤクタ村
内外蒙古の
境界

丘陵を或は上り或は下りつゝ行く事三清里、始めて一村落到達す。シヤチンキヤクタと稱す。戸數五六計りあり。此の村は内外蒙古の境上にあるものにして、シヤチンは車臣にして、キヤクタは境界の意なり。此はデッタ、バイシンの領土なれども、是より先は直ちに内蒙古東烏珠穆沁の地なり。此の村にはトログイあり、其の家に入りて晝食をとれり。時に正午十二時。

クキルの遺
物

バインホラを出發してより、途中も到る處クキルの遺物を存せしが、苟もマンハの潰れたる處、或は途上車の道にても、地の露出し居る處には必ず土器の破片、石鏃の破片等と認む。是れ亦前日發見せるものと同一形式なり。

タルバガ

タルバガ
イ

タルバガを
捕ふ

現今の蒙古

バインホラより此處に来る間に於て注意すべき事は、此の地にタルバガと稱する動物の多き事なり。タルバガは土鼠の類にして、其の大きき猫位あり。形は狸に似て鋭き牙を有す。此のタルバガは穴を掘りて其の中に棲み草の根を食ふ。彼等の常に穴の外の處に、下肢にて座し、前肢を擧ぎ、恰かもカンガルーの如き形に立ち居るを見る。而して其の鳴聲はキキと云ふ如き音を發す。此の附近には無數に棲みたりしが、其の穴は頗る巧妙に作られ、出口は一つの穴に必ず三四個處あり。一方より之を追へば他の口へ逃れらるゝの用意をなす。此の動物に西烏珠穆沁方面にては全く見るを得ず。余等は此の地にて始めて見たるものなり、外蒙古の地名中に、タルバガタイと稱する處あるが、其は此の動物の棲む處なり。タイとは有るの意味にして、タルバガタイとはタルバガの居る處と言ふが如し。

余等の車に隨行し來れる一蒙古人は、馬を躍らしてタルバガを追ひたり。タルバガは容易に人に獲へらるゝ事無きものなるが、此の時には其の穴を忘れ、馬に驅られてあちらこちらに逃れつゝありしが、タイチ亦馬を驅りて、兩方より之を追ひ詰め遂に之を殺したり。余は標本にせん爲め若干の金を與へて之を購ひ、シャチンキヤクタの處にて其の皮を剥がしめ、肉は彼等に食へとて與へしに、彼等は好まずとて食はざりき。昔の蒙古人等は好んで其の肉

人は之を食
はず

山の如きマ
ンハの丘陵

東烏珠穆沁
に入るロー
ハ村

クキルの遺
跡物益々
多し

東西烏珠穆

を食ひしものなるが、今の蒙古人等は之を食用に用ひず。

此の附近タルバガの多きに見ても、余等の既に山中に入れるを知るべし。此の村にて茶を喫み、新に車を整へて出發す。是よりは愈々内蒙古の東烏珠穆沁に向つて進むなり。方向は少しく東に寄りたる南にとりて進みしが、地形は一層山狀を呈し來れり。然れども其の中一も岩石を認めず。山と思はるゝ處に近づき見れば悉くマンハなり。

漸次地盤は高まり來りしが、道は西南の間を行き、十清里にしてローハに達す。時に午後三時頃なり。尙進まんとせしが、時間及び村落の都合上此處に一泊する事に決せり。此の日の行程四十清里。

ローハは東烏珠穆沁最初の村落なるが、余等は此の日、シャチンキヤクタを出發して此處迄來る途中にも、クキルの遺跡ありて、多く遺物の存するを見たりしか、東烏珠穆沁に近づくと隨ひて益々多し。されば余等の遺物蒐集上には最も好都合なりき、即ちローハのマンハの類れたる處にては青玉、石斧、石剃刀等を多く發見せり。

余等は是より東烏珠穆沁の地を旅行する事となれり。余等は旅行中西烏珠穆沁にても屢々耳にせしが、實際西烏珠穆沁は古來純朴にして、武器も兵士も無きに、東烏珠穆沁は全く之に

沁の異同

兵士本位の
東烏珠穆沁

東烏珠穆沁
人農業を専
しむ

錫林郭勒盟
に屬す

東烏珠穆沁
の位置

東西烏珠穆
沁の地位
風俗

言語

圖

反し、總ての組織を兵に探り、村には兵の如きものを置く等、事情大に異なるものあり。其は以後の日記に於ても現はれ来る處の如し。其の爲めか西烏珠穆沁にては、東烏珠穆沁をチルクテと稱す、チルクテは兵を持つの意味なり。

其の生活は西烏珠穆沁及び、外蒙古と等しく牧畜によりて之を營み、農業は全くなさざるのみならず、農業を營むは、土地を壞はすものなりとて却て卑しむの風あり。

東烏珠穆沁、西烏珠穆沁と共に錫林郭勒盟に屬す。西烏珠穆沁は興安嶺の半腹に存在し、平坦なる地なれども、東烏珠穆沁は、全く興安嶺山中に位するを以て地平坦ならず。而して其の村落は山と山とに狭まれたる、谷間のや、廣き處にあるを例とするもの、如し。されば一見大陸なる感想起らず、全く山中を旅行するの感あり。

東烏珠穆沁の風俗は、西烏珠穆沁に於けるが如く今尚ほ古風を存し、土俗學上より内蒙古の風俗を研究する爲めには最も大切なる地なり。今其の梗概を述べんに、大體に於て西烏珠穆沁と異なる處なく、唯だ少しく異なるのみなり、即ち衣服の仕立方、帽子の形等に於て其の差異を見るべし。

又た其の言語に於ても大差なけれど、方言の上には各々異なる處あり。東西烏珠穆沁は上

政治上其他
東西全く獨
立す

人情少しく
慍悍なり
富の程度低
し

東烏珠穆沁
の兵士
武器

守備兵設置
の必要

述の如く同一の名稱下にありと雖、政治上の意味に於ては二者各獨立し、又た別々の王爺に屬するものなるを知らざるべからず。又た兩地の住民も相往來する事なく、全く別箇のものたるの觀あり。

人情は西烏珠穆沁人の質朴なるに比し、東烏珠穆沁人は少しく慍悍なるが如し。又た兩地の富の程度を比較するに、西烏珠穆沁は高原に位置し、牧畜盛なる爲め多少富めりと雖、此の地方は谷間に位する結果、西烏珠穆沁に比して富の程度遙かに劣れり。

近時東烏珠穆沁の各村落到兵士を配置しあり。其は各村落より選びたる蒙古人の若者にし、我巡査の職を兼ねたる如きものなり。彼等は武器を持たず、單に弓或は牛馬を追ふに用ふる、柳樹にて作れる竿の如きものを持ち居るのみ、之等の武器は勿論實用に適せざる如し。此の兵士は西烏珠穆沁に於ては見るを得ざる處なるが、抑も此の地方にては何の必要ありて之を設けたりやと言ふに、之れ全く其の位置の關係による事なり。即ち北はソロン民族と境を接し、東は東西兩扎哈特、阿魯科爾沁、科爾沁等に接し居るを以て、其の關係上守備兵を置くの必要を生ぜしもの、如し。且つや外蒙古人と東烏珠穆沁人とは非常に仲悪く、斯く互に境を接するに拘らず、斯く迄感情の阻隔し居るは最も注意を要する點なりとす。又た之

之より以後
武官を隨行
せしむ

隨行すべき
役人及牛車
來らず

村役人を召
して叱責す

等の守備兵は非常に悪ずれなし居るものあれば、西烏珠穆沁、外蒙古等を旅行して、同地方の純朴なる人民にのみ接し來れる余等には、最も異様の感をなせり。之迄余等の旅行中隨行者は總て文官のみなが、東烏珠穆沁に入りてより武人を以て之に代ふるに到れり。

六月八日、此の日南風強く少しく雨さへ交ゆ、余等は早朝より出發の準備を整へありしに、此の村の役人及び牛車來らず。稍々暫らく之を持ちしも尙ほ來らざりしを以て、余等外蒙古のデッタバイシンより隨行し來れる役人を召し、其の不行届を叱責せしに、此の役人に隨ひ來りし蒙古人は、村の役人に談判せんとて馬に鞭ちて出て行けり。彼はいと快活なる男にして、外蒙古人としては、珍らしく伶俐にて又よく事理を解せり。彼は又た料理を好くし、總ての事に調法なる男なり。待つ事少時、彼は役人等を連れ來れり。此の役人はタイチなりしが、其の服裝を見るに、役人の正帽を戴き黒衣を着し長靴を穿てり、余は大に彼の不都合を詰りしに、彼は遂に平伏して其の罪を謝せり。之に依りて見るも、東烏珠穆沁の役人等は、西烏珠穆沁若しくは外蒙古の役人に比し性質の悪きを知らん。

此の村の役人等新たに隨行する事となりかば、デッタバイシンの役人及び若者をば此處より返せり。彼等は王府迄隨行し度き希望なりしも、余は案内者二人を要せざればとて之を拒

全く山中を
進む

ムステ村

行程僅に十
清里

四顧皆山の
三十清里の
無人境

此處にも古
長城あり

絶せり。

午前十一時愈々出發す。道を少しく東に寄りたる南方にとり、山間のマンハを進み行けるが、周囲の山々には是迄の如き開濶なる處全くなし。此の日天候悪しく、寒氣また強かりしが、七清里計り進みし頃、東方に一寺院を認む、此はローハンムと稱し、余等の前夜一泊せるローハ村と同名なり。更に進む事六七清里にしてムステと稱する村に達し、此處に一泊する事とせり。本日の行程は僅かに十餘清里に過ぎざりき。

夜風強く、雨さへ交れり。

六月九日。午前七時頃ムステを出發し、前日來隨行し來れるタイチの案内にて、前日と同じ方向に向ひて進めり。道漸く上りとなりしが、四顧悉く小山にして、恰かも山中を行くの感ありき。一の人家さへも見ざる無人の境を行く事、三十清里計りにして南方一池あり。ブルテノールと稱す。此の池より五清里計りにして山に達せり。而して此の山の麓にはフルムチャムと稱するものあり。即ち土壁なり。此の土壁は五月二十五日の頃に於て述べたる、西烏珠穆沁と外蒙古喀爾喀王管下の地との間に於て、認めたるフルムチャムと同一のものにして、即ち余は其の此の地迄延長し居るを確め得たり。直ちに車を降りて之を調査せしが、其の存

在の形式は山に沿ひて設けられ、其の高さは、前に見たるものと同じく、上は餘程頽れたるが如く、幅は十歩計りもあり。蒙古人の語る處に據れば、此の土壁は更に科爾沁の方面迄走り居ると云ふ。此の土壁は概して山麓に平行して走り居れども、或は又た其の内面に當り、別に圓形の壁を設けたる處あり。然れども一般に後に山を負ひて作られ、前は打ち開けたる高原を控へ、要害として最も適當なる位置を占む。又た其の方向は、南方より來り、北東に向つて走り居るが如し。

余は此處にて何等かを得べしと思ひて調査せしも、遂に得る處なかりき。

余等は再び車に上りて行を續けたるが、少時にして一小峠に達せり。バインホシヨータパーと稱す。此の峠の附近には高山植物の小さき草花、今を盛りと咲き居るを見たり。余は之等の草花を採集して此の峠を下りしが、右の方に當りて一小溪流あり、ナールンコルと呼ぶ。又た左方の山腹にはフルムあり。余等は此の處の溪流とフルムとの間を進み行きしが、山間なれば人家一も無し。峠より十五清里計りにして、フルムテンホラーと稱する處に達せり。フルムは土壁にして、テンは持ちたるの意、ホラーは原なれば即ち土壁のある原の意なるが、其の名の示す如く、此の附近には尙ほフルム延長し居れり。蒙古人等は之によりて、其の村落に

ナールンコ

フルムテン
ホラー村

余等の宿舎
に番兵を附

東烏珠穆沁
人の風俗

禮服

蒙古のクル
ムと我コロ
モ

命名せるものならんか。

フルムテンホラー村は蒙古人の部落にして、豫め余等到着を知り居りしかば、村内にて最も立派なる家を空けて余等を持ち、到着するや直ちに之に案内し、又た家の前にはテントを張りて二三人の番兵を附せり。彼等は兵士とは言ふも、唯だ名のみにして武器をも持たざるなり。余等は此の家に一泊する事に決し、種々の調査に従事せり。

余は兵卒、役人等の手より烏珠穆沁人の靴、衣服等諸種の土俗品を買ひ求めたるが、余等の此の地に入りて最も面白く感ぜしは、此の附近の蒙古人等の風俗にして、即ち其の帽子の裏に羊の毛を附し、又た衣服も長さ羊毛皮にて作れるものを用ひ、長靴を穿ち、腰には帯を纏ひ、而して其の帯には小刀、其の他色々の物を吊り下げ居るなり。此等は平常の服装なるが、儀式の場處に臨むには、此等の上より、之も亦革にて作れる腕の稍短き、腰の邊迄達する筒袖にて、前には締め紐を附けたる、蒙古語にてクルムと稱するものを着す。此の日余等に隨行し居れるタイチ以下村の男等は、此の風を爲し居たりしが、烏珠穆沁にては他に於ても能く見らるゝ風なり。

クルムは我國の羽織の如きものなり。而して其の作り方は毛のある方を裏にし、表には革

の方を出すを以て白色を呈せり。之にて思ひ當れる事あり。余も久しき以前より其の考を持ち居りしが、宮崎法學博士は、此のクルムは日本古代の衣と同一のものにして、語原も亦等しからんとの考を持ち居られしが、余の考ふる所も亦同じく、其の多少人種學上に關係あるを考へ得らるゝなり。

余等は此處にて各種の調査を試み、又た古壁に就て蒙古人等に尋ねたるも、彼等は唯だ、往時より此の地にフルムの存在せしを知るのみにして他は之を知らず。余は又た此のフルム附近より、何等かの品物を發見する事なきかを尋ねたるに、役人は直ちに此の村内の人民に對し、斯る品物を所持せるものは持ち來る可きを命じたり。暫くにして一蒙古人は、其處より得たりと云ふ、銅製の飾の如きものを持ち來れり。而して其の蒙古人は、之等の品物を時々發見すると言ひ、又た之等を一般にテングリオンムと稱するを告げたり。テングリオンムは天にしてソムは矢なれば天矢の意にして、即ち天上にて神の職をなせる矢の、地に落ち來れるなりと彼等は考へ居るなり。前に西烏珠穆沁と外蒙古との境界に於ける、フルムにても天矢の話を聞きしが、此の地にも亦之れ有るなり。テングリオンムなるものは、元より一種の Faldione なるべけれども、フルムの附近より銅製の、品物を發見する事の符合し居るは奇と云ふべし。

古長城附近の遺物

此處にも天矢を存す

兎に角之等は餘程考ふべき事ならん。

此の日隨行し來れる役人は、此の村の士官の如き男を伴ひ來りて曰く、余は王府迄大人に隨行すべきなれども、病氣の爲め止むを得ず、以後は此の士官を隨行せしむる事とせりと。斯くして之より以後は、兵事に關係ある人間の、文官に代つて余等に隨行し行く事となれり。フルムテンホラーの地形は、名の示す如く東にフルムを存し、前には川を控へ、周圍は山を以て繞らさる、即ち山中に於ける多少打ち開けたる原野なり。東烏珠穆沁の村落は、重に斯る位地の處に存するを例とす。又た興安嶺山中生活の一狀態として見るを得べし。

六月十日。一昨日來隨行し來れるチンステーションは余等に暇を告げて歸り行き、愈々士官及び兵士を隨へて旅行する事となれり。例の如く車に荷物を積み、牛に牽かせて出發せり。東烏珠穆沁に入りてよりは、デッタバイシンと同じく牛車を用ふる事となりしかば、西烏珠穆沁及びバラカの如く、馬を驅りて勇ましく旅行する事を得ざるに到れり。

午前八時頃愈々此の村を出發し、ナールンコロを渡り南方に向ひて進む。此の日も亦川に沿ひて山の間を進みしが、道は次第に上りとなり、十清里計りにして峠の上に出づ、此の附近一體に草密生せり。

東烏珠穆沁村落の狀態

士官を隨へて旅行する

六月を降らす

ホシヨ

シヤラホシヨ
ムホラ
村

此の日朝來天候怪しく、寒氣亦漸く酷かりしかば、余等即ち毛裘を重ねしが、此の時に到り、天俄かに掻き曇り、雷鳴降雨あり、又た雹さへ交れり。役人等は赤き外套を出して雨を防げるも皆悉く濡れたり。余等は本年蒙古に入りてより、雷鳴を聞けるは唯だ二回のみ、六月に入りて雷鳴り。雹を降らすが如きは、到底日本に於ては見られざる現象なり。

峠を下りてより、再び山の間を歩みつゝありしが、懸て道は次第に廣き處に出て來り、左右の山は漸く遠ざかり、全く原野を行く事となれり、此の原には草一面に生ぜり。

廣き原を行く事二十清里計りの處に於て、左方の山麓より此の平原に向つて延長し來れる如き丘陵あり。蒙古人等は之をホシヨと稱す。此の堤は天然のものか、或はまた人爲的に築けるものか、何れにするも昔時より、防備的の意味に用ひたるものたるや明かなり。蒙古語にてホシヨと云ふ名は、概ね斯る丘陵に命名し居らるゝ名なり。此のホシヨのある處より、五清里計り進みて一小溪流に達す。此の小溪流を渡り更に五清里計りにして、シヤラホシヨムホラと稱する一村落到達し、今夜は此處に一泊する事に決せり。時に午後三時頃なり。

余等の到着は豫め知れ居りしを以て、此の村にて貴族の家に、立派なる一天幕を特に空

け、以て余等を待ち居りしかば、余等即ち直ちに其の天幕に入れり。本日の行程四十五清里。

武官余の護照の大なるに驚く
日々隨行者を代ふるの不利益

此の村にも亦武官駐屯し居りしが、彼は余の天幕に來りて護照を一見せん事を申込みしを以て、余は之を示したるに、彼等は未だ曾て斯る大なる護照を見たる事なかりしかば、大に驚き、其の如何なる効力あるかをも知らざりき。此の村の武官は、此の日余等に隨行し來れる武官と代りて、王府迄隨行せん事を懇願して止まざりしが、余は其の必要なとして之を拒絶せしかば、彼は不興氣なる面持して出て行けり。余の彼が請を拒絶せしは、若し一旦斯る例を作らんか、日々別々の役人隨行し、其の結果贈物等の上に於て多大の影響を及ぼすを以てなり。こは余の蒙古旅行の經驗に依りて明かなり。

此の林はシヤラホシヨムホラと其の名の示す如く、尤も廣き高原に位し。其の間に溪流あり。又たその周圍は悉く山なるが、此の山と山との距離は東西十五六清里、南北十清里許りもあるべし。而して此の村の北方には、本日途中にて見たるホシヨ突き出て居るを見る。又た此の附近の高原は、凸凹なく平坦にして草密生し、牛馬を牧するには最も適當なるが如し。

ホシヨロと
關係ある銅
製の器物

山中の風雨

余は此の村にて諸種の調査に従ひしが、蒙古人等に對し、此の附近より何物をか發見せざるやと問ひたるに、彼等は草の帶留と品物を吊す爲とを兼ねたるが如き、銅製の器物を持ち來れり。之も亦テングリ・ソムと稱せしが、其のホシヨロと關係あるは直ちに考へ得らるべし。

余等の此の村に到着したる後少時にして、雨模様となり風さへ吹き出でたるが、夜に入りて風雨漸く烈しく、風は高原に鳴渡り、凄慘の氣を惹起せり、興安嶺山中時ならぬ風雨に旅寢の夢聞かならず。

東烏珠穆沁に入りてよりは、外蒙古に於けるが如く、隨行の役人等は、羊一頭づゝを其の村より徵發し來りて、食膳に上す事となれるが、今夜も亦然り。

二、興安嶺特有の動物タルバガ

六月十一日。シヤラホシヨロヌホラーを出發し、高原の道を西南の間に向つて進み、暫くにして山麓に達せり。之よりは其の山に沿ひて旅行を續く、此の途中亦タルバガの穴を掘り居るもの頗る多く、此處彼處にその奇聲を發し居るを聞けり。前にも言へる如く、この獸

古文書中に
現はれたる
タルバガ

マルコボロ
の旅行記

は穴の前にカンガルイの如き様子に座し居り、人の近づくや始めて穴の中に隠るゝなり。昔時の蒙古人は食用に供したるものにして、此の附近にては今も猶此の肉を食ひ居るが如し。此の野鼠の事に關しては、古くより蒙古人に關する記事の中に見はる。殊にマルコボロ旅行記を見れば、其の第四十二章タータルの風習なる條に於て

彼等は乳及び肉を以て食物とす。之等は自ら飼へる家畜、若しくは狩獵の際の獵物等によりて供給す。而して彼等は馬、犬、土中に棲息せる土鼠等凡ての肉を食す。飲物は牝馬の乳よりなる。

此の文中土鼠と書けるは即ちタルバガの事なり。此のタルバガは所謂 *Phocaena* にして、又た西伯利亞にも棲息す。西伯利亞に居るは *Maclaga* と稱するものにして、亦之と同じきものならんか、又之を *Kangaroo mt. uss. Miesleimans* と云ふ。蒙古人等の言によれば、此のタルバガは草の根を食ひて生息すと。されば草多き處を撰びて其の穴を作り、草盡れば更に他の草多き處に移り行く。而して穴は多く山を負ひたる岡の上に作られ、相接近して數千百の多數をなす。此は興安嶺特有の動物の一なるが如し。而して此の動物は牧畜と多大の關係を有せり。即ち此の動物繁殖すれば、草の根を食ひ盡すを以て牧草生ぜず。爲めに牧畜に大

タルバガは
牧畜の大敵

害を及ぼし、其のみを以て生活する蒙古人に取りては大打撃なるなり。

蓋

タルバガを
捕ふ

余等はタルバガの多く棲める山を左に望みつゝ、更に南西の間を進み次第に山に近づき來れり。蒙古人等は此のタルバガを捕へんともせざれど、蒙古犬は其の肉を食ふを以て頻に之を追ひ廻すの風あり。即ち余等の通行せる時にも一疋の犬の、盛にタルバガを追ひ廻すを見たり。タルバガは其の穴を見失ひ、犬に追はれつゝ逃げ走りしが、遂に追ひ詰められ進退谷まり、却て牙を出して犬に抵抗せり。余は之を標本として採集したく思ひしかば、隨行蒙古人に之を捕へん事を命じたるに、蒙古人等は殺生するは非常に好ましからずとて、寧ろ犬を追はんとせしかば、余は自ら車を降り、蒙古人と共に犬に加勢して遂に之を捕獲せり。其の形程に似たる處もありて、兎よりは少し大きく、前足短く其の牙は鋭く、容易には犬にも捕られず。タルバガの多き處を行く事更に十清里計りにして、道は急に南方に向つて進む事となれり、余等は兩山の間を進みつゝ、ありしが、右方に當りて川の流るゝあるが如し。此の川はシヤラホシヨ一附近に續くものにして、シールチンヨル稱す。余等は單純なる山の中を、或は上り或は下りつゝ進みしが、道漸く狭く草一面に生えたり。斯くて十七八清里計りにして、又た一の突き出でたる處あり。此處より十清里計りの間は、又た西南の方に向ひて進みしが、余

シールチン
河

等は此の途中にて、石器を作る材料を拾へり。之に依りて此の附近にも亦、昔時人の住へるを考へ得らる。又た前にタルバガの多く居りし處にても、之迄諸所にて得たると同一形式の石器の破片を得たり。之等を綜合すれば、古代に於て此の住民ありしを一層確め得べし。

シールチン
村

出發以來四十清里計りにして始めて一村落到達せり。途中は殆んど山中のみにして、村落は一も無かりしが、茲に始めて村落に達せるなり。之れシールチンアイラと稱する處なり。

此の村は人家三四十あり、蒙古の村落としては相當に大なるものなるが、余等の此の村に入る時、十人計りの兵士、各々馬に跨り、牛、馬等を追ふに用ふる如き長さ鞭を掻い込み、嚴然として構へあるを見たり。彼等には一定の服装無く又た鐵砲等の武器無きを以て、一朝事ある際には、弓矢を以て之に當る位のものなり。彼等の斯く構へつゝありしは、余等を威嚇する爲めなるべけれども、余等は少しも驚かず。寧ろ滑稽とも評すべく、又た武器も持たず、牛馬を追ふに用ふる鞭を持つに到りては、却て惘然の情に堪えざるものあり。一隊の中に一士官ありしが、余が或家に入るや、彼等亦來り、殊に其の士官は傲慢なる挨拶をなせしかば、余は彼に向ひ、貴様は何者なりやと一喝し。其の役人の冠るべき禮帽を戴かざりしを以て、其の缺點を詰り、貴様にして若し役人ならば、帽子を所持する筈なり、然るに貴様は之を持たず、

滑稽なる家
古兵

蒙古士官の
無禮を叱す

蒙古兵士大
に周旋す

早く此席を退けと叱せしに、彼は赤面して出て行きしが、余等に隨行せる士官の帽子を借りて再び入り來り、更に余に對して陳謝せり。之を以ても如何に彼等蒙古人の滑稽なるかを知るに足らん、其の後兵卒等も入り來りて前の無禮を謝し、馬に秣かひ、牛糞を持ち來りて火を燃し、或は茶を運び來る等、余等の爲めに周旋せしが、其他命によりては何等をも辭せずとさへ言へり。之等の事は蒙古旅行に於て屢々際會する事なれども、余は東烏珠穆沁に入りてより、始めて之に會せる現象なり。

余等は數日來既に東烏珠穆沁領に入り居る事なれば、豫め王府に余等の來れるを通知すべしとは、屢々蒙古人に命ぜし處なるが、元來蒙古人は自己の村以外に出るを厭ふ爲めか、一人として王府に行くものなかりしが、何時の間にか王府に通じありしと見え、此の日王府より出迎の役人來るとの通知あり。即ち待つ事少時にして、一人のタイナ書記二人を隨へて余等の宿に來れり。彼等は何れも文官なりしが、最も丁重なる摺袂をなし、又た余等旅行の前途及び何日王府に入るかを問ひ、爾後の旅行最も困難なるを説く等、互に語り合ひしが、彼等は此の事を王府に報告するとて、馬に鞭ちて此處を去れり。

此の附近は天候の爲めか或は水氣の爲めか、地濕氣を帶び、殊に天幕は草の上に設け、其の

王府の出迎

五五

ホシヨ
東烏珠穆沁高
原

上に毛氈を敷く事なれば、非常に氣持悪し。牛糞を燃し其の火氣にて漸く寢に就きしが、又た諸種の調査をもなせり。

此の地も前日宿泊せるシャラホンヨヌホラーの如く山中の村落なり。而して此の村の北方には、今日通過し來れるが如き、突出せるホシヨあり。此の平原は南北三十清里、東西十清里計りもある可く、之も亦烏珠穆沁の高原に於ける村落の状態を呈し、地廣漠として草茂り、兎に角開濶なる處なり。東烏珠穆沁に入りてより、斯る打ち開けたる處は、前日のシヤラホシヨ及び此處を見たるが、此處は却て前日の處より一層其の感あり。

余は此處にて諸種の調査を試みたるが、此の附近なるタブリンと稱する村より、五銖錢を出せり。是れ彼の銅器と關係あるものにして、興安嶺山中五銖錢を存すとは、面白き事實なり。

三、蒙古人の卜占

六月十二日。昨夜より種々の調査に従ひつゝありしが、警護及び給仕の爲めに來り居れる二人の兵士は、余等の爲めに色々の用を辨ぜり。

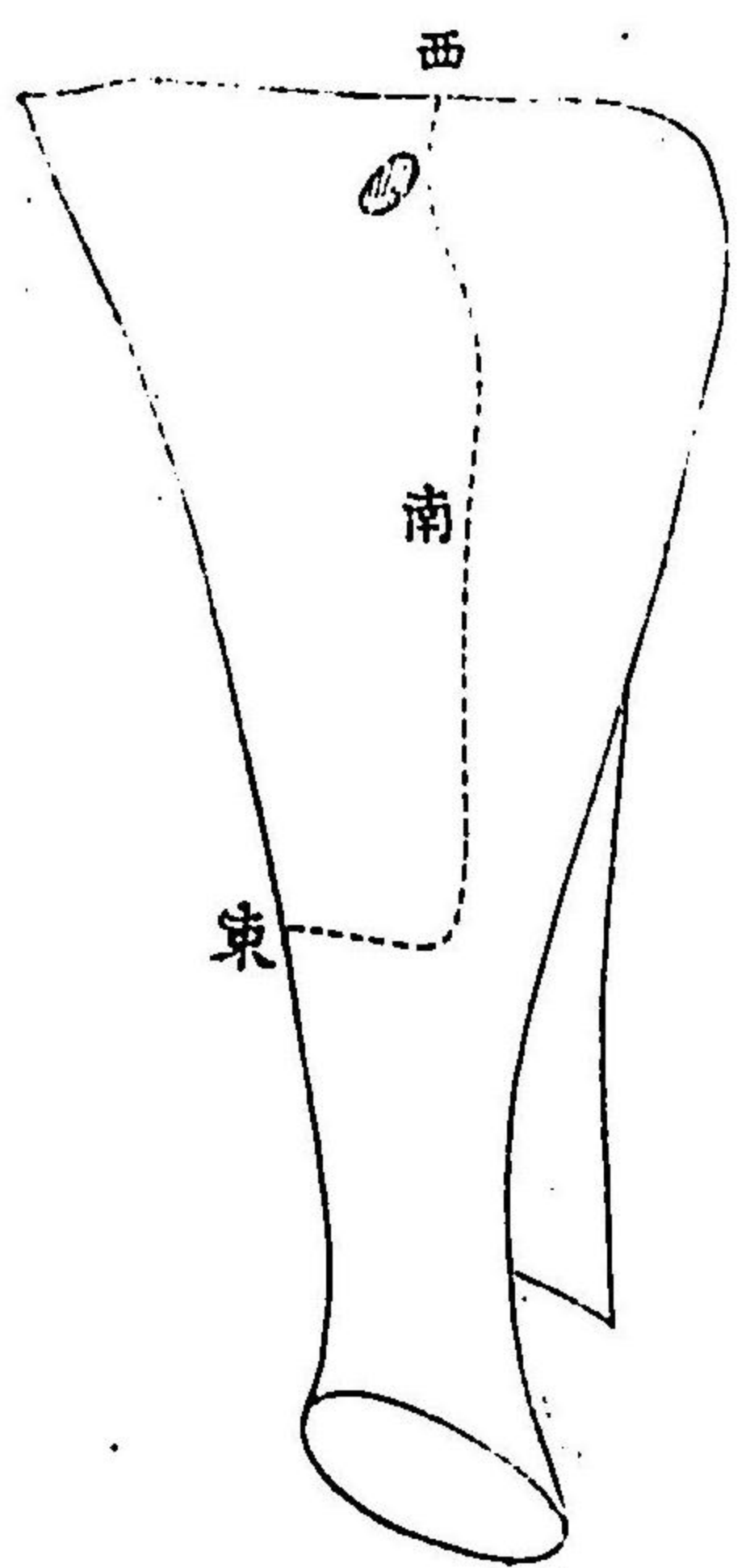
蒙古人の占

羊の右肩骨に限る

兵の占方

余は之迄の旅行中、蒙古人の家に於て、羊の右の肩の骨を、天幕の壁に挿み居れるを屢々見たり。蒙古人は羊の骨を以て、占をなすとの事を聞き居りしかば、或は之に用ふるに非ずやと考へ、其の占方を聞かんと欲せしが、彼等は秘して容易に告げず。昨夜一泊せる家にも其の天幕の隅の處に、之を挿しあるを見たりしかば、余は兵卒に向ひて、此は占をする爲めに用ふるものなりやと問ひたるに、彼は其の然るを答へしを以て、余は更に之に關して種々の事を問ひ訊したるに、此の占は東烏珠穆沁に於て尙ほ盛に行はれ、又た之に用ふるは羊の右肩骨に限るを知れり。蒙古人の占に羊の肩骨を用ふると云ふ事は、既に黑韃事略其他の書等にも見えたり。又近くは彼の Jock Hill 氏の The Land of the Lamis 中にも其の圖を載せて記せり。即ち其の三百四十一頁より三百四十四頁の間に掲げあり。

余は彼の兵卒に命じて、如何なる風に占をするかを試みると次の問題を提出せり。即ち余は外蒙古の喀爾喀に於て、旅行中寒暖計を失ひしが、其は東西南北何れの方向に存するやと云ふ事なり。然るに彼は直ちに占はんと羊の骨を火箸にて挟み、牛糞の上に之を置き、骨の火になりたる後之を取り出し、冷なる處に移したるに、稍ありて骨の上に割目を生じ來れり。彼は其の割方によりて判断して曰く、此の器物は東南の間にあらんと。而して其の方向



を断定するには、其の骨を燒きたる時座せる方角、及び其の骨を置きたる位置によりて云ふなり。此の時の割目は左に圖するものゝ如し。

尙余は種々の事を聞かんとせしに、彼は次第に怖氣を生じ、若し斯る事を告げなば、他日王府より如何

興安嶺方面は今猶盛に行はる

時を冒して出發す

なる罪科を受けんも知り難しと、口をつぐみて言はざりき。而も之によりて興安嶺方面に、尙ほ羊骨の占存するを確め得たり。

夜來の雨潮に到るも霽れず。九時迄に漸く小雨となりしも全くは霽れざりしが、余は急ぐ旅路なれば、用も無く一ヶ處に止まるを欲せず。雨を冒して出發する事となれり。時に午前十時なりき。

道は主として南に向ひ、少しく西に偏したる方向をとり、左右十清里計りは山の無き平原の間を進みしが、十五清里計りにして一村落到達せり。余等は村役人の家に入りて茶を喫みた

車に乗茶を
飲み、
久し振にて
殺食を取る

蒙古役人の
厚意ある贈
物

るに、彼は、モンゴルホロト等を出し來れり。此の家の主人は、メーリンメーリンの役人なるが、東烏珠穆沁の役人中にても最も富めるものにして、其の家は三つ計りの天幕を張り、外に一のマイハンブスを持ち居れり。雇人を多く使ひ又た多数の牛馬を飼へり。此の家の家來出て來り、其の家に入りて茶を喫まん事を請ひしも、余等は片時も早く王府に入らん事を望み居りしかば、其の好意を謝し、車上にて茶の中に乳を入れて飲めり。余等は西烏珠穆沁以來久しく乳と肉とのみを食し來りしが、此處に始めて殺物の食を得たり。此の附近にて殺物を用ふるは、餘程富裕なるものに非れば出來ざる事にして、即ち東烏珠穆沁にては、西烏珠穆沁の如く農業を營まざれば、此の黍も他の南部蒙古人の手より買入れたるものなり。此處にて休息しつゝある中に、雨全く歇みたれば、雖て此處を出發せり。

暫らく進める時、前のメーリンの家來は、余等の後より馬を飛ばして追ひ來り、一種の革袋に入れたる品物を、余等に隨行せる武官に渡したるが、次いで二人共に余等の前に來り、恭しく囊を余等に呈して曰く、此は主人より貴大人に贈らんとするものにして、粗品なれども肉及び黍なり、旅中食物を得るに困難なれば、餓として之を呈するなりと。余等即ち其の厚意に感じ快く之を納めたり。

蒙古人の移
住法先づ井
戸を掘る

ハットボロ
ゲン峠
移住者の一
隊に會ふ

進む事五清里計りにして一の峠に達せしが、其處に二三の蒙古人の頻りに土を掘り居るを見たり。此は井を掘り居るにて、此の附近にて移住せんとするものは、先づ井を掘りて水溜を作り而して後移住し來るなり。水なき地方の人民が移住する有様は、之を見ても知るを得べし。此の峠に至る迄は前日出發せる、シールテンアイラより連續の高原なりしが、茲に再び山路に差しかゝれり。此の山麓にて牛馬非常に多く居るを見たるが、是れ余等の食事せる家の所有なり。暫くありて愈々峠に差しかゝれり。此の峠をハットボロゲンタバと稱す。

此の時峠を降り來る一隊の蒙古人に會ひしが、彼等は何れかに移住せんとするものなり。即ち老幼婦女は車に乗せて主人之を驅り、雇人は牛馬を追ひつゝ從へり。

峠の道を進み行く中に、タルバカの奇聲を發し穴の前に座して、此方を見つゝあるを多く認めしが、余等の漸く近づくや、彼等は直ちに穴の中に隠る。之より道を西南にとり、更に西に向ひて進みしが、時に夕陽既に没し夜色漸く到る。斯くして黄昏一村落入れり。

時に先發隊たる役人既に來り居りしが、彼等は天幕の中にて盛に火を燃き、天幕をかゝげ、遠くより火の認めらるゝ様にして待ち居りしを以て、余等は直ちに其の天幕の外に牛車を止めしめたり。本日の行程五十清里計り。

バイチャガ
ン村

東烏珠穆沁
人の親切

途上の光景

興安嶺山中
の月

此の村はバインチャガンと稱す。余等は村内にて最も當めるものゝ家に入りたるが、役人等は食物の準備等に忙しき有様なり。此の家の主人夫婦は未だ年若き者なりしが、非常に親切に周旋せり。東烏珠穆沁にても役人、兵士等は性質悪しきも、一般の蒙古人の質朴なるは此の若夫婦に見ても明なり。

此の日通過し來れる地形に就て一言せん、シールチンより晝食をとれる處迄は、山と山との距離十清里計りも距れる平原の中央を歩み、中食せる處より峠に差しかゝり、峠の上を十清里計り進みて、再び兩山の距離六七清里計りなる平原の中に出て、而して遂に此の村に入るなり。此の村も亦丘陵的なる山の上に、位置せる高地にして、下に平原を望み風景少しく佳なり。

夜に入りて雨雲一掃せられ、空には十四日の月牙を渡り、身の朔北にあるを想ひて一種の詩情を惹き起せり。余等の今見る月は、興安嶺山中の月なるを思ひ感慨殊に深し。此の日も途中にて石鏃の屑の如きもの、一二片落ち散るを車上より見たり。夜は牛糞を燃して暖く寝に就く。

四、東烏珠穆沁王

東烏珠穆沁
王府に入る

王府の優待

又馬を贈ら
る

貴人に對す
る禮
王府の御抱
力士

六月十三日。今日は愈々王府に入らんとて、隨行の役人を先發せしめ、王府に余等の到着を報せしむ。午前八時半車を發して出發せり。道は丘陵の上にして、先づ西南に向ひ次いで南に轉じたるが、途上右方に一喇嘛廟を見る。更に方向を東にとり十五清里計りにして、王府に到着せり。時に正午十二時頃。

王府にては既に余等の爲に、蒙古の天幕を造らへて待ち居りしかば、直ちに之に入れり。余等の王府に入るに先だち、二三の役人恭しく出迎へたるが、王府に入るやチヨソクチ、メーリン等の役人など來りて挨拶し、又た王より色々の馳走を贈られ、且つ進物として名馬の一頭を贈らる。之れ余等の厚意に酬ひんが爲なり。前に西烏珠穆沁王より白馬を贈られたるが、今又た此處にて栗毛の駒を得、遂に二頭の馬を所持するに到れり。而も兩地方の馬には各特色あり。此は蒙古の旅行にて屢々遭遇する處なるが、其の風習として貴人には馬を贈るを例とす。東烏珠穆沁王より名馬を贈られしも、亦此の意味に外ならず。

王府に於て種々の調査をなせしが、其の最も面白いのは、蒙古の王府にて力士(ブナト)を

王府を出發す

王府に於る余等の調査

東烏珠穆沁王及び其の格式

東烏珠穆沁人の性質

召し抱ふるの風習なり。此は我が國古代に行はれしと同じきものにして、田舎より勢力あるものを召して、扶持を興へ置き、儀式の時に角力せしむるものにして、此の王府にも彼等を抱へ居れり。而して蒙古の相撲は、オホの祭に行ふを例とす。余等は王府に於て之に關する調査をなせしが、又た其の寫眞をも撮影せり。今日は未だ時間ありしを以て、之を利用して日記の整理其他に一夜を送り、明日は愈々此處を出發せんと、旅裝其他の準備を整ふ。

六月十四日。愈々東烏珠穆沁王府を出發し、扎嚙特方面に向ふ事となれり。出發に臨み余は種々の調査の残れるものを取調べたるが、余の妻も亦、王府の令人に就きて、蒙古の歌謠等を調査し、其の二三は之を樂譜にとれり。

余は以後の旅行を述ぶるに先だち、東烏珠穆沁王府の状態、及び其の地在住蒙古人の性質に就て聊か述べんとす。

東烏珠穆沁の北京朝廷に於ける格式は、西烏珠穆沁より稍々下り、貝子の格式なり。而して東烏珠穆沁の貝子は逝去し、今や其の子息襲ぎ居れり。而も彼は年齒漸く十三歳なれば、トソラクチ、チヨラクチ等専ら之を輔佐しつゝあり。

東烏珠穆沁人は、前にも述べたる如く、西烏珠穆沁人に比して性質慍悍なるのみならず、狡

幼王の威嚴行はれず

幼王の平生

役人の専恣

其の軍隊組織と外國旅行者の注意

猾なるもの、如く、其の役人等に於て最も甚しきものあり。殊に當時父王逝去し、新に代り立てる主宰者は年尚幼なれば、其の家臣等は各々我意を振舞ひ、王の威嚴は殆んど行はれ居らざるが如し。

以前或る外國人は此の地を旅行せる際、コダック寫眞器を幼王に獻せしものと見え、幼王の御氣に入りの若役人は、此の寫眞器を余の處に持ち來り、如何にせば撮影し得らるかと尋ねたり。之によりて考ふるも、貝子は年若くして、専ら遊戯にのみ追はるゝを知るに足らん。

而して王府の事務を執り居るは、トソラクチ、チヨソラクチ等の役人なるが、彼等は西烏珠穆沁の役人に比し、頗る傲慢にして且つ馬鹿氣たる處あり。談判交渉其他一も確固たる精神を認むる能はず。元來蒙古に於て其の王死せばトソラクチ、チヨソラクチ等は、非常に權力を加ふるを例とするものなるが、今此の東烏珠穆沁に於ける状態は、其の最好適例なり。

前にも述べたる如く、東烏珠穆沁は一般に武張り、即ち軍隊組織と言はんが如き有様なるが蒙、古語にて此の状態をチルクテと稱す。されば凡て外國人に對する舉動等も、他地方と其の状況を異にするものあり。故に余等外國人が此地を旅行するには、勢ひ他地方と異なりたる注意を拂はざるべからず。

王の邸宅を隠す

禮を知らざる兵士

其の惡戯

蒙古人固有の宗教

シャーマン巫女

此處の他の王府と異なる點を擧げんに、他の王府にては、概ね其の政治上の事務を執る役所の附近に、王の住家ありしが、此處の衙門にては事務を執る天幕二三見ゆるのみ。王の居る處は丘陵の中に隠れ、他より見られざる如く建てられたり。此は他に於て余等の曾て見ざりし處なるが、此は外國人等に王の居る處を見せざらしめざる注意か、或は又王の住宅餘り立派ならざるが故によるか、兎に角不思議の感を禁ぜざりき。

之等役人の下に位する兵等は、殆んど禮を知らざる野人にして、西烏珠穆沁人とは比較にもならざる位なり、其の一例を述べんに、彼等は、余の先に西烏珠穆沁王より賜はりたる馬を竊かに乗り廻し、或は余等の車を故意に道の惡き處へ引込む等、實に小兒らしき惡戯をなして喜び居れるが、之等は偶々以て彼等性質の一般を表はし居るものならんか。

蒙古人は今日一般に喇嘛教を信仰し居れるも、此の宗教は元、西藏より傳はり來れるものにして、蒙古人には別に固有の宗教即ちシャーマン（巫女）ありしなり。此のシャーマンは昔時、西伯利亞、滿洲及び蒙古に、盛んに行はれたる宗教なるが、蒙古人は一度喇嘛教を信仰して以來、此の固有のシャーマン教は次第に衰へ、漸次蒙古人等は喇嘛教化せらるゝに至れるなり。而も西伯利亞に於ては此のシャーマン教今尚盛んにして、又た彼のダウール、ソロン等も

役人シャーマンの行はるるを秘す

ウルギン河

尙此の宗教の信者なり。余は曾て興安嶺山中及び其附近には、尙シャーマン教信者ある事を。即ち此の東烏珠穆沁地方に於て、今尙其の宗教の行はれ居るを屢々耳にせるを以て、余は役人を介して、此のシャーマンの巫女を呼ばんとせしに、此の地は喇嘛教の勢力盛なる處なれば、余等に此の事を聞かざるを厭へるもの、如く、シャーマン等は其の領地内にあらずとて、如何にしても實を吐かさざりき。而も他の蒙古人は、此の地に同教の行はれ居り、殊に王府の儀式等には、シャーマンの遺風を加味すとさへ言へり。されば此の事は疑問として、此處に残し置かん。

調査漸く終りしを以て、余等は午前十一時頃王府を出發せり。道は等しく丘陵の上なりしが、五清里計りにて一帶の低き土地に出でたり。此はウルギン河畔の地にして、河畔は沖積層をなし、ウルギン河は其の間を流れ居るなり。

此の處より王府を望むに、其の存在する位地は高き丘陵の上なるを認む。而して此の丘陵は或る意味よりすれば、ウルギン河岸をなすと云ひ得べし。即ち東烏珠穆沁王府の位置は、ウルギン河畔の丘陵にありと言ひ得るなり。此の河畔の沖積層は非常に廣きものなるが、其の前方に當りて又た一丘陵あり。此は王府の存在する丘陵と相對するものなり。

余等は王府のある丘陵を下りしが、其の直下に一喇嘛塔あり。更に十清里許り進みてヌミンムと稱する寺に達せり。此の寺は稍々大なるものにして、其の形式九分は支那風にして、一分は西藏式なり。

此の寺に沿ひて暫く進み始めてウルギン河に達せり。河は柔かき沖積層の間を流れ、水量普通なれども、敢て深しと言ふにもあらず、河の附近には菖蒲多く、一面に生えて居る様頗る美し。又此の河岸の潰れたる處に例の石の剃刀、土器等の存するを發見せり。之によりて此の地にも往時住民ありしを知る可し。

余等一行は河を渡りてより、五清里許り歩みて始めて丘陵に達せり。即ち前の王府の存在する丘陵と、此の丘陵との間に存する沖積層の土地は、約十五六清里あるを知らん。往時乃ちウルギン河は餘程の大河なりしも、今は只其の中央部のみを流るゝものたるを考へ得らる可し。而も雨期には今少しく大なる流れとなるならんか。

余等は此の丘陵に上りしが、道は是に平行して傳ひ行く事となれり。而して其の高さは王府の存在するものと同じく、亦たウルギン河の右岸をなすものなり。此の附近よりウルギン河を隔て、王府を望む景色は、絶佳にして且つ眼界開闊頗る快ろよし。余等は此の途中に於

花昌蒲
河畔の遺物

チャガステ
ンホラー村

ても石剃刀、土器破片等を拾ひしが、土器の様様其他は、漢河一帶の地方にて得たるものと異ならず。此の附近は又た、先日來の地方と同じく大なる樹木一もなく、地上只草の生ゆるのみ。

余等は此の丘陵を更に進み行きしが、午後四時頃チャガステンホラーと稱する一村落到り着し、今夜は此處に一泊する事とせり。

余等の宿泊せる家は富者なりしも、余等を泊むる事を厭ひ、之より少しく進めば美しき家もありと咄き、甚だ冷遇せしが、余等は強て此處に一泊する事とせり。

余等は王府出發の際其の役人に向ひ、兵士を隨へ行くを欲せざれば、文官を隨行せしめたと大に交渉せし結果、王府よりタイチ一名隨ふ事となり、是迄余等と共に旅行せる悪武官及び二人の兵士は此處より歸る事となれり。然るに彼等武官は、余の西烏珠穆沁王より賜はれる馬を、盗み歸らんとする景色見えしかば、余は大に叱責を加へしに、彼等も流石に面を合す事も出来ざりしと見え、三人共馬を置きて逃げ歸れり。之に見るも、此の附近に於ける士官兵士等の悪風を知るに足らん。將來此の附近を旅行せんとする外國人は注意すべき事なり。

余に隨ひ來れるタイチも性質の餘り好き方にも非ざりしが、武官よりはと思ひ不止得彼

文官の隨行
を王府に要
求す

悪武官余の
馬を盗まん
とす

を連れ行く事とせり。

三

面白き燈火

余は此處にて種々の調査をなしたるが、其中に於て面白きは、此の家の燈明に、臺は土にて作り其上に金の油入を置き、之にバタを入れ綿を捻りて火を燈し居るを見たり。此の臺になし居る土焼は蒙古人の作るものにして、是れ會て彼等の祖先が土器を作りし遺風なるべし。而して此の燈明臺の高さは四寸位にして、上の燈明皿は直徑四寸六分、下部の臺は直徑二寸八分あり。其形狀は鼓形を呈せり。

五、王府出發

六月十五日。愈々此の村を發して扎噠特方面に向はんとす。出發に臨み隨行の役人は余に謂て曰く、今日の旅程は途中人家村落一も無ければ、此の村より水、飲食物、天幕等一切の必需品を携帶し行かざるべからずと、而して彼は早朝より車及び之等の準備に忙しげに奔走し居れり。

飲食器具を携へて扎噠特に向ふ

此の村落附近の地形を概説せんに、其の位置ウルギン河畔の丘陵にして、こは東方に延長し一大高原をなせり。而して南東の方、高原の前方は即ち山にして、此の村落より山のある

興安嶺の最高處に向つて進む

方を望むに、山は互に相重なり合ひつゝ、走るを見る、而して此の連山の頂は何れも鋸齒狀をなせり。余は蒙古人に向ひ、彼の鋸齒狀をなせる最も高き山の名稱を尋ねたるに、蒙古人はハンオーラと答へたり。即ち其の山の形狀及び名稱によりて、其の明かに興安嶺なるを知り得たり。即ち余等は是より興安嶺の高所に向ひて進み行くなり。

一切の準備漸く整ひたれば、余等一行は午前七時頃愈々此村を出發せり。例の如く牛車により、其に又た飲物天幕等を積み、東南の間に向ひて進みしが、道は高原にして草多し。又たジュールと稱する動物の、群をなして走るを遠くより望み見たり。而して此の高原には一軒の人家もなく、又大なる樹木さへも見るを得ず、唯だ東南の間に山脈の走るを望むのみ、余等の左右及び後方は際涯なき高原なり。

廣漠たる大高原

暫く進む中に、遠くより一輛の車を牽き來るものを認めたり。彼は漸く近づき來るや余等は一禮せしが、之れ余等一行の爲に水を持ち來りしものにして、車の上に大なる瓶を載せ、而して牛車を操るは喇嘛の小坊主なり。彼も一行に加はり更に東南に向ひて旅行を續く、村を出てより十清里計りの處にて、道の左方に一小池あるを見たり。

斯く單調なる高原を歩む事二十五清里にして漸く山に入る。之より地形全く改まり、山中

興安嶺を横
断す

を歩む事となれり。此の山こそ早朝余等の東南方に望みたるものにして、この邊に於ける興安嶺中最も高さ處なるが如し。山と言ふも勾配左迄急ならず、殆んど上りと言ふ事を感じざる位なり。山は岩石兀立たるものなりしが、余等は其の間を山の走行を横断して進めり。即ち山の走行と余等の進み行く方向とは恰も十字形をなし居るなり。

山中を歩む事五清里計りにして一時に達す。此處にはオボ即ち堆石あり。概して蒙古人は峠の最高處に石を積み、オボを作るを例とするものなれば、此處にオボの存するを見て其の最高所たるを考へ得らるゝなり、此の峠を蒙古語にてハイラインゴクドインタバと稱す。之を譯すれば二つの神聖なる峠と言ふ意なり。此の名の起れる所以は、此の峠の左右に著しく二つの巨巖現はれ居る爲めならんか。

此の附近は巖石兀立し、地上には草一面に生え居れり。余等の此處に来れる時は恰かも晝過なりしかば、暫く此處にて休息せんと、車に積み來れる天幕を張りて休憩所となし、其の一方に圍爐裏を造りて牛糞を燃し、湯を沸して茶を喫み、羊の肉等にて愉快に進食をなせり。

蒙古人の用
扱好

蒙古人は斯る時相撲を取るを以て樂とす。此の目水を運び來れる喇嘛の小坊主、牛車を牽

輕便なる旅
行用天幕

き來れる若者等は即ち相撲を取りたるが、余等は其の勝負によりて彼等に品物を與へ、愉快に休憩せり。蒙古人は斯る時には頗る無邪氣にして、其の天真爛漫なるを示す。

蒙古人等の斯る旅行の途中等にて用ふる天幕は、普通の時のものより少しく簡單に作れり。彼等は此の旅行用天幕の事を、マイハンブスと稱す。之は厚き布にて作り毛氈を用ひず。此の方法はもと蒙古に無きものなれば、支那人之を教へたるならん。乃ち其の方法は頗る簡單なり。先づ地上に二本の棒を立て、其の棒の兩尖端に一本の棒を架しあるのみ。其上に布を蔽ひ、布の中央部は上に架せる棒に附着せしめ、又は布の下端には多くの糸を付し、之を地上に立てたる小さき杓に縛り付け、之にて天幕は完成するなり。

此の地には又た種々の草花咲き満ちて頗る美し。幸子はテントより這ひ出し、之を摘みては獨り打ち微笑み居りき。

余等此の時の食事は羊の肉のみにして、他のものはなかりき。食事終りしかば更に旅行を繼ぐる事とせるが、先に水運び來れる喇嘛僧は、此處より一人歸る事となれり。

次に余は蒙古人の冠物に就て一言せんとす。

蒙古人は冬は重に毛の帽子を冠るを例とすれども、夏季は餘り暑ければ之を冠る能はず。

蒙古人の冠
物

鳥帽子と巻布

故に多くは手拭の如き布を以て頭を巻き、頭巾、折鳥帽子の如き形をなす。而して其の状は我が國の昔の有様、乃ち古墳の側に立てたる、埴輪土偶の頭部に布を巻ける風とよく似たり。蒙古人の此の風は餘程古きものなる可く、鳥帽子はかくの如き風の、漸次進歩したるものと思はる。日本に於ける鳥帽子も、即ち埴輪土偶の頭部に巻ける、布の如き形状より懸て鳥帽子となれるもの、如し。

余等一行は此處を出發し、尙ほも東南の山間を進みしが、暫く進む中に日は西山に昏つき、月東天に現はれ來り。山中の道は漸く暗くなり來り、行けども、人家村落無く、興安嶺の脊髓をなせる最高處の、闇を辿りて進みしに、午後八時頃漸く一河岸に達せり。ホルレンコロと稱するは之なり。峠より此處迄は二十五清里の里程なり。

對岸附近には人家あるが如けれども、夜の事なれば何處に人家あるかさへ明かならず。たゞ頻りに犬の吠ゆるを聞くのみ。一行は殆んど途方に暮れ、如何にせんかと迷ひしが、この對岸は既に鳥珠穆沁領にあらず。東扎嚙特の管轄なり。余等は策の施す可きなく空しく、河岸を徘徊しつゝありしが、一行中の一二のものは、馬を躍らして河を渡り前岸の村落に到り、余等一行の此處に來れるを告げたり。暫らくして彼等は其の返答を齎らして歸り來り、今は

興安嶺山中
に行き暮る
ホルレン河

空しく河岸
に彷徨す

鳥珠穆沁領
を離る

濕氣ある河
岸に露降す

夜中の事でもあり、一夜丈は河岸に天幕を張りて過し呉れとの事なりしかば、止む無く河を渡りて其岸に一宿する事となれり。

此の河岸は草一面に生え、地は濕氣を帯びたる上夜半の露夥しく、天幕は張れるも濕氣に困難せり。附近より牛糞を集め來り、盛んに之を燃やし、辛うじて假寐の夢を結べり。

此の日經過し來れる道は、殆んど山の間に於て、此の河に來るには、非常に下りとなり居るもの、如し。而して余等の通過し來れるは、興安嶺の脊髓山脈となり居るや明かなり。

此處の村落の總戸數は、河の兩岸を合して五十戸計りもあるが如く、兎に角大なる村落と言ふべし。

第十二 東西扎嚙特

一、東扎嚙特に入る

六月十六日、朝起き出づれば、既に扎嚙特の役人余等のマイハンブスに來り居れり。彼は東鳥珠穆沁役人の紹介にて來りて挨拶せり。爰に於て東鳥珠穆沁の役人は訣を告げ此處より歸り、余等は此の扎嚙特の役人と共に旅行する事となれり。

扎嚙特領に
入る

前夜は暗かりしと、且つ余等は疲れ居りし爲め、直ちに打ち臥したるが、今朝起き出て、此の附近の有様を見るに、余等は河床の草の上に寝ねたるなり。此の草は處さらはず、一面に生え居りしが、其或は紅に或は黄に白なる花の露重げなる風情、實に樂園とも言ふ可き美しさなり。河は此の草花の間を流れ居るなり。又其の地形を見るに、河流の側は低き沖積層をなし、其の幅凡そ五清里もあらんか、而して此の沖積層の左右は興安嶺の山中なり。

此の地に來りて扎嚙特の役人、及び牛車を牽き居る蒙古人の風俗を見るに、是迄東西烏珠穆沁、外蒙古等にて見たると大に異なり、曾て經過したる彼の巴林地方の、蒙古人の風俗と近づき來れるもの、如し。即ち之を概説すれば。男子は毛の帽子を冠り居るもあれど、此の時は氣候漸く暖くなりしかば、多くは手拭を以て頭を巻けるも其形狀、烏珠穆沁の帽子とは大に異なるものあり。又た男子の穿てる靴は、凡て布製にして革製のものを見ず。長き煙管を腰に差せるが、斯の如きは余等の曾て見ざりし處なり。煙草入は長方形のものにして、其の上部を縛る様にし、赤青製の布を以て之を作り、其の下ぐる處には五色の垂れを付く。之等は男子の風として、異なる點の重なるものなり。

言語も亦烏珠穆沁と稍や異なり來り、殊に其の方言に於て然るを見る。

河畔の樂園

扎嚙特の風俗

外蒙古と異なり巴林と相似たり

男子の風俗

言語

烏珠穆沁と扎嚙特との境界線

人情一層狡猾なり

昭烏達盟に屬す

扎嚙特

位置興安嶺山中に在り

春の短かき大陸の氣候

之等の事實によりて考ふるに、烏珠穆沁の蒙古人と言ふは、前日經過せる峠以北に居るのみにして、其の以南には居住せず。即ち扎嚙特と烏珠穆沁との境界は、前日越え來れる大山脈を以て、區割せられ居るものにして、僅々一日行程と一山脈とを距つるのみにして、方言上、風俗上に迄、斯の如き差異を表はし來れるは、餘程注意すべき事なり。而して余等に隨行せる役人馬夫等の性質を見るに、東烏珠穆沁の蒙古人より、一層狡猾なるもの、如し。抑も扎嚙特蒙古は、所謂昭烏達盟に屬するものにして、乃ちオーハン、奈曼、巴林、阿魯科爾沁、翁牛特、克什克騰、喀爾喀左翼と同一盟に屬するなり。而して扎嚙特は東西の二部に分れ居れるが、今余等の到着せるは其の東扎嚙特なり。

又た扎嚙特は其位置より見て、興安嶺中に於ける蒙古と言ひて可ならん。牛車の用意も整ひ、人夫も來りしかば、余等は愈々此處を出發せり。道はホルン河の左岸に沿ひて進みしが、地形は山と山との間に於て、地には一面に草生をたり。

此の時は恰かも夏の氣候にして非常に暑かりし。元來蒙古等の如き大陸の氣候は春季短かく、直ちに夏となるは之等に見るも明かなり。

余等は牛車に乗りて進みしが、隨行の蒙古人と、種々の談話を交へ大に智識を得たり。河畔

ホルレンコ
コ村

五

の道を進む事五清里計りにして一村落に達せり。ホルレンコロヌアイラと稱す。此の日向ほ
進み得可きなれども、蒙古人等は之より先に人家村落なければ、今夜は是非此村に一泊せら
れたしと懇願し、如何にするも立たんとせざれば、行程僅かに五清里計りなりしも、止む無く
此處に留る事となりしが、餘れる時間を利用して種々の調査を試み、或は此附近の山、丘陵
等に上り、色々の取調べをなせり。此處は余等の扎嚙特に入りてより最初の村落なり。
余等の此の村に入りて第一に感ぜしは、其の住居の構造、婦人の風俗の之迄の地方と著し
く異なる事之なり。

扎嚙特の家

住居は毛氈を以て張れる天幕なく、草を以て葺ける天幕、即ちウブスングル(草の家)多く、
巴林地方と似たるものとなれり。此のウブスングルに就ては、余は既に巴林の項に於て述べ
しが、其の構造の骨組は他の蒙古に異ならずと雖、其の骨組の上の屋根及び壁には、草の類
を葺き居れり。されば家の内より外は透かし見らるゝ有様にして、夏期向としては最もよく、
風の欲しき時は、其の簀の間を少しく透かし置くなり。入口には一枚の戸ありて毛氈の垂を
下ぐ、然れども之に模様を付くるが如き事は行はれ居らず。之迄の蒙古人の家を見るに、天幕
の中は土間にして、草の上に毛氈を敷きて寝るを普通とせるが、此處にては土間に板を敷き、

女子の風俗

其上に毛氈を敷く等、之迄の地方と大分異なるものあり。

又た女子の風俗を見るに、其の衣服の長さ殆んど足に達する位にて、袖は總て廣く且つ大
きく、而も其上にオ、チの如きものを着し、足には布製の長靴を穿ち、之に色糸を以て種々
の模様を付せり。又た其の頭髮の摸様も全く變り來れり。而して彼等は其の衣服の色等、主
として緑を用ひ居れり。

僧侶の權力

又た本日の項に於て、更に注意すべきは僧侶の事なり。元來蒙古地方にて、僧侶の權力は
頗る盛んにして、役人を凌駕する有様なり。即ち席を同うする際には、役人の上に座する
が如し。加之僧侶は又た蒙古人の一家の世話をなし、爲に迷惑を及ぼす等の事多し。余等
の此處に到着せる際も直ちに僧侶來り、役人の居るにも拘らず色々の事を喋々し、役人の
上座に着き傲慢の態度等をなせり。余等は之迄斯る事を見ざりしが、茲に於て始めて其例を
見たり。

扎嚙特の四
圍

此の村の地形は山間に位置す、而してホルレン河を遡れば阿嚙科爾沁に達すべく、之を下
ればダラハンに到るべし。又河を渡りて北方に進めば烏珠穆沁に出づ。而も扎嚙特人は同盟
の關係上より、又た山脈を距つる爲め、烏珠穆沁とは餘り往來せざるも、阿嚙科爾沁及びダ

ダラハン人の悪感化

農業盛なり

マンハラの遺物
ビードロを
存す

アルギンタ
バ上の花

ラハンとは相往來す。

ダラハンの蒙古人は、非常に性質悪く且つ人靡れし、殆んど支那人風になり居るが、之地を接し居る爲め、東扎噶特人も性質狡猾になり居るが如し。

烏珠穆沁にては東西共牧畜を主とし、農業は少しも營まざりしが、扎噶特にては農業盛んにして、牧畜は盛ならざる風なり。其結果余等は暫らく食はざりし、モンゴルアムを食ふ機會多くなれり。

六月十七日。村役人二人及び人夫、牛車等の準備整ひしかば此の村を出發せり。道は主としてホルレン河の支流を遡り、山と山との谷間を東南方に向ひ、興安嶺山脈を横斷して進めり。

途中マンハの表はれ居るもの處々にありしが、之等に於て之迄得たると少しも異ならざる土器を三四個拾へり。尙此處に不可思議なるは、之等の遺跡に於てビードロの破片の、砂に曝され居るを見たり。之れ最も注意すべき事ならん。

河を遡り行く事十五清里許にして一の峠に達せり。アルギンタバと稱す。此邊一面に小さき車充滿し、何れも黄色の花を咲かす。此の草花の間を進み、暫らくして又一の水源地に達

河畔の湿地

食物の準備
なく困却す

扎噶特役人の不親切

せり。而して河に沿ひて、或は上り或は下りつゝ、谷間を進み、二十清里計りにして又た峠に出でたり。之をムルグセンタバと稱す。此の附近左方に赤き巖の屏風の如く峙つものあり、蒙古人は之をオトリランハタと稱す。

此處に至る間の光景を述べんに、河の沿岸は濕氣多き地にして、若し雨量多きに際すれば一面水となり、通行非常に困難となるべし。而して其の幅約五清里もあるべく、前日の河床と同じく草花一面に咲けり。此の道は濕氣を帯び歩行困難なるが、別に山の裾に當りて一道路あり、河水多き時は其方を往來するもの、如し。

此の峠に來る間には、人家村落一も見えざりしが峠の前にて、西烏珠穆沁より鹽を積み來れる、牛車四五十輛と會へり。

余等一行峠の處にて休息する事とし、余等は車より降り、牛は車より解きて秣かひ、又た水飲ましむ。此の時余等の最も不都合を感ぜしは、食物を持ち來らざりし事なり。是迄の地方にては、前途に人家なき處なれば、前の村落より肉其他の必需品を携へ來るを例とせしに、此扎噶特に入りしよりは、役人等は少しも斯る事を顧着せず、其用意はなし居らざるなり。之等に見るも人情異なり。次第に狡猾になり來れるを知るに足らん。又役人自身も食物の用意

無かりしかば、止むを得ず余等は、此の日、宿泊せる家の主人より贈られたる、乳にて作れるホロトとて、チースの如きものを取り出し、之を役人其他に分與しやりたり。

峠の處に亦西烏珠穆沁より、鹽を積み來れる牛車二十臺計りの一隊、余等より前に休息して茶を喫みつゝありき。前に峠に達する前に出會へるも、今此處に休息し居る一隊も、何れも西烏珠穆沁の喇嘛僧其の主たるものたり。西烏珠穆沁には、曾て前にも述べたる如く鹽湖あるをて、彼等は之を製鹽し、其の管下の地方のみならず、廣く支那の地方へも輸出するなり。而して此の各地への輸出は、殆んど喇嘛僧の役の如くなり居り、牛車に何程かの鹽を積みては諸方に賣捌に出で、而も其の得たる代金は之を王府に納むるなり。斯の如く各地に鹽を輸出するを以て、西烏珠穆沁は頗る富み居るなり。

彼等の外に又た蒙古人夫婦の、余等の傍に憩ひて茶を喫み居るあり。余は彼と談話を交へたるに、彼はトセツト管下のものにして、今旅行の途次なりと語りしかば、余は更にトセツト蒙古に就て彼等に尋ね、得る處多かりき。

余等は暫らく休憩の後に出發して、峠を越えかゝりしに、河流再び現はれ來り、東南の方面に向つて流れ行くを見る。余等は再び此の河に沿ひて東南方に進めり。こはボロギン河に

注ぐ處の一支流なり。

余等は河岸に沿ひて下り行きしが、峠より二十清里計りにして始めて河床に達せり。此の河床は即ちボロギンコロの流れ居る處なり。

河畔を進む間は恰かも、我國の山中を行くの思ありき。而して此のボロギン河に下らんとする山の上には、一面芍薬の花の蕾せるを見たり。蕾開かば滿山芍薬の花にて美しき事なるべし。曩に陰山々脈の繼ぎなる、熱河と喀喇沁との間に於て、此の花の多きを見たるが、今回の旅行にて此の花に會せるは始めとす。而して此處にある芍薬は何れも白色のものなるが、蒙古語にて此の花をマンダランチックと稱す。

思ふに彼の牡丹花は、北方支那人の、此の花の野生を栽培して、今の如き變種を作れるに非ざるかと考へらる。如何となれば支那語の牡丹と云ふ名稱は、もと朔北民族の言葉を、其儘に用ひ居るに非ざるかとの疑あり。即ち蒙古人の芍薬を呼ぶにマンダラを以てするは、支那語のムータンと發音に於て似通へるものあればなり。是等は餘程注意すべき事ならん。

ボロギン河に到る迄は、殆んど山の間のみを歩み來りしが、今此の河岸に下りたるに、相當の大河にして水亦普通に流るゝを見たり。而して其の周圍は山を以て蔽はる。

禮装せる蒙
古役人路傍
に出迎ふ

ナルホンダ
ラン村

役人の優待

喀喇沁の商
人

河の前岸即ち南方に一村ありしかば、河を渡りて其の村に行かんとせしに、其の村の役人等は既に一行の到着を知り、禮帽禮服にて馬に騎し來り、路傍に迎へたり。之は丁重なる方法にして、余等も其の好意は之を謝し、直ちに役人の家に案内せられ、其の家に一泊する事となれり。

此の村落はナルホンダラン村と稱し、又ボロギン河をも一名ナルホンダラン河と稱す。村の戸數は大凡三十計りもあり。

余等の入れる家の主人は、タイチ以上の役人なるが、此の夫婦は非常に余等を待遇し、又たよく禮義を解し、詞遣ひ等も最も丁重なり。此の夜の饗應として羊一頭を料理して出せり。前日の家と此の家との待遇を比較すれば實に雲泥の差違なり。

此處に種々の調査をなせしが、茲に一言すべき事は此の村の端に、天幕を張り居たる商人ありしが、此の村の蒙古人の語る處によれば、彼等は喀喇沁の蒙古人にして、酒煙草等を持ち來りて商賣を營み居るなりと。而して彼等の天幕はマイハンブスを用ひ居れり。

此の酒及び煙草を持ち來り居るは、最も注意すべき事にして、即ち此地方の蒙古人の最も好むべきものは此の二品なるなり。酒は多量の水を加へたる高粱酒にして、煙草は葉煙草なる

が、此の地方人の所持する獸皮及びバタ等と交換するなり。此の附近の蒙古人は、乳より製する即ちクミスを用ひ居れるが、高粱酒は作らず。斯く彼等喀喇沁の商人は、蒙古人の嗜好に乗じて商賣を營むなり。

此の附近の蒙古人の言ふ處を聞くに、喀喇沁蒙古人は純粹の蒙古人に非ず、支那人と同じものなりと。此は其の性質極めて狡猾にして、利に敏きを言ふものなるが、此の附近に酒煙草等を持ち來り、獸皮其他と交換して行くに見るも、必ずしも其の誣言に非ざるを知らん。蒙古人にして蒙古に來りて商賣するは、喀喇沁人以外には見ざる處なり。此の邊の蒙古人等は、此の喀喇沁の蒙古人を非常に惡み、且つ之を卑しめ居る風なり。彼等の言ふ處によれば、之等の商人は喀喇沁王より資金を出して、其商賣を營み居るなりと。又之等の商人は賤しき者なれども、何れも理藩院の護照を持ち居るを以て、此の地方人は彼等の狡猾なるを惡みつゝも、手を出し得ざれば、止むを得ず敬遠的態度を執り居るなりと。之等は喀喇沁王の如き人の仕事に非ざれば出來ぬ事なり。

余等の此の家に入ると共に、此の日早朝より隨行し來れる役人は、逃ぐるが如く其の家路に歸り行けり。

喀喇沁商人
を惡む

此の夜は色々の調査をなして一泊せり。

癸

二、興安嶺の峻坂を攀つ

六月十八日。午前八時頃宿泊せる家の主人を随へて、ハルホンダラン村を出發す。暫らくボロギン河に沿ひて進みしが、懸て此の河に注ぐ一小流に會し、茲に道を轉じ、主として此の小流に沿ふて進む。道は次第に爪先上りとなり來れり、余等の進める道の東方拾町計りを距て、別に一道路の通ずるあり。此の日喇嘛僧の一行、此の東方の道を通ずるとして、其の道を騎馬の役人及び僧侶等の、北方に向つて進み行くを見たり。

道は次第に上りとなり、遂に全く山路に入れり。此の附近は正しく興安嶺の山中に位するものなるが、此邊一帶に樹木多く、余等の之迄經過し來れる地方と大に趣を異にす。今や樹木盡く青葉を以て滿され、恰かも日本の初夏の如き感想起れり。

山路を進む事十五清里許りにして峠の麓に達せり。峠はヘブリンダバと稱す、即ち屹立せる峠の意なるが、此の名に見るも其の峻險なるを知る可し。

車を捨て、峻坂を攀つ

余等は此の峠を上り始めしが、道急にして牛馬頗る困しむ、即ち余等は車を捨て、徒歩に

興安嶺山中の普葉若葉

て之を上り行けり。此の附近一面に樹木鬱蒼たる有様なるが、殊に柏、樺及び躑躅に類する木等多し。之等の樹林に見るも、興安嶺山脈の樹木多きを知らん。而も此の附近の自然林を爲して、現存し居るは不思議と言ふべし。余等は出來得る丈け其の樹木の各種類を採集せり。元來此の山は岩石のみの山なれども、今や樹木一面に繁茂するを以て、殆んど其の山骨を現はさぬ位なり。此邊の樹木は丈け餘り高からず、多くは一丈以内位なり。

峠の頂上に達す

暫らくにして頂上に達す。頂上は左迄廣からず、只だ峠と云ふ迄の處なり。此の頂上には例の如く石を積みたるオボあり。此のオボは所謂チャムインオボ即ち道端のオボにして、此處を往來する旅人の石をとりて積み行きたるもの、自然に形をなして此のオボとなれるなり。余等一行も亦、佛を念じて石を其の上に積み。峠の上に立ちて、余等の之より旅行せんとする前方を眺むれば、幾多の山岳重疊し、前程尙山路を踏を行かざるべからざるを知れり。

余等は暫時休憩せる後ち峠を下り始む、道は近時扎嚙特の王府によりて多少開鑿せられたれど、尙岩石多く、且つ傾斜急にして、側は萬丈の溪谷なり。斯る道なれば之を下り行く事非常の苦心にして、殊に牛車を行るに最も困難せり。漸くにして峠を下り終りしが、此の峠

ガットシヨ
ロン村

より一河の流出するを發見せり。此の河をガットシヨロンコロと稱す。余等は更に此の河流に沿ひて進み、始めて一村落到達せり。此の村落はガットシヨロン村と稱し、其の位置より言へば河を控へ峠の麓に位するものと言ふ可し。

一村の男子
悉く逃げ去
る
止むなく一
泊す

本日の行程僅かに二十四五清里餘に過ぎざれども、峠を越えたる爲め牛勞れ、人も亦甚しく疲勞せしかば、ハルホンダラン村より隨行し來れる役人及び人夫等には、此處にて暇を遣はし、此の村より新たに役人及び牛車を徵發して進まんと、其の交渉を初めたるに、此の村の役人不在なるのみならず、村の男子は盡く逃れ去り残れるは婦女子のみにて要領を得ず、余即ち村役人の家に入りたるに、役人の妻等出て來り頻りに陳謝し且つ、是非共一泊せられたいと懇願して止まず。余等は日高ければ尙ほ進み得べきなれど、止むを得ず一泊する事に決し、種々の取調等をなし居りしに、夕方に到りて役人一人歸り來り、羊を屠るなど、余等の懇請に努めたり。此の有様に見るも、此の地方人の之迄の蒙古人と異なり、其の惡摺れし居る有様を知る可し。

六月十九日。朝九時頃ガットシヨロン村を出發す。村の役人一人隨ひ行く事となれり。前日來沿ひ來りしガットシヨロン河の岸を進みしに、河の兩岸に於て畑を耕すを見たり。其の耕作

蒙古人の耕
作

原始的なる
方法

法に就て略述せん。

各々マイハンブスを張り、重にモンゴルアム、即ち黍の種類を作れり。今は種子を蒔く月にして、農作の最も忙しき際にして、此の時蒔けるものは九月に到りて收穫するなり。其の耕作法は最も原始的にして、又た一種滑稽なる趣あり。即ち畑を耕すには鋤を用ひ、其の鋤に二匹計りの牛をつけ、農夫は後より鋤の柄をとりて牛を追ひ、以て地を起し行くなり。其の耕地は成る可く不用なる土地を以てするを、蒙古地方の普通とすれど、或はよき土地を以て耕地に當て居るもあり。之に見るも此の扎魯特地方は牧畜よりも、農業を主とするを知るべし。

農業を營むは盡く男子にして、喇嘛の僧侶も其の中に交れり。而して其の畑の形は、四角形なるあり、圓形なるあり、或は短冊形其の他種々の形に造り、長さ一町若しくは二町ありて幅僅かに一間位のものもあり。各々土地の状態に應じて異なるもの、如けれども、一般に幅よりも長さの方長さが如し。斯くして畑を耕し終れば次に種子を蒔くなり、而も此の月は雨多き月なれば、雨水によりて蒔ける種子と土と程よく混和するなり。斯くして後は九月迄打ち棄て置き、其の收穫の際も、單に實を着けある穂の部分のみ切り採り、其他は地に生

えたる儘打ち捨てて、藁を採る等の事は少しも考へず。甚しきに到りては、粟の穂の此の時
猶残り居れるさへありき。

種子の蒔方は以上述べたる如くなるを以て、種子を蒔きたる後直ちに降雨無ければ、或は
鳥類集まり來りてそを食ひ盡す事あり。之等を以てするも其の農業の最も初歩の時代にある
を知る可く、農業發達史の上より見るも多少の參考とすべきものあり。

香氣なる勞
働

又た此處の耕作に従事し居る農夫等も、働くよりは其のマイハンブスの中にて茶を喫み、
雑談に耽り居る時間遙かに長く、唯だ其の氣任せに勞働し居るが如き状態なり。

勞働時間よ
り休憩時間
長し

余等一行は河に沿ひて進む事五清里計りにして、道を轉じ更に東北に向ふ。即ち前日超え
來れる峠の裏手の方に向ひて、進むの有様となれるなり。斯くして更に五清里許り進みし頃
一村落到達し、余等即ち小憩晝食をとれり。

蒙古人の住
家

此の村落には蒙古人の住家四戸あり、而して此の村附近には榆の木非常に多く、人家は恰
かも林の中、山の間と云ふが如く、余等外國人には、斯かる處に人家あるべしとは、容易に
考へ得られざる處に存せり。然して其の家の構造はアップスングル(草家)なるが、或は之に土
を塗れるさへあり。之等を以ても風俗の漸次變化し來れる有様を知り得べし。又た此の地方

の蒙古人等は、此の時既に寫眞に撮影せる如き夏帽を冠り居れり。余等は此處にて色々の談
話を聞き、車を代へて行を繼ぐ。

興安嶺の杏
の實

村を出發し、五清里許り爪先上りの道を進めば又た峠に達せり。此の間樹木多し。又た先
にも興安嶺山中にて見たる、杏の一種なりと云ふ。クキルスモトの果實は食ひ得らるゝ迄に
熟し居りしかば、余等も其を採りて食ひたるが、味は少しく苦味を帯び、核子は頗る大なり。

石の峠

杏の一種なるべしと思はる、余等は其の實を取り、又た其の枝を折りて進み、漸くにして峠
に達せり。此の峠はチョロンタバ即ち石の峠と稱す。既に其の名の示す如く、此の峠には岩
石多し。峠を登り行き、更に之を降る事五清里計りにして一村落到達し、此處に一泊する事
に決せり。村はフブ村と稱す。

フブ村

余等の入れる家の主人は此の村の役人にして、主人夫妻は老人なるが、非常に人柄のよき
者にして、余等及び余等の一行を盛に歓待し、乳にて作れる酒即ちクミス等を持ち出して馳
走せり。此の夜此處にて種々の取調をなせり。

六月二十日。今日は此の家の老主人自身余等に隨行する事となり、牛車其他の準備成ると
共に直ちに出發せり。

支那人の商

三五

此の村に支那人の家一軒ありしが、此の家は支那風の建築にして土造なり。其の支那人は商人にして、家畜賣買其他諸種の雜貨等を商へり。即ち彼は此の附近より馬、牛を買ひ入れては之れを支那に持ち歸り、其を賣りては利益を得居るなり。又此の地方を往來する支那人の爲めに旅宿として其の家を供すと、されば彼は多少富み居るものゝ如かりし。

五清里許り進みて一村落到達す。此處にて牛車及び隨行者を交代せしむる約束なりしが、此の村の役人等は、晝食の仕度をなすなりとて中々出て來らず。余等は僅々五清里許りより進まざるし、晝食の仕度するには未だ早しとて、役人には構はず此處を出發せしに、後より前に隨行し來れる老人は、新に交代すべき役人を伴ひて驅け來り、余等の前に低頭平身して其罪を謝しければ、老人は此處より返し此の役人を隨行せしめて行程を繼ぐ。

此の役人は蒙古文字の讀み書も出來、又た多少話しをも解せり。之迄の蒙古の村役人にて蒙古文字を知るものは殆んど無かりしが、此の者の如きは、村役人中の學者と稱するも可ならん。余は彼と興味ある談話を交へつゝ進めり。

クキルの遺物

此の附近に於て、例のクキルの遺跡たる、家の礎の跡及び土器鐵鍋の破片等の落ち散るを見たり。

文學ある蒙古役人

遼時代石橋の跡

余等此の日の進路は、前日越え來れるチョロンタバより流れ出づる、谷川に沿へるものなり。而して此の道も亦谷間なれども、其の左右の沿岸には、各所に畑の耕され居るを見たり、而して方向は主として東に寄りたる南方にとれり。

道を東南にとりて進む中に、ハシラガと稱する所に出でぬ。ハシラガとは橋と云ふ意味なるが、隨行せる役人の語る處に據りて考ふるに、今は無けれど往時は此處に石橋を架し、以て對岸と相往來し居りたるものゝ如し。此の附近は昔は水多く、之を渡るに頗る困難せりとの事を蒙古人等は言ひ傳へ居れり。蓋し此の石橋は遼の時代のものならんと思はるれど、今無ければ詳悉する能はず。而も此處に石橋を架しありしに考ふれば、遼、金等の時代には此の邊も、多少人の往來するものありたるを知るべし。

漸次進み行く中に、道は少しく岡をなせる丘陵の上に出でたり。即ち丘陵の上を進み行すが、五清里にして一村落到達し、此處にて晝食を取り、又た寫眞を撮影せり。

此の邊の風俗は殆んど夏の粧なりしが、暑さも亦甚しく加はれり。余等の休息せる家の主人は、よく余等の待遇に努めたり。

此の時日向高かりしかば再び旅程を續けんとしに、牛車容易に來らず。又た隨行の役人も、

蒙古の夏

村役人隨行
を厭ふ

蒙古人牛を
代ふ

日暮れて途
遠し

蒙古人の讀
經

前程途遠ければ今夜は此處に一泊せられたしと懇請せしかど、余等は前途を急ぐの必要あるを以て、其の請を卻けて出發する事とせしに、此の村のタイチは己れ隨行するを厭ひ、荐りに他の者を以て代らしめんとせしが、余等は役人を隨行せしめ、牛車を整へしめて行を續く。道は東に寄りたる南に向ひ、主として河に沿ひて進む。途中一個の村落を見たるのみ、他は盡く無人の境なり。左右は山にして道は谷間を通ず。途上隨行の若者は牛車の牛を代へ、即ち之迄能く歩み居れる牛を、悪きものと代へたれば、牛車の進む事非常に遅くなれり。而も余等は目的地向ひて進まざるべからずとて、漫々として進み行けり。行けども一人家に達せず。出發してより十清里許り進みし頃には全く夕暮となれり。余等と同行せる二人の役人は、余等一行の通過を、前方の村落に報せんとて去りたれば、後に残れるは余等と二臺の牛車のみ、之には一蒙古人と喇嘛の小坊主との二人御者として隨ふのみ。

日没頃より、彼等二人は經を讀み始め、車の後に隨ひ來れるもの前方に出てんとし、其の顔色も少しく變じ來れるが如し。時に道端に一本の楡の大樹あるを見たり。余は此邊に斯る大木あるを不思議に思ひ、車の上より彼等に、其の枝を折り取れよと命ぜしに、彼は手を打振

りて之を否み、甚だ好まざるが如かりき。

此の附近は頗る陰氣にして、左右は山峙ち、其の間を河水流れ、河岸に此の大木あり。而して此の木の下は水最も深し。

余等の車は此の楡樹に殆んど摺れ／＼に通過せしが、其の後に余は戯れに彼等に向ひ、此の附近は妖怪出るに非ずやと問ひたるに、彼等は顔色蒼白となり、實は其の事なり、大人は外國人なれば知らざるも、此處は妖怪の出る場處なれば、蒙古人等は暮近くより一人も此處を通るものなし。即ち今過ぎ來れる楡樹には主棲み、或は其樹より鬼火出て、飛び廻る事あり、實に恐ろしき所なり。又彼處にて暖かなく又冷たくもなき一種言ふべからざる、不快なる風の吹くを感ぜられしならんが、之れ斯る妖怪變化の出る處に非ざれば決して感ずる事無きものなり。又た聞かれよ、左右の山には人の唸くが如き聲するを、大人は知らずと雖、此處は斯かる不思議なる事のみ多き恐ろしき處なり。されば余等は車の後より隨ふを好まず前になりて進みたるなり。又た此の妖怪の害を避けんが爲めに數珠つまぐり、經文を誦し、切火をなして通りしなり。斯くすれば妖怪も決して害をなさずと語れり。而して蒙古人の若者は最も惧れたるもの、如かりしが、喇嘛の方は少しく平然たる態度を粧ひ、我は佛門に歸

路傍の妖怪

醒風鬼火

人の唸聲

せる身、妖怪は決して佛に祟をなさずとて昂然たりき。

眞に彼等の言ふ如く、此處は一種不快なる風吹き居りしが、之れ山に挟まれたる此の谷の地勢の關係によるものに非ざるか、又其の所謂山より聞ゆる人の唸聲は、河の地底深く流るゝものある爲めならんか。

二十清里無人境
夜二更漸く人家に達す

余等は斯る事を話しつゝ進みしが、夜は愈々暗く、道は唯だ自然に任せて進むのみ、暫くして一蒙古人の騎馬にて來れるに會す。彼は前方の村落より、余等を出迎へんが爲めに來りしなり。即ち彼の案内にて尙ほ此の谷間の道を進み、午後十一時頃漸く一村落に到着せり。村はハラシヨロンと稱す。

此處にては余等の到着を豫め知り居りしかば、盛んに火を焚きて余等の來るを待てり。直ちにその民家に入り大に待遇せられて、此處に一泊する事となれり。此の日の行程四十五清里、而して無人の境を行く事、實に二十五清里程なり。

三、東扎嚕特王府

六月二十一日。今日は愈々王府に進まんとす。然るに朝、余等の宿泊せる家の主人も主婦

蒙古人の不都合

朝餐の準備をなす

も隠れて出て來らず。剩さへ茶も食事も用意せず、甚だ不都合なれば、役人に命じて何故に茶を作らぬかと詰せしめしに、此の家の老婆は茶の事は知らずと答へたり。余等は此の長き旅行中、斯る無作法なる詞を聞けるは今回始めてなり。而も余等は前途を急ぐものなれば、止むを得ず所持し居りたる支那茶を喫み、ホロートを嚙りて旅程に上れり。

王府の保護林
ノインヌンヤブルテ河
綠蔭水邊涼を入る

道は主として東に寄りたる南方に向ひ、山の間丘陵の上とも言ふべき處を進む。途上杏の木を見たり。此の日暑氣甚しく全く夏の如き感を起せり。斯る道を進む事十清里許りの處より樹木漸く多く、王府に近づくに隨ひ益々多きものゝ如し。其の重なるものは柳及び榆の木にして、綠蔭涼を入るゝに心地よし。又た之等樹林の間を一河の貫流するあり。ノインヌンヤブルテコロと稱す。即ち扎嚕特王の渡る河と云ふ意味なり。余等は下車して此の河水を掬せしに、柔かくして味よかりき。

王府の風景

余等は暫らく榆の木蔭に憩へり。此の河は常には水少けれども、一旦大雨の時期に入れば急に水量を増し、王府の方に向ひて流るゝとの事なるが、此の時は水溜れて殆んど水溜と言ふべき位なりし。之等の樹林は王府の保護林にして、位地王府に近ければ、其の景色を添ふる爲め、及び用材を得んが爲めのものなり。

王府の出迎

此の時王府の方より馬を驅りて進み來れる男、余等の前にて馬を下り恭しく挨拶せり。彼は余等一行出迎の爲め王府より來れるなりしかば、即ち其の案内にて進む、途中樹林の間より遙かに王府を望む、景色最も佳なり、十清里弱にして王府に達す。

王府の位置

王府は、四方山を以て圍まれたる稍々廣き平地にあり。而して此の平地は樹木を以て滿され、即ち王府は樹木の中にあり。王府の建築は概ねバイシングルなれども、尙二三のモングルゲルをも見たり。

王府の在る寺院に宿る役人の横柄

余等は王府に入りて役人に挨拶し、其の指圖によりて、王府より二清重許り距りたる、王府の廟のある寺院に宿泊する事となり、即ち其寺に到る。此の地方の役人は横柄にして且つ性質悪しく、之迄の蒙古地方と異なるものあり。此の地方を旅行せんとするもの、注意すべき事なり。

王府より馬を贈らる

六月二十二日。朝八時頃王府を辭し、役人を隨へ牛車にて西扎噶特に向ふ。出發に臨み、トソラクチ、メリン等の役人余の旅舎に來り、王より余等に對して茶色の見事なる馬一頭を贈らる。余等即ち謝意を述べて此處を出發せり。

役人等の語る處に據れば、東扎噶特王府より西扎噶特王府迄は、五十清里許りにして一日行程の處なりと。此の日余等に隨行し來れる役人は、性質の最も惡しき男にして、途中方々の民家に入りては乳の酒を飲み、少しも余等の用を辨せず。而かも彼は、蒙古の習慣として何ても無き事なりと稱し、平然として済まし居れり。之を見るも其の禮を解せざるを知るに足らん。

蒙古の役人

王府を出發してより高臺の上を進みしが、途中石器、土器、鐵錐、白色の陶器等の落ち散れるを見たり。更に山路に差しかゝり、山の上を進み行きしか、方向は初め西に寄りたる南にして、後には西方に向ひて進めり。二十清里許りにしてナインアイラと稱する村に到着し、此處にて茶を喫む事とせり。此は東扎噶特最終の村落なるが如し。

薩民家にて酒を賜ふ

余等の休憩せるはタイチの役人の家なるが、其の家の構造は最も面白し。蒙古風の家を煉瓦にて造れるもの、即ち壁は煉瓦、屋根は草にして圓形に造り、下には火を焚く様に裝置しあり、支那風の温床と蒙古風の家屋とを折衷せるものなり。

ナイン村

余等に隨行し來れる王府の役人は、此處にても酒を飲み、泥酔殆んど前後を忘却するに到れり、余は彼を叱し、此の村より新に牛車を出さしめて行を續く、暫くありて酔へる役人は逃げ去りたれば、更に此の村のタイチ隨行せり。

支那風蒙古風の折衷家

役人泥酔して逃げ去る

ナラシ
ン

道は再び爪先上りとなり来りしが、十五清里許りにして峠に出て、更に丘陵的禿山の上に差しかかり、夕暮近く西南の間に向つて進みしが、更に十清里餘にして河岸に出て、之を渡りて一村落に達せり。ナラシインアイラと稱す。時に日全く没せしかば、村長の家に入りて一泊する事とせり。此の村は既に西扎嚙特の地なり。

四、西扎嚙特

六月二十三日。朝此村を出發し、主として河に沿ひて進む。此間一二蒙古人の村落あり。余等は途中之等の村にて休息し又茶を喫めり。初め十清里許りは南方に向ひて進みしが、道は山の鼻に遇ひて方向を轉じ、西方に向ふ事となれり。進み行く中に道漸く廣く、山遠ざかりて大平原となれり。十清里弱も進める頃王府を望む。

余等の王府に入れる時、王府の役人は一人も出迎へざりしかば、余は牛車を王府に乗り入れ、役人に對し、之迄斯く冷遇せられたる事なしと、護照を示して大に其の不都合を詰責せしに、役人等は只管其の無禮を陳謝せり。

余等一行は王府の附近なる王の廟に一泊する事となり、役人の案内にて其寺に入れり。此

西扎嚙特
府の無禮

王の廟に
泊す

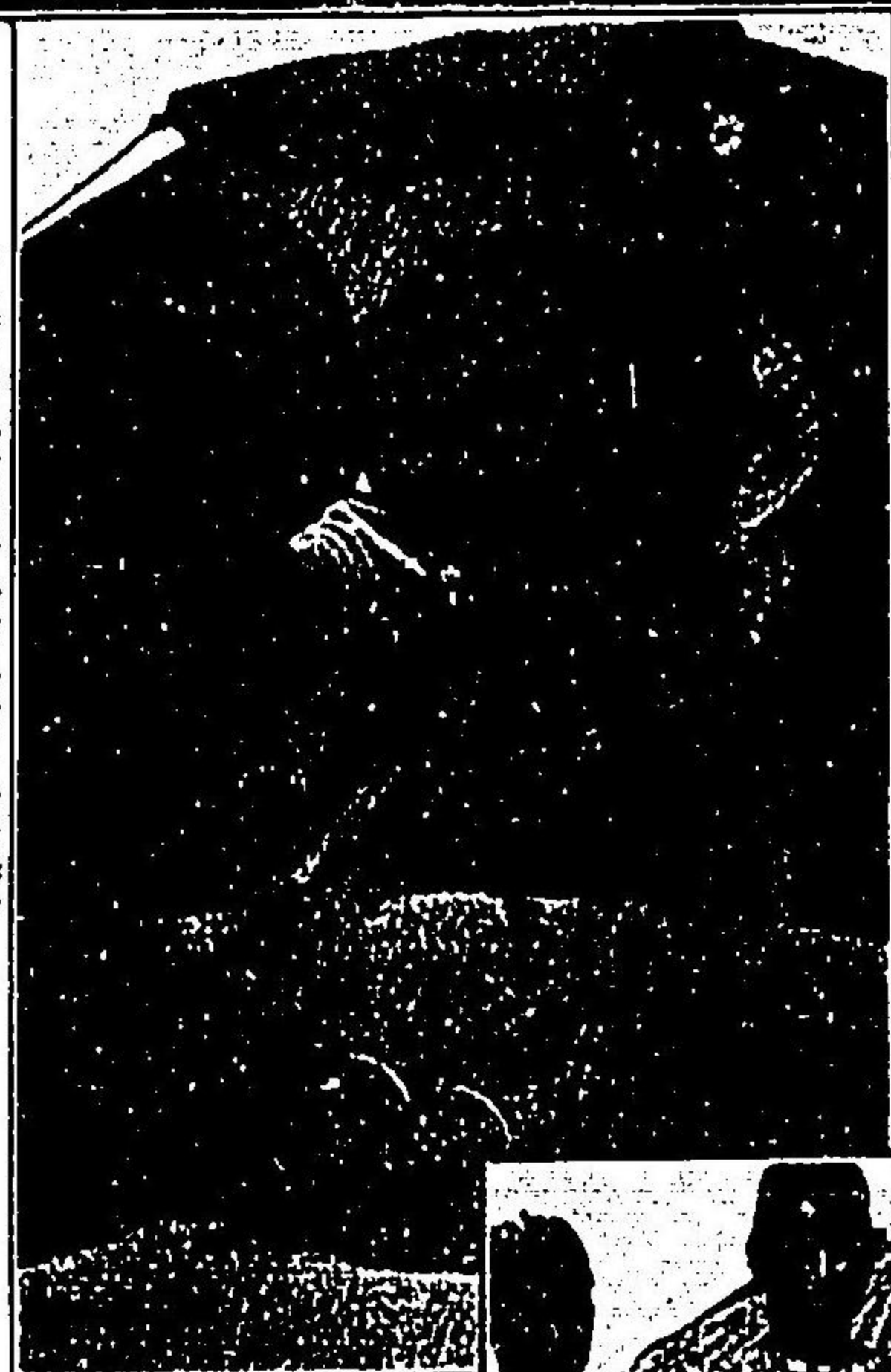
阿喇科爾沁蒙古婦女



蒙古幼兒の搖床(阿喇科爾沁)



シヤマン教の巫人祭具(西扎嚙特)



阿喇科爾沁蒙古人(男女)

の時、王妃等より種々の贈物ありき。此の寺は或る僧侶の宿舍にして、立派なる天幕の家なり。此の時其の僧侶他地方へ行き、小坊主一人留守しつゝありしが、彼は料理等を能くし又た能く談れり。

僧て露人の
宿舎たりし
寺

彼語りて曰く、嘗て武装せる多数の露國人、此處に宿泊せる事あり。彼等は彈藥其他のものを車に積み、人夫其他を各村より徴發し、此村よりも哈爾濱に連れ行かれたるものありと。余思ふに之れ日露戦争當時にして、露國人の此の地方を通過して、哈爾濱に出てたるを證すべし。彼は又た、露國人は其の荷物を運ばねば、慘酷なる目にあはせしを以て、蒙古人等は皆恐れて其の命令に従へりと語れり。余は彼との談話によりて多くの利益を得たり。

一人の年老ひたる喇嘛僧密かに余の宿舍に來訪し、其の家に多くの牛馬を飼養しあるが近頃頻々として斃死せり。之れ何の爲めか占ひ賜はれと請ふ。彼は又た其の考を告げて曰く、其の隣家の主人は、彼の富めるを嫉みて祈りをなし、其の爲めに斯く家畜の斃るゝならんとの事なりし。余は尙ほ色々彼の話を聞きしが、其れによりて、蒙古人の間には今尙盛に此の呪咀と云ふ事の行はれ居るを知り、多少余等研究の参考となれり。余は彼に、佛を深く念ずれば、さる災厄にかゝる事なし、と告げたるに、彼はいたく喜びて歸り行きしが、謝禮として乳

蒙古人の呪

余の占

にて作れる餅を持ち来れり。

斯くの如く蒙古人には、今尚古易等盛んに行はれ、家相等の事も非常に氣に掛け、土地惡き爲め病氣になれる等の事を言ひては、始終彼方此方に移り廻る風あり。余等は種々の調査をなして此處に一泊せり。

六月二十四日。朝王府よりメリオン來り、王より余等一行へ引出物として馬一頭を贈らる。余等は王及び王妃に暇を告げて此の寺を出發し。東南方に道をと、前日渡り來れるテングリーコロ（天河）に沿ひて進む。此附近の畑はよく耕され居たりき。十五清里許り來れる處にて少憩し、茶を喫み車を代へて進む。

此の附近は往時住民ありしもの、如く、石臼の地に轉がるを見たり。之れ遼、金の時のものならん。此の日暑氣甚しく、喉渴く事頻りなれば水を飲み、旅行を續けたり。途中支那人の家一軒あり。煙草及び野菜類を作れり。之を以ても支那人の大分入込み居るを知るべし。尙も天河に沿ひて南方に進む事、二十清里餘にして一村落に達せり。此の村にはバイシングルの家あり。余等は其の中にも最も美しきバイシングルに入りて、一泊する事となれり。此の家は此の村の素封家にして、主人はメリオンの役人なり。其の子息は支那語を解し、

蒙古人の古
王より贈ら
る

天河附近の
遺物

支那風の家
久し振にて
米の飯を得
たり

一家余等の
款待に努む
暑さと蚊と
に夢成らず

シヤーマン
教研究に向
ふ

又た支那の文字をも書けり。其の又た母なる老婦人も、能く事理を解する人なりしかば、余等は彼等と種々興味ある談話をなせり。此の家の建築は此邊にて珍らしきものなり。即ち構造全く支那風にして、其の室内裝飾の如きも全然支那風なり。若主人は余等の爲めとて特に支那の米を炊き、鹽漬の菜等を出して饗應せしが、余等は實に久し振りにて斯る食物に接せり。主人は又た樂器等を取り出で、余等の歡待に努めたり。

五、シヤーマン教研究

六月二十五日。今日は豫ねての目的たる、シヤーマン教研究の爲め、タラハガ地方に向はんとす。余等は屢々扎啤特にシヤーマン教残り居るを聞き居たるが、今日は愈々其を確かめを爲めに其の地に向ふなり。

余は出發に臨み、此の家の主人夫妻及び其他風俗の寫眞を撮影し、又た主人の馬に騎し可

オゴルチ村

を轉き居る處をも撮れり。余等は主人に送られて此處を出發し、暫らくにしてオゴルチ村と云ふ處に達す。

突如として
河流消失す

十五清里許りにして、チャガンタバと稱する峠を越ゆる事となれり。此處に至る迄は主として、テングリコロに沿ひて進み來りしが、此の邊に於て同河は消え失せたり。此は蒙古地方には屢々ある事にして、河流地底を流れて全く地上に見えざるに至るなり。

珍らしき石
斧

此の峠に差しかゝれる處にて、石器時代の遺物を多く拾へり。其の中にて珍らしきは、之迄發見せる石斧は磨けるもののみなりしが、今此處にて發見せるは、打ち缺きたるものなる事之なり。之は曾て見ざる處にして大に注意すべき事に屬す。

大榆樹林

峠を越えてより、又た左右山になり居る間を進みしが、此の邊も亦榆樹の林にして、余等の目算せるのみにても、其數二三千本に達するが如し。之亦王府の保護林にして、専ら其の保存に努め居るものたるに拘はらず、蒙古人等は其の耕作用の鋤を作らんが爲め、夜間竊かに

蒙古人の盜
代

此の林に入りては、遠慮も無く榆樹を伐採すと云ふ。されば此の林の盡くるも遠からざるべく、實に惜しき事なり。一般に興安嶺附近の王府には保護林の設けあり。之れ一方には景色を添ふる爲めなれど、一方には用材を探らんが爲めなり。此の附近風光最も佳なるものあり。

林間の鳥聲

林間亦鳥の囀づるを聞けり。

ホルブー村

二清里許り森の間を進みて、ホルブーと稱する村に達し。此處に休息して茶を喫めり。其の家の主人は中々物の解れる人にして、余等の爲めに非常に饜應をなせり。此の附近亦石器時代の遺跡及び古錢等ありしかば、余等は少しく其の調査を爲す。

東戈壁の砂
漠地

繼て此の村を出發せしが、日も山の端に歿せんとする頃となりては寒さ急に加はれり。斯くして二三清里の間山路を進み行きたるに、地勢漸く一變して廣漠たる平原となれり。此の廣原たるや、東戈壁砂漠に連續するの地にして一望際涯なし。余等之迄久しく山間の道のみ旅行し來りしに、今急に此の廣漠たる砂漠地に出てたる事なれば、言ひ知らぬ感に打たれぬ。斯して十清里許り進みて一村落到達し、今夜は此處に一泊する事となれり。

奈曼人の番
頭

此の村は砂漠の中に位地し、地最も僻なり。余等の泊れる家は、此の邊にての金満家にして、多くの下女下男を召し使へり。又た此の家に一人の番頭居りしが、彼は奈曼の蒙古人にして、蒙古文字を知り又た支那語をも多少解し、非常に調法なる人物なり。此の家の主人は彼を以て余等の接待係となし、非常に余等の待遇に努めたり。

此の村はタラハガの近くにして、最早東戈壁になり居るなり。余等之迄の考にては此よりタ

村内にシャ
イマン巫女
居住す
タラハガに
向ふの要無
きに至る

巫女を呼び
来らしむ

主人巫女を
招くを喜ば

巫女来る

其の調査

蒙古固有の
宗教

ラハガに行きて、シャーマンの巫女に關する調査を爲さんとせしが、役人の語る處に據れば、此の地にも其の巫女の住むものありとの事なりしかば、余は主人に余の此處に来れる目的を語り、役員等又余の爲めに非常に周旋せる結果、明日巫女を此の處に呼び来らしめて、其の調査をなす事とし、今夜は此處に一泊せり。

六月二十六日。今日はシャーマン巫女を取調べんとて、朝疾く起き出て、其準備をなせり。

此の家の主人は、其家にシャーマン巫女を呼び来りて、其の儀式をなさしむる事を喜ばざりしが、其は尤なる事にして、即ち彼等巫女の来るは、病人若くは凶事のある時に限られ居るを以てなり。されば余は主人に向ひ、余等の巫女を呼ぶは、全く學問上の取調をなすが爲めなる事を、説明して漸く彼を納得せしめ、主人の天幕外の廣き庭に於て、巫女の調査をなす事とし、準備を整へて待ち居りしに、九時過ぐる頃、巫女は其の弟子と共に來り。其より直ちに彼等に就て、種々の取調をなしたるが、今其概略を述べんに左の如し。

現今蒙古人の信ずる宗教は、西藏より入り來れる喇嘛教なれども、其の以前に於て彼等は既に固有したりき。是れ即ちシャーマン教にして曾て遼、金等に行はれしものと等しく、今も尙西比利亞地方に行はれつゝあり。是等の事實當時の記録尙ほ精しくは、マルコポロ旅行記

等によりて、略ぼ其の形式を推知し得べけれども、喇嘛教の爲めに驅逐せられて、今や殆ど其の跡を絶つに至れり。

然れども余は曾て、興安嶺山中及其附近には、今尙シャーマン教の行はるゝありとの事を耳にし居れるを以て、殊に余の專修の學問の立場よりして、其の研究の最も價值あるを思ひ、此の旅行中其の存在に注意し居りたるが、曩に東烏珠穆沁王府に於て、其の地にシャーマン巫女の居住しあるを聞き、之を招かんとして役人等の拒む處となれるは、六月十四日の項に之を述べたり。然るに今此の扎賚特に於て漸く志望を達し、親しく其の研究を爲し得たるが、余の之迄の苦心は實に一方ならざるものありき。

抑も此の西扎賚特に今尙此の宗教を存するは、一は其の地勢の關係によるものゝ如し。即ち同地方は、西は興安嶺に接し、南は東戈壁の沙漠に連なり、交通頗る不便なれば、随つて他地方と接觸するの機會少きに據るものなるべし。

シャーマン即ち巫女の事を、蒙古語の口語にては之を *Bo* と稱し。文語にて *Doge* と稱す。シニミッド氏蒙獨露字典 (*Mongolisch-Russisches Worterbuch*, p. 30) によれば、此の文語を譯して *Der Zanberer Selhman* とせり。現今巫人を *Bo* と稱するは即ち其の口語に屬す。

巫女の蒙古
名

シャーマン
を尙存する
は地勢に因
る

漸く研究の
思案を達す

西扎喇特の特人及小兒



西扎喇特より贈られたる名馬



西扎喇特の人乗馬放射

西扎喇特の巫人

巫人は其職を世襲す

巫人の服装

西扎喇特にてシャーマン教を信じ、其の巫人として現存し居るは、タモと稱する六十七歳の老婆と、之に従へる弟子(Shu)のウルチと稱する四十三歳の男とたゞ二人のみ。此のタモの夫も亦巫人なりしが數年前死去せりと。彼女の語る處によれば、其の家は代々巫人にして、彼女に至る迄既に十數代を経たりと。之に因て見れば、巫人は代々其の子孫に傳ふるものたるを知るべし。

此の附近の蒙古人は、深く巫人を信仰し、若し家に病者あれば、直ちに禮を厚くして彼等を迎へ、以て其の祈禱を乞ふを例とす。

余等の招に應じて來れる巫人の服装を見るに、タモは頭に、鐵にて造れる寶冠の形、恰かも五徳を逆にしたるもの、中央に鳥の形したる金具を附け、前額の所には虎の頭を彫りたる板金を張り付けて裝飾したるを戴き、寶冠の後には赤地に縫取を施したる、三條の細長き布を垂る。衣服は通常の蒙古服と異なる處なしと雖、腰には五色の絹を以て疊折目の處を縫ひ合せたる長き裳をつけ、又た裾の端には波状に切目をつけあり。足には靴を穿ち、腹帯の處には横に數枚の鏡を連ね佩べり。弟子の服装亦同じ。

二人の腰にせる鏡は何れも古鏡にして、巫女は九枚、弟子は八枚を佩べり。而して此の古

巫人の鏡

鏡は何れも、明代若しくは其以前のものにして、殊に葡萄牙鏡最も古し、此の葡萄牙鏡は二面あり。各々其の一面宛を腰にせり。之等の古鏡は土中より掘り出せるものに非ざれば、彼等の祖先より持ち傳へたるものなるべし。而して彼等の鏡を腰にせるは、一は其の尊嚴を示す爲めなるべけれど、又た一方には其の舞踊する際に、之等の鏡の相觸れて、一種の音響を發するが爲めならん。要するに之は、彼の滿洲人のシャーマンの腰鈴、若くは現今西比利亞シャーマンの用ふるものと同一なり。

剛鬚太鼓

彼等は又た各々手鼓を持てり。其形扁平にして一方にのみ皮を張り、幅一尺三寸五分、堅一尺一寸、橢圓形を呈す。之に鐵の柄を附し、柄の先端は錫杖の如く作り、九個の鐵環を入れあり。之れ太鼓を撃ち叩く際に動搖せしめて、共に音を發するが爲めなり。而して巫女の持てる太鼓の表面は、皮の色の白色のものなれども、弟子の持てる方は、特に赤色を以て之に塗れり。其の形状は我が國日蓮宗のものと稍相似たり。

儀式及び舞踊

又た彼等の儀式及び舞踊を見るに、先づ四方を拜し、次に諸神の御名を稱へて之を呼び集めたる後、一種の祝詞イコトを唱えつゝ太鼓をたゞきて踊り始む。其の踊は、太鼓を打乍ら足を右方、左方或は圓形に滑らすなり。又た太鼓の打ち方はドン、ドドン、ドドンにして、最初は

緩かなるも漸次急劇となり、幾度も繰返しつゝ踊り狂へり。太鼓の音、柄の端にある錫杖の搖ぐ音、腰鏡の相觸るゝ音、互に相和して一種の調子を生ぜり。彼等の踊りは愈々急劇となり、遂には殆んど人事不覺の状態に入り、其極斃れて止むに至る。而して舞踊の際彼等の唱ふる祝詞の節は、我が妻之を樂譜にとれり。

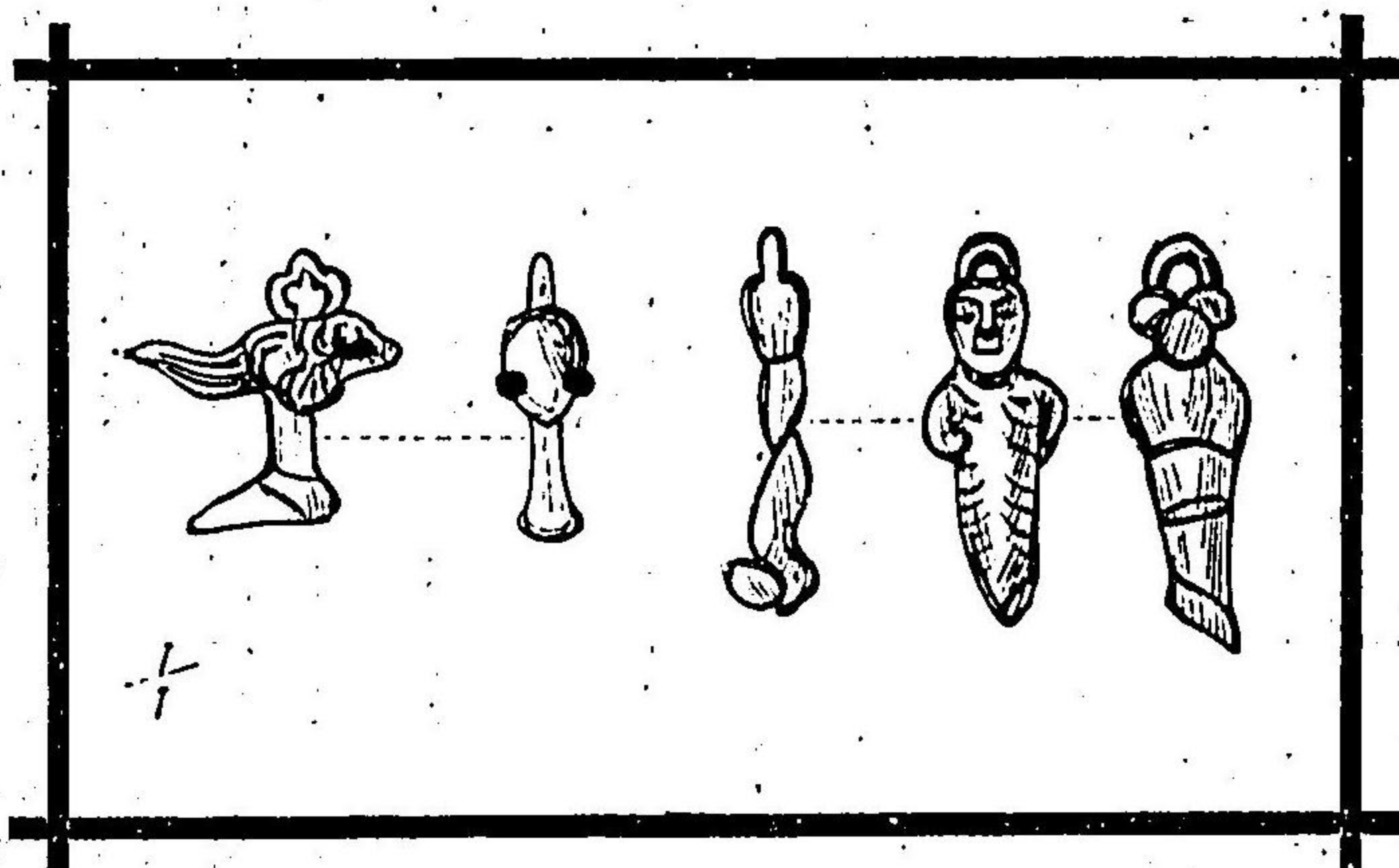
其の敬神
巫人の祈禱
善惡の二靈
巫人の信條

以上は余の實際目撃せしものなるが、尙彼等の語る處によれば、病家に招かれたる時には、先づ氈帳内に Ongoto と稱する神を祭り、神前に一頭の殺したる羊及び乳にて作れる神酒とを供へ、巫人も共に飲食し、次に病人を其前に座せしめ、病人を中に挟みて彼等は祈禱を始むるなり、即ち前に述べたる如く、諸神を呼び集め、太鼓を打ち、祝詞を唱へつゝ踊り、病人の額に唾し、而して巫人は刀を抜き放ちて病人の胸部をつき、以て病人の腹中に蟠れる悪靈の血を退去せしめたる後、ブーブーと呼吸を吹きかけ、善靈を吹き入れたる時、血は止まり病は立處に癒ゆ。巫人の言に従へば、世に善惡の一靈ありて、悪靈體內に入れば即ち病を生ず。彼等は祈禱によりて此の悪靈を去らしめ、善靈を呼び入るゝなりと。こは明かにシャーマン教の事實を具備せるものなり。

彼の巫女は又た、常に銅製の二種の神像(圖を見よ、こは實物大にして圖の如く製作頗る

巫女の秘神

古鏡



第十二 東西札幌特

劣れり)と一面の古鏡とを恭しく懐中せり。此の神像は Ongoto にして、一は即ち Balar Ongoto 他は Bonono Ongoto 是なり。圖に示す如く前神は頭に冠物を戴き、頭は人にして體は魚に類し、恰かも我が國の人魚の如し。後神は魚にして鳥類の如き形を呈せり。此の二神像は極めて秘神的のものにして、何人と雖容易に之を禮拜するを得ざるものなるが、余は彼等に禮を厚くして僅かに拜するを得たり。即ち當時スケッチせるもの上圖之なり。

又た古鏡(Toi)は此の二神像と等しく、彼の最も秘藏する處にして、布につゝみて恭しく懐中し、恰かも一種の御靈の如く感じ居るものに似たり。鏡は直徑二寸七分強にして、中央に紐を通ずる孔あり。鏡面には菊花の紋様(菊の花及び葉等あり)を有し、

各地のシャ
ー
マン
巫
女
の
比
較

現今のシャ
ー
マン
教
分
布
地
圖

巫女の種類

其の縁邊に當りて○○○○○の如き模様あり。

此の二神像及び古鏡は、最も神秘にして而も靈驗いやちこなるものと信じ居れり。此の三品は古くより彼の家に傳ふるものにして、代々子孫に譲り行くものなりと云ふ。

以上シャーマン教に就て略ぼ述べ盡したるが、尙ほ西扎噶特のタライハガ(タラハガ)にも巫人あり。而して其の巫人は、我が國の巫女の用ふると同様なる鈴、即ち柄の上に六個計りの鈴を附し、柄の下端には五色の細長き絹片を垂れたるものを持ちて舞踊し、傍にて別に木鼓を打つものありと。此は余の實見せるに非ざれど参考として此處に述ぶるなり。又た彼の巫人は阿嚙科爾沁、東烏珠穆沁、科爾沁殊にダラハンにも巫人の存するを語れり。余は之等の地方にても之を研究せんとせしが、蒙古人の偏見より志を果さざりき。

以上に因りて考ふるに、現今尙不充分ながらもシャーマン教の行はるゝ地方は、主として興安嶺附近なるを知るに足らん。此は最も注意すべき事に屬す。又た興安嶺のハイラルの南方バラカ蒙古、及び其の東北に位するソロン、ダウル等には今尙盛んにシャーマン教行はれ居れり。尙ほ又た後に阿嚙科爾沁にて聞ける處によれば、Boの外、別にTosin及びReishinと稱するものあり。Boと大同小異にしてたゞ其の舞踊、儀式、太鼓の打方等異なるのみと。

シャーマン
研究の價值

旅行を繼續
す

之を要するに、此のシャーマン教は喇嘛教とは何等の關係なきものにして、古く盛んに行はれし、古宗教の殘物たるや明かなり。而して以上述べたる巫人の信仰風習たる、現今尙行はれつゝある、西比利亞各地方のシャーマン教のそれと全く同一にして、學問上全く相等しき系統に屬す可きものたるや言を俟たず。果して然らば、今や僅かに興安嶺東部に保存せらるゝ、シャーマン教の殘物は、最も注意すべきものなると共に、之を研究するは最も興味ある事にあらずや。

十一時頃シャーマンの調査も全く了りしかば、午後二時頃此處を出發し、以前と異なりたる道を進めり。此の附近は既に東戈壁に接し、之より以東は全く潢河流域一帯の砂漠となるなり。

余等は砂漠的廣原の道を進み行きしが、途中一の喇嘛廟を見たり。余等の一行に一人の喇嘛僧あり。彼れ及び他の一人の若者は快活に好く話し、彼等の談話によりて、此の附近尙ほ盛んにシャーマン教の行はるゝを確め得たり。之より再び山中に入り、日暮れんとするに漸くオゴルチ村に達し、此處に一泊する事とせり。此の日風荒く、砂を飛ばし、旅行最も不愉快なりし。余等は明日愈々阿嚙科爾沁に向はんとす。

第十三 阿魯科爾沁より赤峰

一、再び阿魯科爾沁領に入る

六月二十七日、朝オゴルチの村を出發し、主として天^{ツンギス}河に沿ひて進みしが、次いで之を渡り、西北方に向つて歩み、颯て興安嶺の山中に入れり。五清里計にしてノインモトと稱する處に達す。ノインは蒙古語の君にして、モトは木、即ち王様の持ち居る木と言ふ意味なるが、此の附近に無数の榆樹あり。之れ又た王府の保護林なるが故に此名あり。

此の途中に於て、東胡民族の遺跡を發見せしが、等しく土器、五珠錢の破片、耳環の如きもの、模様あるもの等なり。

ノインモトを出發してよりは、等しく山中の道と同じ方向に向ひて進み、遂には全く人家無き興安嶺の山中に入り、愈々之を横斷する事となれり。之によりて考ふるも扎魯特の土地は全く興安嶺山中に位するを知る可し。

進む事二十清里許りにして、バインタラと稱する一村落到達せり。此の村は既に阿魯科爾沁の領域に屬し、同王管下の最初の村落なり。

バインタラ村
阿魯科爾沁領

興安嶺横斷

王府の保護林
東胡の遺物

扎魯特と阿魯科爾沁との境界

余等は此村に達する迄、主として山の間をのみ進み來りしが、此處は平地にして一種の平原を成し居れり。故に蒙古人はバインタラと稱するものにして、即ちタラは平の意味なれば、之を邦語に譯せば富みたる平と言ふが如し。又たバインタラ村の前に一河の流るゝあり。之等に見るも阿魯科爾沁と扎魯特との間に、興安嶺の一支脈横はり居るを知る可く、此の支脈を以て兩者の境界をなし居るなり。

余等は此の村に入りて、村内の或る富家に車を牽き入れたるが、此の家は阿魯科爾沁のメリンの家にして、其處に富みたる家四戸軒を並べ居れり。こは何づれも一族にして余等の其の家に入らんとするや、主人は不在と稱し、其の子息なる男出て來り、頻りに余等の宿泊を辭退せしが、余は是非共此處に一泊せんと、車を下り、荷物を屋内に運び入れしめぬ。初は此の子息も心安からざる風なりしが、夜に入りて互に心打釋くるに及びては、面白き談話等も交ゆるに到れり。

阿魯科爾沁王の近侍

此の子息は阿魯科爾沁王の近侍にして、頗る音樂を能くし、余等の爲めに蒙古樂器ホルレーを持ち出で、自ら之を彈じ、蒙古謠等を唄ひて余等に聞かせぬ。彼は尙ほ輿に乗じて、シヤーマンの巫女の有様及び、此の地方に行はる、レーシ、トーン等の宗教者の舞踊、歌謠、樂器

音楽の天才

余等の蒙古
旅行を即興
詩に作る

の打方等を示さんと、石油の空罐を打ち叩きつゝ其の真似をなせり。彼は又た、真に音楽上の天才を有し居るとも言ふべく、即ち余等が、遙々日本より此の蒙古地方に旅行しつゝある事を、一種の即興詩に作り、之を其の樂器に和して歌へり。

余等は斯くして此の一夜を愉快に送れり。

六月二十八日。朝バインタラを出發し、其の前を流るゝ河を渡りてより、山道に差しかゝり西方に向ひて進みしが、暫くにして又た一河畔に達せり。此處より地勢漸く一變し、今迄の山道に引きかへ、全く砂地となれり。之れ即ちヘイルコロの流域に出でたるが爲めなり。

ヘイルコ
ロ河

シヤラ
ブス村

バインタラ村より十五清里許にして、シヤラブス村に到着し、休憩して茶を喫し、其間に種々の調査をなせり。

余は既に、扎魯特に入りて風俗一變せるを説きしが、前夜一泊せる阿爾科爾沁のバインタラ村より、今日旅行し來れる此の附近に於て、其の風俗又た同一にして、即ち此の時には氣候既に夏の有様を呈し來れるを以て、何れの蒙古のテント小舎も其の外圍は皆、草の如きものを以て壁となせり。

蒙古の夏

蒙古小兒の
搖籃

此處にて余は、小兒のウルキーに眠り居るを撮影せり。(寫眞參照) 元來内蒙古地方一般に小兒の二三歳に達する迄は、此のウルキーと稱するものゝ中に縛り眠らしむ。ウルキーとは恰かも搖籃の如きものにして、ウルキーの中に毛氈を敷き、幼兒の腰部には砂を入れ、其まゝ小兒を毛氈にて包みて寝かし、上より紐を以て縛り居るなり。而して小兒の泣き出せる時は板を揺かし、或は之を抱き上ぐるなり。此は外蒙古にも亦、西伯利亞の諸民族間にも行はれ居る風俗なり。

此の附近の地方は、牧畜も少しは營めるも多くは農業にして、前にも言へる如く黍の類を植ふ、之が收穫を以て重に生計を營み居るが如し。

此の地方にも亦東胡民族の遺跡あるものと見え、余の許に銅の鏃等を持ち來れるものあり。又たバインタラ村附近にても、土器の破片の存在し居るを見たり。

余等は休憩の後、牛車の車を代へて更に旅行を繼續せしが、五清里許りにしてヘイルコロの河岸に達せり。此の時は既に雨期なりしかば、河水著しく増加し、例よりも大河となり居れり。余等一行は漸くにして河を渡り、暫くは其の河床の砂地を進みしが道は更にマンハの丘陵となれり。余等のバインタラを出發してより上り、來れる丘陵のヘイルコロに近く盡くる處よ

農を主とす

東胡の遺跡

り、今余等の上りつゝある丘陵迄は、即ちヘイルコロの河床にして、凡そ十五清里許りもあるべく、而して其の中央を河は流れ居るなり。

此のヘイルコロは著名なる河にして、支那の地圖にも其名現はる、既に余等は、曾て阿嚙科爾沁王府の方より興安嶺を越ゆる際も、此の河に沿ひて上り行けるが、此の日余等の渡れるは、前に渡れる地點の河下にして、同一の河流たるは確かなり。而して此の河は更に東南に流れ、巴林より流れ来るウルテムレンと合したる後、遂にはタプントノール（チガステノール）に注ぐものにして、曾に阿嚙科爾沁のみならず、此の附近にての大河なるが、歴史上其他に於て注意すべき河なり。

此の河の沿岸に於ても、東胡民族の遺跡を發見せり。之に依りて昔時此の地方に住民ありしを知るべし。

ウルテムレン河畔には、有名なる遼の上京の古城あるが、此のヘイルコロの沿岸にも亦遼時代の城址あり。此は嘗て四月二十九日の項に於て述べたる處なるが、要するに此の河は諸種の方面よりして、最も研究の價值あるものなり。又た此の河の流域地方は、最も豊饒なるを以て、阿嚙科爾沁の村落は、主としてヘイルコロ沿岸にありと言ひ得る位なり。

ヘイル河の
價值

河畔の古城

豊饒なるヘ
イル河流域

ボルチカ村

全村一家族

主人銀塊を
贈らんとす

東胡の遺物

王府の山迎

余等は此處よりマンハの丘陵に上りて進みしが、道は次第に少しく西に寄りたる北方に向ひ、十四五清里許り進みて、ボルチカと稱する一村落到達せり。

此の村はマンハの丘陵の上に位し、富める家十五六戸許り軒を並べ居れるが、此は悉く一家族にして、大なる役人の家なり。余等は此村に一泊する事とし、其の家に入りしが、天幕の中も極めて美しく、待遇も亦頗る厚かりき。

六月二十九日。午前八時頃ボルチカを出發す。出發に臨み、此の家の主人は銀の塊を持ち出て、餞別として余に贈らんとせしが、余等日本人は金錢を受くるを好まずとて之を辭し、主人及び家族に見送られて此處を出てたり。

道は等しくマンハの丘陵にして、牛車を行るに尤も困難なりしが、余等は西方に向ひて進み行き、十清里弱にしてホンテと稱する一村落到達し、此處より道を少しく西によりたる南にとりて、マンハの丘陵の上を歩みたるに、五清里許りにして此の丘陵盡き、更に新なるマンハの丘陵出て來り、余等は其の上を進み行けり。途中東胡民族の遺したる器物を發見し、土器、鐵製の小道具、及び其他のものを多く採集せり。

時に天候俄かに變化し夕立降り來りしかば、余等一行は雨を冒し、少し南によりたる西方

王府の優遇

に向ひて車を驅れり。暫くして王府の方より余等の出迎として、騎馬の役人の來るに會し、其の案内にて阿魯科爾沁王府に入れり。余等の前に此の王府に來れる際は、王府の待遇最も悪しかりしが、今回は非常に優遇し、余等の爲めとて既に設けられたる家に案内せり。余等即ち此處に一泊する事となれり。

三〇

二、蒙古相撲の調査

王府滞在

六月三十日。今日は王府に滞在して、日記の整理其他の取調に従事する事とせり。而して此の時余の主として取調べんとするは、相撲に關する事なり。

蒙古相撲の調査

蒙古には何れの地方にも力士あり。此の力士は我が國の王朝時代、若くは舊幕時代のものゝ如く、蒙古各王の抱力士にして、平常は其の村に居れども、祭其他の場合には召出されて、相撲の技を闘はすなり。而も相撲の儀式は、主としてオボの祭の際行はる。

蒙古各王府は競うて力士を養成し居れるが、殊に此の阿魯科爾沁王府は、内蒙古に於ても、力士の養成に就て最も有名なる處なれば、余は其の研究に最も便多からんと、即ち王府に依頼して力士を招ぎ、其の風を撮影すると共に、種々其れに關する取調を爲せり。今其の結果

オボの祭の儀式

を少しく左に述べんに。

相撲唄

オボの祭日には、種々の儀式を行ふを例とす。相撲も亦其の一なり。蒙古の相撲には、別に土俵の如き設け無く、地上に於て唯だ其の力を角するのみ。然れども此の日の相撲場には、正面に王の天幕を設け、其の左右には臣下の天幕を張り、王以下家臣等は此處にて觀覽す。其他は一般民衆の席にして、見物山を築くと云ふ。相撲は又た東西に分たる。而して相撲の初まる前、及び一番の取組終る毎に相撲の唄歌はる。此の唄は先づ東の方より初め、次に西と順次繰返すなり。斯くて力士等は此の唄に連れて、相撲場に現はるゝなり。此の時各力士には必ず一人宛の付添人ありて、今日の相撲は大切なる相撲なれば、よく注意せよと傳へ、終りて愈々相撲となるなり。而して相撲は前述の如く、土俵の設けも無く只力を角するのみなるが、其の勝負は倒れたる方の負となるなり。若し雙方共倒れざれば、幾時間經過するも其の勝負決せぬなり。

勝負の決

力士の風俗

力士の風俗を見るに、彼等は上に日本の柔術家の用ゆる如き、袖は脇迄にて丈は腰の邊迄ある、皮製の筒袖の厚き刺子を着し。脚にはバツチを穿き、足には長靴を穿つ、而して其の腰には、虎の皮を描きたる布を巻けるものあり。又たはヒダを取りたる腰巻の如きを着くる

相撲は古代より行はる

もあり。二見其の古風俗たるを知る。

相撲の技は昔より、此の民族の間に行はれたるものにして、契丹にもあり、蒙古にも古くより行はれたるなり。之等は我が國の古代に於て行はれたる、角抵ツクビと共に深く研究して興味ある事と思はる。余の妻は此の相撲唄を聞きて之を樂譜にとれり。

王府より馬を贈らる

今日は斯る取調に一日を費せしが、此の日王府より馬一頭を贈らる。余は前に東烏珠穆沁、西烏珠穆沁、西扎噶特、東札噶特の各王府より馬を贈られ、既に四頭の馬を所持せしが、茲に於て更に一頭を加へ、遂に五頭となれり。

蒙古の雨季

此の日夕立あり。余等の滞在せる天幕内に雨少しく漏れり。斯く連日降雨あるに見るも、此の地方の既に雨季に入れるを知るべし。

三、巴林に向ふ

扎噶特の役人別を惜む

七月一日。阿噶科爾沁王府を出發す。余等の西扎噶特王府出發以來、此の時迄隨行し來れる役人は、此處より歸る事となれり。彼は西扎噶特王府のチンステフンにして、年齡三十四五許り、性伶俐にして、多少支那語をも解し、談判、交渉等には非常に都合よく、余等之迄

新なる隨行者
近村有名な歌ひ手

の旅行中、彼より得たる利益頗る大なり。されば余等も彼も此の時非常に別を惜みしが、如何ともする能はず、即ち相當の謝禮を與へて之を返し、此邊より新たにメーリン及び兵士一名、翁牛特迄隨行する事となれり。而して此の新に隨行する事となれるメーリンは、蒙古唄を能くし、音楽家なれば、唄ひ手として此の附近にて有名な男なり。此の王府近傍にて此の男を知らぬものなく、余等前日蒙古唄を聞きしも此の男なり。されば余等の研究上にも大に便宜ならんと、遂に同行する事となれり。

オームリン河
トギーヌアイラ村

阿噶科爾沁王府を出發してよりは、主として丘陵の上を、少しく西によりたる南方に向ひて進む。此の時氣候漸く夏季に入れる事とて、余等は山上にありて、酷しく暑さを感じ來れり。此の丘陵には草叢生し、二三の美しき草花咲き居りしかば、余等は之を採集す。十五清里許も進みし頃、オームリン河の流に出て、之を渡りてトギーヌアイラと稱する一村に達せり。

余等は尙ほ旅行を繼ぐる豫定なりしが、此處にて車及び人夫を代へざるべからざるよ、遂に此村に滞在する事とせり。

余等の車を牽き入れたるは、此の村のタイチの家なるが、タイチは余等の宿泊するを非常に

村役人の冷遇

嫌ふらしく、最初は種々の物を命ずるも、總て無しと答へて應ぜざりしが、余は彼れに叱責を加へし結果、態度俄かに一變し、漸くにして種々の物品を持ち來れり。而も茶其他總て畧したる如く、待遇之迄の地方と異なれり。

元來蒙古人の癖として、暴言を吐き又は理窟を言はんとする時は、概ね酒を飲みその勢を藉るを例とす。今日のタイチも亦此例に洩れざりしが、遂には酔も醒めて前の無禮を謝するに到れり。

トイギヌアイラは、山間に位する村落にして戸數も多し。此の村は阿喇科爾沁王管下最終の村にして、余は嘗て此處に宿泊せる事あり。

此の日は種々の調査をなして此處に滞在せり。

七月二日。トイギヌアイラを出發するに當り、更に此の村のメリン及び兵士余に隨行し、東翁牛特迄同伴する事となれり。

此の村を出發してより山路に差しかゝり、上りの道を主として少しく西によれる南に向ひて進む。山を上り十二三清里許り進みて一の峠に達す。オトガンタバと云ひ、オボあり。峠を出發してより或は上り或は下り、無人の境を更に同方面に向ひて進み行けるに、余等のオ

酒の勢を藉る蒙古人の暴言

トガンタバを下り始めた頃より、天候俄かに一變し遂に夕立となりしが、余等は雨を冒して進めり。

曩に余等の此處を通過せる際は、山中の原野に一の草も無かりしが、今や草も生え木も亦綠になり居れり。而して此の途中にて、前にも述べたる所謂クキルスノトカと稱するものを見たり。蒙古人等の言ふ處に據れば、此の地には昔クキルス人住み居りしを以て、其の家の趾を存するなりと。余は此のノトカを更に精確に調査せんと思ひ居りしが、此の日途中に於てノトカを發見せしかば、即ち車を捨て、其の場所に到り仔細に調査せり。

ノトカの存するは、後に丘を負ひたる平坦なる地なり。而して石を積みたる跡、及び石器、土器、石臼、瓦等の散亂せるあり。余は之等の遺物の中より太平通寶(宋太宗太平興國年間)元豐通寶(宋神宗元豐年間)都合二枚の古錢を得たるが、其の明かに遼時代のものたるを確め得たり。即ち此の處は今こそ無人の境なれども、遼時代には人家ありたるを知るべく、又た現今水無しと稱する此の地には、昔時人家ありしを以て其の水ありし事確なり。而して蒙古人等の所謂クキルスノトカと稱するは、遼時代の遺物を言ふものなる事、之等に見るも明かなり。

曩の荒原今や草茂れり

クキルスノトカの調査

クキルスノトカは遼時代の遺物

此の遺跡に就て注意すべきは、彼等は一方に瓦、陶器、鐵器等を用ひしに拘らず、同時に例の突つき模様ある土器及び石器を使用せる跡あり。其は遺物に於て明かにして、即ち遼時代中流以下の者は、金屬器を使用すると共に、尙ほ石器の名残を存じ居たるを知るべく、而して其の時代は、此の發見せられたる古錢によりて略ぼ推定せらる。

クキルスノトカの調査を了り、再び車に上り雨を冒して行を續く、オトガンダバより二十二三清里にして、オボテンタバと稱する峠に達せり。此の峠は道なりになり居れども、さのみ急ならず、殆んど上りなるを感ぜぬ程なり。されど此の附近は大なる岩山となり居れるによりて、其の興安嶺の南方に延長し居る山脈なるを考へらる。而して此のオボテンタバには其の名の如くオボあり。此の峠も亦以前通過せる處にして、曾て此處の條にて杏子の滯せるを談りしが、今や前に滯なりし杏子は、悉く青葉になり居れり。

峠を下りて五六清里許り同じ方向に向ひて進みしに、出迎の男騎馬にて來り、余等の到るを待ち居れるに會し、即ち彼の先導にて進み行きしが、更らに五六清里許り進むや山は次第に遠かり、遂に一の平原に出でたり。此の平地は即ちウルテムレンの流域にして、其の河床を爲せる事とて濕氣いと多し。此の河床の幅は非常に廣く、且つ其處には人家多し。

興安嶺南方
の山脈
前日滯なり
し杏子の今
は青葉とな
る

ウルテムレ
ン流域

コルバン
ム村
巴林王管下
に入る

支那風の家
走那風の馳

ウルテムレ
ンの價值

杏の林

杏の根の炭

巴林の一財

興安嶺の一
支脈

暫くにしてコルバンムと云ふ村に達せるが、此の村は既に巴林王管下の地にして、余等は全く阿喇科爾沁領を離れたるなり。

余等は村内の喇嘛の家に泊る事とせしが、彼は種々余等を待遇し呉れたり。此の家の構造はバイシニングルにして、御馳走も不完全ながら支那風のものなりき。主人は羊一頭を屠りて余等に饗せり。余等の此家に入れる頃には雨益々激しかりき。

ウルテムレンは、余等の曾て旅行せる遼の上京の邊より流れ來り、此のコルバンムムの附近より更に東南に流れて、前日余等の渡れるヘイルコロと合し、遂にタブソトノール(チガステノール)に注ぐなり。而して此の河は學術上其他最も注意すべきものにして、遼の上京も此の河の沿岸に位し、又た今日蒙古人の住居も多く此の河の流域にあり。

七月三日。コルバンムムを出發し、平地を暫く進みて再び丘陵に出づ。丘陵の上を主として西南に向ひて進みしが、此間の丘陵には草木及び木の生ゆるあり。殊に杏子の木非常に多し、樹木は丈け餘り高からず。巴林の蒙古人は、此の杏子の根を掘りて炭を焼き、ガタと稱して之を支那人に賣り居れり。されば此は巴林の一財源をなし居るなり。

此の丘陵亦興安嶺の一支脈なるが、余等は斯かる道を四十清里許り進み、始めてハツテン

モイボルゲン村
ヘーヘンツム村

コロと稱する河に達せり。河を渡りてよりは其の西岸に沿ひて進み、モイボルゲンアイラに到着せり。余等は此の村を出て、更に行く事五清里許り、ヘーヘンツムと稱する村に入りて茶を喫せり。

炎熱極くが如し
東湖の遺物

此の日の旅行は殆んど丘陵の上のみにして、殊に太陽の照り付け方劇しく、車上にありても、堪え難きばかり暑さ酷しかりしを以て、余等はアンペラ等にて車に屋根を作り、以て纔かに暑を凌げり。ヘーヘンツムは、丘陵の間にある村にして、此の丘陵上には、東湖民族の遺せる石器、土器の破片を多く存せり。此處にも亦、昔此の民族の居住せし事、之によりて考へらる。

ハツテンコロ村

余等は更に牛車を驅りてヘーヘンツムを出發し、十清里許にしてハツテンコロ村に達して一泊する事とせり。余等の入れる家の待遇響應等尤も悪しく、次第に人情の異なり來れるを知れり。

此の夜劇しき夕立ありたり。

四、潢河を渡る

瓦の破片を
存す

七月四日。ハツテンコロの村を出發し、五十清里許りの間を、主として西南方に向ひて進みしが、此間全く無人の境なり。道は總て丘陵の上のみなるが、途中往時人の住める跡と見え、瓦の落ち散れるを見たり。現今此の附近に居住する蒙古人は、草葺の天幕の中にのみ住むに、斯く瓦の存するを見れば、昔此の地に瓦葺の家ありたるを知るべく、而して之等の遺跡は遼時代のものたるや明なり。

パロンタバ村
トノボロボインテ村

斯くして余等はホンゴル廟を経て、チユグンホシヨータと稱する處に出で、更に三十清里許り進みてパロンタバ村に到り、尙ほ丘陵の上を行く事五清里弱にしてトノボロボインテに達し、此處に暫く休息して茶を喫めり。

潢河流域に
出づ

此の村落は丘陵の上にあると言へ、將さに丘陵の盡きんとする處にして、此處より前方二清里許りにして、潢河の流域に達すべし。即ち前方を眺むれば、潢河の流るゝを望み得べく、而して潢河の流を超えて、彼方に一帶の丘陵を見しが、其は既に東翁牛特に屬するものなり。此の村にも亦往時住民ありしもの、如く、陶器、瓦等の破片無數に落ち散れるを見たり。之等によりて、當時居住せし人民の文化の程度、遙かに今日の蒙古人より進歩し居れるを知る。而して其の時代は、殘存する陶器の模様等より推察して、明かに遼時代なるを確め

古代住民の
文化

得たり。

四三

遼時代の古
址

又た此の村の東方に當りて一城趾あり。城趾は土塼を以て圍らされ、方形にして一面の長さ百歩、即ち周圍四百歩あり。土塼は今や潰敗せりと雖も、高さ二間半、幅七歩位あり。而して城の中央部には、昔高き建物のありたるらしき跡あり。余は其の附近にて陶器の破片等を拾へり。此の城趾の、遼時代のものたるは、殆んど争はれざる事實にして、殊に其の潢河に臨みて存するの一事は、最も注意すべき點ならん。城趾より潢河の水邊迄は約五清里許りあり。

潢河の橋の
跡

城趾の東方に當りて一の高き丘陵あり。蒙古人等は此の山をバインホシヨトと稱し居れり。彼等の語る處に據れば、此の附近の潢河の土地をフシハシラガと呼び、昔此の處に橋ありしなりと。巴林には尙ほ西方にホーロクヌハシラガと稱する處あり。遼時代に潢水石橋のありし跡なるは、曾て述べたる如くなるが、此處にも亦斯る口碑あるに考ふれば、往時橋のありしやも計られず。兎に角研究を要すべきものなるが、思ふに此處も亦遼時代に於て、交通路の一なりしものか。

余等は之より潢河の流を渡らんとするも、今や雨季にして河水著しく増加し、流亦激しけ

潢河を渡る

一里の大河
水多し

人馬屢々危
し

ボロギン村

れば、彼處より渡らんか、此方よりせんかと大に心を苦めたり。斯くする中に、阿嚙科爾沁より隨行し來れる役人は、此の村の役人に交渉して、人夫を出さしめられたれば、即ち巴林の蒙古人等多く集まり來り。余等の車を更に他の車に載せて、荷物の濡れぬ計を爲す等頗る忙しく、一方又た五人計りの若者は、徒渡をなして瀬踏を試み、遂に渡る可き道筋を定めたれば、一つの車に馬三馬を附け、車の前後をば四人の若者にて守り、此村の村長等は騎馬にて之を指揮して渡れり。余は城趾の調査を了へざりしかば、余の妻先づ渡りしが、濁水漲りて車、馬等稍もすれば押し流されんとし、實に凄じかりき。此の附近の潢河は幅一清里許もあるべく、一行のもの一人として、衣服を濡らさぬはなかりき。妻の一行は辛うじて對岸に達せしが、城趾の調査を終へたる余は、役人と共に騎馬にて渡らんとせしに、水勢急にして人馬共に流されんとせし事幾度、漸くにして前岸に上れり。

河を渡りてよりは、既に東翁牛特の地にして、土地はマンハとなり來りしが、處々水溜、濕地等あり。余の妻の一行は余等に先だちて進み行けるを以て、余及び役人等は馬を早めて之に追ひ付き、五清里許にしてボロギンアイラに達し、新しきウブスングルに入る。此の家は富者にして、主人夫婦は余等を優遇し、晚餐には羊を二頭屠りて饗應する等、愉快に一夜を送

東翁牛特領
に入る

れり。

此の村は既に東翁牛特領なるが、余等は明日此處を出發し、愈々王府を指して進む豫定なり。

東で壁の砂
漠地に入る

七月五日。前夜一泊せるボロギン村は、其の位置潢河に接近し土地はマンハなり。此處より東翁牛特王府に到る間、及び其東西も悉くマンハにして、即ち是より滿洲に至る迄、一帯の地は皆砂地をなし、所謂東戈壁の沙漠となるなり。されば此の口よりの旅行は、牛車の困難察するに餘りあり。即ち此の村より、車一輛につき牛三頭宛を附けて出發する事とす。

柳の林

午前八時頃準備全く整ひしかば愈々出發し、主として潢河の沿岸を進めり。此の邊一帯マンハにして諸處に柳樹を見る。此の時は柳の葉茂り、恰かも柳の林を分け行くの思ひせり。

支那人

此處に支那人の家一軒ありしが、彼は支那の商人にして種々の雜貨を蒙古人に賣り、又た蒙古人より色々の物品を交易し居るなり。

東胡の遺跡

余等は柳樹林を進む中に、途上東胡民族の遺跡を發見せり。遺跡は砂地の上にあれども、其の部分は地黒色を呈し、地盤は固まり居れり。此は彼等當時の住民が、牛、馬、駱駝、羊等を飼ひ居りしに、之等家畜の糞其他に於て有機物を含む爲めなるが、或は人の踏みたる結果

牛車の困難

斯る状態を呈したるものならんが、其の處には當時彼等民族の使用せる石器、土器及び鐵鏃等あり。之を以て彼等の鍛冶をなせし事を知るべし。又た鐵製の帶留のビジョ等をも發見せしが、之等の遺物は、悉く東胡民族のものたるや明かなり。傍に又た石を置けるを見たるが、此は其の家屋の礎石なるべし。

インギンタ
ラ村

余等は斯る調査をなしつつ、柳樹の林を進み行けり。此の柳は高さは余等の身長より、高けれども、細くして恰かも竹の生え居る如く密生し居れり。此の日余等の牛に蠅の集まり來るもの多かりしかば、余等は柳の枝を折りとり、蠅を追ひつゝ車を進めたり。而も道はマンハにして牛は非常に疲るゝを以て、隨行の役人は馬を飛ばして村落に到り、新しき牛を徵發しては取り換へく漫々として進めり。

家人余等の
要求を拒む

出發してより七清里許りの間は、主として潢河に沿ひ、南方に向ひて進みしが、漸くにして河と遠ざかり、八清里許りにして初めてインギンタラの村に到着す。此處も亦マンハの平原にして、人家少し許りあり。余等は爰にて休息し茶を喫まんとて、車を捨て東翁牛特の役人の家と云ふに入りしに、主人は役所に出で、不在にして、家兒其他の留守人のみ家にありしが、其を口實として茶もホーロクスンバタもなしとて、一切余等の需に應ぜず。止むなく

潢河以南人情狡猾なり

支那商人と會ふ

旅行の困難

砂丘に隠れたる蒙古人の家屋

王府よりの公道

余等は茶も喫まず、此の日役人の携へ來れる、羊の肉を煮て食ふ事となれり。即ち潢河を越ゆる迄は人情尚ほ純朴なりしが、爰に至りて人情のいたく狡猾になれるを知るべし。之等は外國人の旅行者の最も注意すべき事なり。

村を出て、尙も南方に向ひて進む、道はシラムレンの往來にはなり居れど、全く砂漠の中なり。途中南方より牛車數臺通過し來れるに會せり。彼等は支那の商人にして、巴林に行くものなるが、牛車を牽けるは蒙古人なり。余等は彼等と詞を交はして、彼等は北に余等は南に進み行けり。此の道もマンハなれば、牛車の進行非常に困難にして、牛を取り代へて進むべきべからず。而も途中には蒙古人の家なく、道路より五六清里も距たりたる砂丘の間にのみ其の村落を構へ居る風なれば、余等には何處に家あるかを知るによしなく、即ち途中より東翁牛特の役人を伴ひ來り、彼の先導にて村を見出しては牛を徵發し、以て旅行を繼續せり。道は斯の如く砂地なれば、元より飲料水もなく、旅行最も困難なるに、牛車の歩み遅きには尤も閉口せり。余等は主として此の砂原の道を進みしが、此は翁牛特王府より潢河の沿岸に達する公道なり。元より公道とは言へ正しき道には非ず。只マンハの間に都合よく人馬牛車の往來すると言ふのみにして、或は車の轍の深く砂に没して却て旅行困難なる趣あり。

旅行の危険

往路を歸る

シヨロン村

役人村の名を偽り傳ふ

吾等の村人を祝す

途中人に會ふ事も稀なれば、若し誤つて道を迷へる時は、何處に迷ひ行くやも計られず。或は一命にも關するが如き事あるべく、且つ此邊は各所に小山の如き砂丘をなし居れば、四方を展望する事も出來ず、一の砂丘を上げば又次の砂丘あり、且つ牛車の轍は砂に没して進む事最も困難なり。此の途は余等の會て潢河を渡らんとする際、通過せるものにして、今余等は其時の同じ道を辿りて進みつゝあるなり。

此の途上、二三の蒙古人の駱駝又は馬に騎りて進み行くに會へるのみ、他は何物をも見ざりき。今朝出發以來四十餘清里許りにして、シヨロンヌアイラに達す。戸數四許りの小村なり。此の村は余等の會て一泊せる處にして、即ち三月廿五日の條にあるは之なり。

此の村を當時はチャガンマンハの名を以て述べたるが、此の名稱は當時余に隨行せる役人の勝手に命名せるものにして、實はシヨロンヌエーラと稱するなりとぞ、其は此の時初めて確めたるものにして、尙此外にも先に役人より聞きし東翁牛特の地名に、偽名多きを悟りぬ。

此の時天俄かに掻き曇りて、雨模様となりしが、驟て一二滴降り出したり。余等一行の此の村落を通過する際には、村の男女多く來りて、余の無事に歸り來れるを祝し、殊に幸子が前より非常に成人せるを見て、彼等は大に喜び呉れたり。余等は再び此の村に一泊せんとせ

バインホデル村

しが、更に前方に進む事となり、五清里許り行きてバインホデル村に達し、此處に一泊する事となれり。

四六

バインホデルの村も亦砂丘の間にありて、往來よりは認められず。此の邊の蒙古人等は、前にも既に述べたる如く、往來より數里距りたる砂丘に隠れて家を構へ、容易に旅人の寄り附かれぬ様になし居れり。余の入れるは、此の村の役人の家なりしが、大に余等を待遇せり。余は彼と日本人の語等をなして一夜を過せしが、此家に入りたる後ち、雨漸く降り出せり。

余等此の日の旅程は、主として潢河の沿岸より真南に向ひ、マンハの道を経過し來れるものなるが、東翁牛特の地はマンハの中に位するを以て、一般に富裕ならざるは確かなり。此は曾て東翁牛特の條に於て述べたる處の如し。

此處尙一つ注意すべきは、シヨロヌエーラの附近にある砂丘の間に、鐵鏟の無數に落ち散り居れる所を發見せし事是なり。即ち蒙古人の所謂テムルヌバスにして、之の遺跡を注意して觀察すれば、其の間に土器をも存せり。之によりて當時東胡民族の、此處にて鍛冶をなせる事明かなり。即ち之等の鐵鏟は當時熔解せる鐵の鏟なり。斯かる砂原の中に、昔時住む人あ

東胡の遺物

シヨロヌエーラ山

東胡の遺物

エルテンオーラ山

チュンツプ河

りて、而も鍛冶をなせしと云ふに至りては、最も興味ある事なるが、又た余等の宿泊し居るバインホデルの附近にも、彼等民族の居住せしものと見え、土器の破片等の多く落ち散り居るを見たり。

五、東翁牛特王府より赤峰

七月六日。午前八時過バインホデルを出發し、今回は主として西方に向ひ、マンハの丘陵を傳ひて進みしが、十清里許りにしてシヨロヌエーラの山に達す。此は小さき山にして岩石露出し、又た樹木も生え居りしが、其中には少しく大なる木もあり。之によりて昔此山に樹木多かりし事を考へ得べし。此處にも亦東胡民族の遺したる、土器の破片等の落ち居れるを見たり。此の山上より四方を眺むれば、マンハの丘陵の重疊し居る状態一眸の中に集まり、余等は斯かる境を経過し來れるかを思へば、一種恐ろしき感起るを禁ぜざりき。

此の山を下りて更に南方に道を轉じ、山の間を傳ひ或は砂丘を越えて、余等の最初の項に述べたる、エルテンオーラ山の麓に出てたり。此の邊は既にチュンツプ河の流域にして、河は南に向つて流る。エルテンオーラ山はマンハの間に突出せる山なり。此の附近の事に關し

ては、以前既に述べたれば之を略す。

翁牛特王府
を通過す

此處より主としてマンハの上を傳ひ、西南に向ひて進みしが、この丘陵の上にも亦東胡民族の遺跡ありき。かくして五清里許來りて東翁牛特王府に達す。余等の王府に入れる頃雨少しく降り出て、殊に王府よりも立寄られたしと云ひ越せるも、既に烏丹城も近づき居れば、更に車を進めて午後五時頃烏丹城に到着し、以前一泊せる旅宿に宿泊する事とせり。

烏丹城に入る

七月七日。七月八日。七月九日は烏丹城に滞在し、此處より新たに支那人の車を備ひて赤峰に歸る事となりしかば、七日の朝、阿魯科爾沁より隨行し來れる從人等は歸り去り、余等は全く夫婦と小供とのみにて、支那旅宿に泊る事となれり。

遼時代の古城
其他を調査す

此の三日間に余は遼時代の古城其他の調査に従へり。此地の支那官憲は余等を訪問して無事此の地に歸り來れるを祝し、又た東翁牛特王府の二三蒙古人等も余等を訪問せり。余等は最初東翁牛特王府より旅行を開始し、今復た此處に歸り來れる事として、蒙古人の訪ひ來るもの多し。又た此の市街の男女も、余等外國人夫婦の小兒を連れて、蒙古を旅行し來れりとして、見物に來るもの煩はしき位なりき。

訪問者引も
切らず

七月十日。朝此地を出發する事となれるが、此町の馬夫にて屢々蒙古に出入せしと云へる

男は、其所持する車にて、余等を赤峰迄送り度しとの事なりしかば、余等即ち其の請を容れ、彼より支那馬車二臺を備ひ、支那官憲より出し呉れたる騎馬巡察と共に出發す。チュンツツブ河を渡りて其の夜は滿子坡に一泊す。

赤峰に入る

七月十一日。午後四時陳家店に着宿す。

七月十二日。赤峰到着此の間の旅行地は皆て述べたる處なれば今之を略す。余等の赤峰に入るに先立ち、隨行の巡察は官憲に通知せしかば、曩に余の事に斡旋せる赤峰の武官尙氏は、余等の會て宿泊せる旅館に導き、其夜は又た特に饗宴を張れり。

武官尙氏の
好意

余は暫く此處を中心として調査に従ふ事となれり。

想ひ起せば三月十五日此の地を出發してより五閱月、間断なく旅行を続け今再び此の地に歸り來れる事なれば、一種の感に打たるゝを禁ぜざりき。

五閱月の旅
行より歸る

赤峰滞在

今回の旅行に於て、我が學問上、其他に得たるもの頗る多し。

余等は日記の整理、調査物の修整、採集標本の始末等の必要、及び西翁牛特の英金河畔に就て調査する爲め、暫く此處に滞在せんとするなり。

第十四 赤峰より北京

一、第二回の旅行を始む

赤峰附近の調査

七月十二日赤峰に到着してよりは暫く此處を中心とし、或は此附近を旅行して調査をなせり。此の時北京方面より桑原、矢野兩博士の來るあり。三島海雲氏亦北京より此地に來れり。

第二回の旅行を始む

余等は又たこれまで各地にて採集せしものを北京に送附せしが、一方此附近の調査も終りしかば、更に旅行を始むる事とせり。今回の旅行は先づ北京に出て、北京より張家口方面に赴き、其よりドロンノール、經柵を経て潢河に出て、更に東部蒙古を取調べて再び赤峰に歸り來る豫定なり。

赤峰出發

八月二十二日、赤峰に滞在する事四十二日、愈々北京に向つて出發する事となれり。余等一行は車に乗り、之迄採集せる荷物は別の車に積み、護衛として一名の馬勇を伴ひ行く事とせり。

西伯河

午前八時赤峰を出發し、主として西南の間に道を取り、余等の久しく滞在せし喀喇沁に向ひて進む。十清里計りは山間の廣き道を歩みしが、漸くにして一河に達す。之れ即ち西伯河に

して、喀喇沁のモーチンバーより源を發し、英金河に注ぐものなり。二月頃迄は河水氷結し居れども、其後は漸次解け始めて水流となるなり。此の河は西喀喇沁にとりては最も大切な關係を有し、同地方の蒙古人は王として、此の河の沿岸に居住すと云ふも不可なき位なり。是迄の旅行は主として廣漠たる砂漠、又は山と稱するも實は大陸的に起伏せる丘陵を歩むに過ぎざりしが、今此の西伯河岸に出づるに及び、全く從來と趣を異にし、即ち山と山との間を、此の河の沿岸を傳ひて旅行する事となり、全く谷間を行くの思あらしめぬ。

此處にて西伯河を渡り、其の西岸に沿ひて進みしが、進むに隨ひて道漸く狭く、遂には全く山中に入るに到れり。河を渡りてより十清里、新地と稱する處に達せり。

新地

喀喇沁領に入る

今此地を新地と稱し居れども、蒙古人は之をサンクと稱す。サンクとは蒙古語の倉庫の意味にして、昔此地に倉庫ありし爲めなり。新地より以南は喀喇沁王府の地にして、以北は翁牛特の地なり。現今は漢人と蒙古人と雜居し居れども、元は蒙古人のみなりしなり、乾隆以後漢人の此處に入り來るもの漸く多く、其名さへ遂に新地と稱するに到れるなり。現今居住する蒙古人は極めて少數なるが、彼等は喀喇沁の蒙古人なり。

新地を出て、より二十清里計りにして楊家營子に達し、下車して小憩す。此の地は山間の

漢民族の侵入

楊家營子

一小街道に位し、旅舎一軒あるも他は悉く農家なり。此の時既に正午を過ぎたれば此處にて午餐を喫する事とせり。此地は純然たる漢人の村落なるが、其の飲食店の如きも亦支那風なり。此の家は旅客を宿泊せしめ又た飲食を供す。

小塔子

午餐を了へたる後楊家營子を出發し、赤峰より七十五清里計りにして小塔子と稱する地に達せり、此の時俄かに夕立降り來りしかば、余等は車を早めて小梁子に達し、此地に一泊する事となりしが、時に日も漸く暮れんとする頃なりき。赤峰を距る事八十清里。

小梁子

漢民の北伐

此の日の旅程は、主として西伯河の谷間を傳ひ來りしが、途中經過せる新地以南には蒙古人の住むもの無く、悉く漢人の村落となり居れり。之等に見るも、喀喇沁に支那人の多く侵入し居るを知るべし。

二、喀喇沁王府

八月二十三日。午前六時頃小梁子を出發する事となれり。

小梁子新道

抑も此小梁子の地たるや、其名の示す如く小さき岩石の峠にして、康熙帝の時始めて此峠を開鑿せるものなれば、道路は全く岩石を切り開けるものにして、西伯河は此の峠を避け、其

の麓を東方に向ひて流れ居るなり。康熙帝此の新道を開かざりし以前は、蒙古人は總て河に沿ひて此峠を迂廻せりと云ふ。

余等は車に乗りて此の道を進みしが、車輪岩石の間に入りて進行困難なりしかば、車を下り徒歩して進めり。而して蒙古人は、此峠をルイントロガイハタと稱す。又た峠の頂上に、文字を刻したる二個の小さき石を建てあり。こは蒙古字、西藏字にてオンマニバトメンと書せるものなり。

蒙古文字西
藏文學の碑

木匠營子

余等は峠を越えて再び西伯河畔に出で、其の西岸を傳ひて進みしが、五清里計りにして木匠營子と稱する地に達せり。此處も亦一村舎なれども、往來の街道に位し戸數二三十、飲食店もあり。此の村は其名の如く大工の多く居住せし處にして、乾隆以前迄は純然たる蒙古人の村落なりしが、乾隆前後より漢人殊に大工多く此の地に入り來り、自然に此の村名を生ずるに至れり。而して蒙古人も亦此の名をとりて、蒙古風に之をムチンダットと呼び居れども、今や村内一の蒙古人無く、奈く支那人の部落となり居れり。而して此の地に斯く多數の大工の入り込みしは、此の邊一帶に樹木に富み、殊に康熙、乾隆の頃には、西伯河の沿岸は一大森林なりしかば、此の地に大工等居住して、盛んに樹木を伐採せし爲めなり。赤峰より此處迄は

距離八十清里計りなるが、昔し此の地に住みし蒙古人等は、今は悉く喀喇沁王府附近に逃れ去れり。

木匠營子を過ぎてより、尙河に沿ひて進む事二十五清里計りの頃、河流俄かに屈曲せしかば、余等の進むべき方面も西方に轉ぜらるゝに至れり。而して河流の屈曲せし附近よりは、左右の山漸く遠かり、廣き平地となり來りしが、總て公爺府の町に達せり。

公爺府は喀喇沁に於て最も殷盛なる地にして、漢人の商賈も多く住み、戸數凡そ四五百、蒙古人は町の西方に、漢人は其の東方に居住す、又た喇嘛廟もあり。此地は喀喇沁王府より赤峰に到るべき道の中間に位し、喀喇沁の蒙古人及び其附近の漢人は、主として此の地に出て、必要品を購ひ居る状態なり。又た町の北方は直ちに山にして、其の山頂の高處には元朝の際建立せしと云ふ龍泉寺の遺跡あり、今は喇嘛廟となり居れり。余等は嘗て此の寺に上がりしが、其處より下瞰する景色は絶佳なり。此の寺によりて考ふるも、古くより此地の盛なりしを知る可し。朝小梁子を出發してより、此處までは三十清里計りなるが、此處にて晝餐をとる事とせり、町には飲食店も多し。

晝餐後余等は再び旅程を繼けたるが、尙も西伯河に沿ひ西方に向つて進めり。此の邊にて

喀喇沁地方にて最も殷盛なり

公爺府

西伯河畔の樹林

下瓦房

王府の保護林

樹の如き美

は西伯河の水漸く多く、水邊には柳及び榆の木多し。此の時余等の進めるは山と山との間に於て、左右の沿岸には點々村落の存在するを見る、而して此處には漢人あり又た蒙古人あり。何れも其の住居の附近に畑を耕し居れり。又た左右の山には、處々樹木の残り居るあり。昔時の森林たりし名残を留む。是迄の旅行に於て樹木を見る事稀なりしが、今西伯河畔斯くの如き樹林を見たる事なれば、一種の嬉しさに打たれたりき。

余等一行は西伯河畔に沿ひて、或は流を渡り或は上りて四十清里計り進み、下瓦房と稱する地に達せり。此處は公爺府に次ぐの町にして、戸數五六十計りの一筋町なり。住民總て漢人のみ。町の周圍には土塼を築き、芝居の舞臺をも設け、簡單なる日用の物品は此町にて求め得らるゝなり。

此日の旅行中、下瓦房に達する途に於て、西伯河に接したる平地の、總て榆及柳を以て滿され居る處を見たり。其は喀喇沁王府の保護林にして、中には大木をも雜へ居りしが、頃しも盛夏の候なれば、樹木は翠綠滴らん計りなる下に、羊の群の河水を飲み居る態實に美しく、眞に繪畫に對する思あらしめぬ。往時西伯河畔は一帶の森林なりし儗を、今も此の地に留め居るなり。

喀喇沁王府
に入る

下瓦房の市街を出て、よりは、左右の山と山との間漸次遠かり来りしが、河の北岸には漢人、蒙古人の村落を見る。三清里計りにして喀喇沁王の伯父希大人の家到達す。支那風の宏壯なる建築なり、余等は其の家に名刺を置き、旅程を続け、四五清里の間蒙古人の村落を過ぎて王府に入り。此附近の蒙古人は、天幕生活を爲すもの無く、其の状態漢人と同様なり。是れ既に述べたる處なるが、風俗習慣全く支那化され居り、只喇嘛を信ずる事と、蒙古語を話す事等の異なるのみ。

王府の位地

喀喇沁王府は西伯河の北岸にあり。此の附近は河岸兩山の距離最も廣く、殆んど五清里計りもあるべけれども、王府の後は直ちにインオーラと稱する岩山に接す。此の山は附近地方の目標となり居れり。前にも述べたる如く、蒙古人は其の住居を定むるに當りて、前は南東に開け、後は北方に丘陵若しくは山を負ひ居るもの多く、此の王府の如きも其の例にして、又た西伯河沿岸の村落も、概ね北岸に家を構へ居れり。王府は支那風の建築なるが、蒙古王府としては立派なる方なり。王府の前方は廣き平原にして楡の大樹多く、前方の山麓迄村落等の眼界を遮るもの無く好風景なり。

支那人芝居

此の目前方の原に於て、王府の催に係る漢人役者の芝居あり。棧敷、天幕等を設け、王及び王妃は家臣を随へて之に臨み居れり。元來老哈河流域の各蒙古王府にては、年々芝居の催あり。熱河附近より漢人の役者を呼び寄せ、王府附近にて三四日間之を演ぜしめて見物するなり。其の日は男女共々着飾りて之を見物し、支那商人等は此の日を當て込み、物品を賣ぐを例とす。今日は恰かも是なりしなり。蒙古人の一年にて最も樂しきは、此の支那芝居とオボの祭との二なり。

蒙古の二天
樓樂日

楡並木

余等は此の處にて王に會はんと欲せしも、少しく北京に行くを急ぎ居りしかば、王及び王妃に名刺を差出せるのみ。王府を右に芝居を左に見つゝ過ぎり、尙も西伯河岸に沿ひて進みしが、道は依然たる谷間にして、道の兩側に楡の並木あり。日本ならば松並木なるも此地にては楡を用ふ。滿洲の奉天より東京迄の間等、天子の巡幸せらるゝ道には、兩側に楡樹を植ゑ居るが、此の地も亦其と同じ意味にて、即ち街道に同樹を植ゑあり。

小瓦房

楡並木の間を進み、遂に小瓦房と稱する處に到り、爰に一泊する事となれり。此地も亦漢人の一市街にして、蒙古人も其の傍に住み、飲食店、旅舎等の設備あり。余等は其一旅舎に投ぜしが、夜南京虫の多きに殆んど困めり。

南京虫

八月二十四日。午前七時頃上瓦房を出發し、又た西伯河に沿ひ、山の間を進みしに、樹木

次第に多くなり来り、河の沿岸には榆、ホントル等あり。又た山の高き處には、松樹も見え来れり。喀喇沁王府は千米突の高地なれば、此の地方にては千米突以上より松樹を生ずるを知る。

今日は之よりモーデンバー、即ちこの附近の分水嶺を越えざるべからず。されば道は漸次上りとなり来れり。其間漢人の村落、小驛、漢人蒙古人の雜居する村落等を経過し、又た河を渡りて進みしが、道益々上りとなり、遂にモーデンバーの麓に達せり。此の峠は熱河と喀喇沁との境をなすものにして、西伯河も此の峠より源を發し居るなり。余等は峠の麓に位する駱駝山と稱する處にて晝餐を喫せしが、余等は此より車を捨て、徒歩にて峠を上らざるべからず。又荷物も車に積みたる儘にては上る能はざれば、悉く之を御し、人の脊によりて之を運ばざるべからず。即ち此處にて夫々の用意を整へて峠を上り始めたり。余は此モーデンバーを越ゆる事、今回にて四回目なるが、此の時山は一面の草生え、遠き方には樹木茂り、而も之等の草には美しき花をつけ、一種のバラダイスを現じ居れり。余等は此の野花を摘みつゝ、峠を上れり。峠は高さ一千五百米突計り、喀喇沁王府より高き事五百米突なり。其の頂上に立ちて北方を眺むれば、陰山々脈の東西に延長し居る様分明にして、又西伯河の流域も手に取

喀喇沁と熱河との境界
毛金嶺を治す
駱駝山

美しき野花

山上の展望

山城の横行

茅金嶺底

村人余等の宿泊を妨害す

る如く望み得らる。更に南方を望めば、熱河方面の山岳重疊せるを見るべし。山上又た一の關帝廟あれども、住職も無く、廟を守るものも無し。此の附近は最も危険なる處にして、盜賊出沒し、旅人を劫す事屢々なれば、漢人等は此處を通る事を最も恐れ居れり。

余等は是より峠を下り始めたが、道急にして頗る困難なり。漸くにして麓に達し、再び山と山との間を進みしが峠より十清里にして茅金嶺底に達せり。此處は全く山間の村落にして、戸數三四十計り、飲食店二軒あり。始め其の一軒に車を牽き入れしが、此の家にては如何にするも余等の宿泊を背せず、且つ大勢の男女出て來り、余等の宿泊する事を妨害せり。以て其の人氣の悪さを知るべし、而も此の時日漸く暮れかゝりしかば、余等は大に困却し、隨行の馬夫、兵士等は百方周旋、漸く一軒の宿を探し來りしを以て即ち其家に入る。此の家の主人は頗る商賣氣のある男にして、余等を待遇に努め別室に導けり。此時余等一行を見んとて村人集まり來りしが、此の家の主人は叱して彼等を追ひやれり。雨模様なりし空は遂に此の時降り出せり。今日はモーデンバーを越ゆるのみにて一日を費せり、行程百清里。

八月二十五日。早朝モーデンバー山麓の茅金嶺底を出發す、道は依然山の間なり。モーデンバーより別に一河の源を發し、熱河の方面に流るゝあり。此の流に沿ひて進みしが、途中漢

兩家見

人の村落、驛站等あり。此の時夕立俄かに降り出したるも、雨を侵して進み、夕暮近き頃兩家兒に到着し、此處に一泊する事に決せり。

南京虫の襲

余等の宿泊せる家は旅舎ならざるも、雨降り出て且つ前程の道路は、昨夜の雨にて進む事困難なれば、止むを得ず此處に一泊する事とせるなり。本日進み來りし道も泥濘にして、車を行る事困難なりしがば、僅かに八十餘清里歩みしのみなり。此の家は雜貨店にして旅舎に非ざるも、家清かりしが例の如く南京虫多く、夜中之が退治に疲れる程なりき。

三、熱河より長城

夜を冒して松樹嶺を踰

八月二十六日。朝早く兩家兒を出發し、主として河に沿ひて進む、河床の砂利の上に車を行る事なれば、進行遅々たるのみならず、車上にある余等は其の動搖の爲めに、非常に疲勞を感じ。斯くして途中にて中食をなし、尙ほ河に沿ひて幾多の村落を經過し、進む事八十清里計り松樹嶺の麓に達し此處にて河を渡らんとせしが、水深くして渡るを得ず。止むなく松樹嶺を越えざるべからず、然るに此の間道尤も悪く、車の進み頗る遅し。日西山に没し、暮色迫りて來る時、漸く村人を集めて車の後押をなさしめ、松樹嶺を上り始む。山急にして

山中の釜

上る事困難なれば、余等は徒歩して進めり。此の山中に釜の彼方此方に飛び居りしかば、余等は其の二三疋を捕へ、渡瀬博士に送らんと竊かに紙の中に納めたり。

提灯の光に急坂を下る

此の峠は松樹嶺の名ある如く、松樹非常に多し。頂上に達せる頃には日全く暮れ、黒白を辨ぜざる間となれり。即ち豫て馬夫の用意せる提灯に火を點じて急坂を下り始め、夜を冒して進み行き、午後十時過漸くにして熱河の町に入れり。

旅舎の不親切

此の時熱河の町にては、既に寝たる家多く、旅舎の如きも余等を宿泊せしむるを欲せず。

巡警の好意

已なく彼家を訪ひ此家を探ねたるが、應ずるもの無し。隨行の馬勇は馬を八方に飛ばして宿舎を求めたるも是亦徒勞に歸し、如何にせんかと當惑しつゝありしが、此の地の巡警は余等の爲めに斡旋し、一の美しき旅宿の戸を敲きて之を起し、抜刀して余等の宿泊を主人に嚴命せしかば、余等は辛うじて露宿を免れたり。此の家は室美しけれども南京虫多く、夢を爲し難く一夜を明せり。

熱河滞在

八月二十七日。熱河を出發せんとせしが、馬夫は馬憊れ、身亦疲れたりとて一日の滞留を請ひて止まず、余等亦疲れざるに非ざれば、即ち共に疲勞を感せんとて、一日此地に滞在し、種々の取調を爲す事とせり。

熱河

熱河は遼河河畔に位す。遼河はドロンノール附近に源を發し、幾多の河流を合せて熱河の前に來り、更に南東に流れて又た幾多の河流を合せ、漸く大河となりて海に注ぐ。此の河は昔より最も著名なるものなるが、常に歴史上のみならず、商業上に於ても緊要なるものなり。熱河の此處に存在するも、之あるが爲めならん。

熱河の地勢

熱河の避暑行宮

熱河の避暑と其の所屬

熱河の四面は悉く山を以て圍まれ、即ち此の盆地の中に位置するなり。熱河は行宮あるを以て著名なるが、此の地の開かれたるは、今の清朝に入てよりの事にして、康熙四十二年、行宮を設け避暑行宮と稱せられたるに始まる、以後毎年、天子此處に行幸駐蹕せらる。雍正元年熱河廳を設け、同十一年更めて承德州となし、乾隆七年更に州を廢して熱河廳を置き、同四十三年再び承德府となし以て今日に及び。承德府は都統の管轄する處にして、之に屬するは四縣一州なり。即ち灤平、豐寧、赤峯、建昌の四縣及び平泉州是なり。而も赤峯は一昨々年、縣を改めて州となりしかば今は二州三縣となりしなり。

熱河の産物

承德府は行宮其他の建築物存在し居る爲め、清朝との關係最も深きを以て、此の附近には滿洲旗人の居住するもの多し。而して其の市街は、行宮其他によりて存在し居るものなるが、商賣盛なり。然れども大規模の取引をなす商人無く、何れも附近の蒙古地方若しくは熱河市中

行宮の建築

の需要を充すに過ぎず。又た此の地の産物として著名なるは、寄木細工にして、机、盆其他のものを製作す。

天子の狩獵

熱河の行宮は山によりて設けられ、周圍十六清里餘、其中に宏壯なる皇室の建築物多く又た塔あり。此の行宮内には有名なる四庫全書を藏する所あり。今日清國に於て、北京の宮殿以外にて見るべきものは、此の熱河及び奉天、興京等の行宮なり。行宮は寫真に示す如くなるが、此の行宮は前にも述べたる如く、康熙帝以來天子毎年行幸せられしが、天子行幸せらるゝや、山莊後方の廣き圍場に於て、狩獵を試みらるゝを例とし、其の際は此の地附近の蒙古の諸王を召集せらる。諸王は天子の御機嫌伺を濟したる後、馬上其の部下を率ゐて狩をなせり。康熙、乾隆二帝の如きは、自ら其の列に加はり、猪、鹿等を狩られたるが、殊に乾隆帝の如きは、皇后其他の女性を伴ひ給へり。之等を書ける當時のスケッチは今尙滿洲奉天の宮殿中に藏せらる。

熱河の二大喇嘛廟

行宮の東西に二大喇嘛廟あり。東なるを札什倫布廟と稱し、西なるを布達拉廟と呼び、共に山によりて建られ、其の建築は西藏式なり。傳へ云ふ、西藏拉薩の喇嘛を模して作れるなりと。即ち寫真に示す如く、豆腐を切りたる如き形を呈し、實に壯麗を極む。現今の支那に於て、

西藏風の火
建築

乾隆帝の建
立

避暑避暑の
好適地

西藏風の火建築を見んと欲せば、此の喇嘛廟又参考とするに足る。此の二廟其の内部に小きき建物多く、其の入口には西藏文、漢文、蒙古文の碑を建てあり。此處に居る僧は總て蒙古人なるが、蒙古の諸王は、此の喇嘛廟を信仰する事最も厚く、其の參勤交代の爲め北京に出る此方面の蒙古諸王は、途次必ず此廟に立寄り、河漢かの銀を納むるを例とす。而して札什倫布廟は乾隆四十五年、帝が七十歳の祝の爲めに建てられたるものにして、其際に西藏より班禪喇嘛を召されたりと、又た一方の布達拉廟は乾隆三十六年、皇太后八十歳祝福の爲めに建立せるものなり。今日熱河にて見るべきものは行宮と此等二大喇嘛廟ならんと思はる。

此地附近は總て樹木を以て滿され、殊に松樹多く、冬は暖く夏は涼しければ、避暑地として最適當せる處なり。就中行宮後方の山即ち獵場となり居るは、興安嶺と陰山脈と合する處なれば、無数の動物棲息す。されば康熙帝の此地に避暑山莊を設けられたるも、其の當を得たるものと言ふべし。蒙古人は此地をハロンコロと稱す。冬期に於ても此地は溫暖なるが爲めなるが、漢人は是を直譯して熱河と呼ぶに到れるなり。

熱河の位置上述の如く、全く山中の盆地にあれども、灤河の流を前に控へ居るを以て、其

の河水多き時は、此地より舟を泛べ其の下流に達するを得べし。

廣仁嶺を越

八月二十八日。朝早く熱河を出發し、直ちに峠路に差し掛れり。熱河は四面山を以て圍まると爲め、何處へ行くにも必ず峠を越えざるべからず。余等の之より越えんとするは、廣仁嶺と稱するものなり。

余等は車に乗り南方に向ひて進みしが、朝まだきの事なれば、町の商舖等未だ起き出ぬも多かりしが、此の附近の百姓等の、其の燒ける炭或は伐採せる薪等を荷造して棒にて擔ひ、熱河の町に賣に来れる者と多く會へり。此の附近には樹水多きを以て、薪炭は最も豊富なり。余等て、遼時代に此地を旅行せる、宋の使者の書きしと云ふ記行を讀みたるに、此地に樹水多きを記しあるを思ひ合はされ、當時の事實正に然りしならんと思はれたり。

熱河を出てより五清里計りにして山麓に達し、愈々廣仁嶺を上り始む。此の嶺は以前は峻しき岩山なりしを、康熙帝の熱河行宮を造營し、行幸の際此處を往來せられて其の不便なるに困しみ、康熙五十七年遂に開鑿して通路を作り、帝特に廣仁嶺の名を賜はれるなり。又た山上の東部に萬壽亭を設け、乾隆二十八年に到りて碑亭を建て、其中に乾隆帝御製に係る、雨中乘輿過廣仁嶺之詩を書し、今や北京熱河間の一名所となれり。而して此の廣仁嶺は、古く

萬壽亭

乾隆帝の詩

は墨斗嶺と稱せらるものなり。

山は總て岩骨露出せる岩山にして、加ふるに道急なれば車を上らするに頗る困難せり。余等は皆車より下り、徒歩にて進みしが、車の後部の輪の處に棒を入れ、轆を働まして馬を驅り、僅かに上るを得たり。上りくつて碑の處迄到りしが。今は又た其處に關帝廟あり。余等は茶を請ひ、又た廟を守る僧等と談話を交へ、其の碑文を讀み等しく此處を出發し、更に上りて頂上に達せり。麓よりは五清里計もあるべし。山頂に立ちて四方を展望するに、此の邊の風物一眸の中に集まり、陰山脈の山形等明かに認めらる。余等は前日迄は廣漠際涯無き平野を歩み居りしに、今日は全く山中の人となりしなり。此峠より以南北京の方に進む前程には、尙ほ幾多の岩山横はるを知り、一層感を深くせり。山嶺の岩石に西藏文字を以て經文を彫り附けたるあり。

余等は山頂に於て小憩せる後、南方に向ひて岩石の道を下り、山麓に達してよりは、又山と山との間なる平地を、西方に向ひて進み行き、暫くして灤河の北岸に出づ。北の附近は風景最も佳にして、山と山との距離は漸く遠く、其の間を灤河の水流れ、河の兩岸には處々村落の點在するあり。而して河の兩岸に、渡船を用ひて交通に便し居れるが、渡船のある場所には。

山上の眺景

渡船場と龍王廟

必ず龍王廟の祠ありて、其の下より舟を出し居れり。

余等の今達せる北岸は崖石最も現はれ、水流岩石の直下に達し、岩の上には龍王廟あり。而して此間を往來する船中の乗客、傘を翳せる等、此の廣き好風景と調和して、恰かも支那の山水畫を見るの感ありき。余等は車上此の景色を稱觀しつつ進みしが、熱河より三十清里計り、午後一時頃始めて灤平縣に到着せり。

灤平縣は灤河の北岸に位し、戸數五六百計りあり。町には城壁等の築かるゝ無く、此の地方に於ける物貨の集散地にして、往時より著名なる處なり。此處に憩ひて中食をとり、更に行を續け灤河に沿ひて進む事三十五清里許り、山間の道を傳ひ行き三道梁に達し、此處に一泊する事となれり。

灤平縣を出發して三道梁に到る途中、熱河行幸の際に當てられたる行在所を見たり。今は絶えて天子の御幸なければ、之等行在所も軒傾き瓦破れ、蜘蛛の巢縦横に張りて、日も當てられぬ計りに廢頽し、前庭に植えられたる松のみ、獨り昔の色を變へぬなど殊に哀れ深し。又た行在所の附近には、立派なる芝居飲食店等もあれど、今は住む者も無きが如し。往時例年皇帝の御幸せられし頃は、必ず此處に輦を駐め、隨行の臣下等は此の旅舎に入りしかば、般

荒れ果てたる行在所

三道梁

灤平縣

畫の如き好風景

賑を極めたるものなるが、今や天子御幸の事なければ、自然の斯くも荒れ果て、僅かにありし世の俦を留むるのみ。余等此處に立ちて、支那の詩人等が、天子の大幸を待つるの情を歌へる詩を、斯る處に題するの心情を察し、いと哀を添へたり。

余等の宿泊する事となれる三道梁と云ふは、山間の一驛站にして旅舎一二軒あるのみ。余等は其の善き家に車を停めたるが、旅客家に満ちて余等の入るべき室なきと、又た前數日間南京虫に襲はれたる苦しみとを思ひ出たれば、其の家の庭に車を牽き入れ、急に車上に屋根を作りて雨を防ぐの用意を整へ、一夜を車中に明す事とせり。此の時雨愈々降り出せしが、余等は車中とは言へ南京虫に責らるゝ事なければ、心地よく夢を給べり。

此の旅舎の隣は小学校にして、生徒も相當に多きが如し、其の教師も生徒も余等外國人の珍らしければ、余等を見んと集まり来るもの多かりき。

三道梁は山間の一宿驛に過ぎざれども、其の位置岩山の上に位するを以て、好く周圍の景色と調和し、遠く之を望めば頗る景色宜し。

八月二十九日。早朝三道梁を出發せんとせしが、夜來の雨尚歇まず馬夫は頻りに滯留を請ひしも、余等は斯る處に無益に滯在するを得ずとて、其の請を容れざりしが、午前十一時頃に

車上一夜を明す

支那の小学校

泥濘脈を没す
止むを得ず
道を變ず

危巖の上に
觀音廟

鞍匠屯

到り、雨漸く小止みとなりしかば、即ち準備を整へ午後一時頃出發せり。

余等の豫定は此處より本道を進みて、萬里之長城の古北口に出づるにあり。即ち先づ鞍子嶺を越えて青山嶺に到らんとし、暫らく進み行きしが、道路は夜來の雨にて泥濘脈を没する有様にして、本道を進む能はず、止むを得ず道を變じ、ドロンノール街道の鞍匠屯に向つて進む事となれり。此の間に溧河の支流に會し、余等は或は之を渡り、或は之に沿ひて進めり。而して此邊は總て兀立せる岩石の山にして、或る處にては見上る計りの大巖石の時てるもあり。又た其の巖の上危うげなる處に、觀音廟の建てらるゝを見たり。風俗の如きも家屋、婦女の頭髮等に聊か變化する所あり。

余等は暫らく斯かる岩石多き山間の道を通りしが、道次第に廣くなれる頃鞍匠屯に達せり。此の地はドロンノール街道に位し、自河上流の沿岸にあり。戸數三百計り、立派なる旅舎もあり。此の旅舎の如きは、之迄熱河街道に於ては見られざりし程大なるものなりき。

此の日の行程僅かに三十浬に過ぎざりしが、之れ道路の悪しきこと、河を渡り及び道の屈折甚しきが爲めなり。

四、萬里之長城を見る

八月三十日。鞍匠屯を出發す。朝早かりしかば、附近一帶に朝霧立置め遠くは見えぬ位なり。余等は其中を進みしが、進むに隨ひて霧散せり。道を南方に取り漸く山路に差し掛る、道は此の岩山を切開けるものなるが、頗る不完全にして、車輪其の凹める處に食ひ入り非常に困めり。又た或處にては岩石扁平にして、滑り落ちんかとも思はるゝあり。山に名を十八盤嶺と稱するに見るも、其の形狀察するに餘りあり。余等は辛じて山嶺に達し、暫く四顧の眺望を恣にしたる後ち、之を下りて平地に出づ。平地とは雖、山と山との間に小流のある道にして、之より主として白河の流に沿ひ、東南方に向ひて進む。河の兩岸は相對せる山にして、河岸處々に村落を見る。暫くにして廣き白河の流に達せしが、之れ即ち古北口の入口なり。河流に沿ひて南方に下れば、前方に當り始めて萬里之長城の起伏蜿蜒せるを見る。斯して漸く古北口の中に入り、此處に車を降りて晝飯をとれり。

古北口は熱河街道に通ずる萬里之長城の一の入口なり。其の名は昔よりありしものにして防備上大切の處なり。市街は戸數四百商賣盛なり。此處には又た守備兵の駐屯するあり。

山中の惡路

十八盤嶺

白河

萬里長城古北口

長城の研究

其他税關の設もありて、往來の貨物より税金を徴收す。晝餐後出發するに先だち、長城の研究を爲さんと、余は單身車を捨て、長城に上れり。

萬里之長城は自然の山形を利用し、山に據りて煉瓦を築けるものなり。されば自然の岩石を直ちに利用して、煉瓦を用ひざる處もあり。或は數里に亘りて連なれる處もあり。其の態一ならず。この附近の長城には大なる煉瓦を用ひ、而して其の上は馬を驅るに足るの幅員あり。又た處々に別に高く煉瓦を築ける處あるが、此は物見臺なるべし。恰も長蛇の如く延長し、東西に連亘せる様實に壯觀なり。之あるが爲めに、古來朔北民族の侵入を防ぎ得たるものにして、余等は言ふべからざるの感に打たれたり。

余は長城の調査を了へたれば、車に乗りて門を出てたるに其處に關帝廟あり。此の日は其祭日なるが俗人等の笙、箏、樂を奏するを聞けり。余等今長城々頭に來り、偶々古代の音樂に接す。一種の感に打たるゝを禁ぜざりき。之れ亦好箇の書題なるならん。

此の附近にては長城に岩石を利用せる處多く、此の關帝廟の處にては、大岸石の上に築けり。而して現今存する長城の之等の部分は、其の築造の年代明かならざれど、其の屢々修復せられたるは事實なり。殊に此の古北口は、古來朔北民族及び漢民族の出入往來劇しかりしかば、

長城の大觀

長城々頭古代音樂を聞く

一層堅固に築けるものに非ざるか。

南天門

余等は種々の感想に打たれつゝ門を出て、初めて平地に出れば、水のチヨロ／＼流れ居るを見る。暫時にして白河を渡りしが、此の河は幅廣く水又多し。河を渡り河岸に立ちて古北口の長城を眺むれば、實に雄大なる風景なり。暫く進みて南天門に到着す。

南天門は又た、萬里之長城以南に於ける、要害の地にして岩石の山なり。南方より古北口の方に進まんと欲するものは、必ず此の地を過ぎざるべからず。されば此處には要害堅固なる門を設け、又た守備兵を置く。而して此の門には、南天門の匾額を懸け居れり。

余等は此の南天門の前にて、一泊する事となれり。普通の順序より言へば、古北口に一泊すべきなれど、只管前程を急ぎ、寸時も早く北京に達せんと希望より、遂に斯る地の一小旅舎に投ずるに到りしなり。

熱河より長城に連なれる岩石の山脈

八月三十一日。宿舎を出發し、困難を犯して、岩を切開ける南天門の上に入り、更に亦た同じく岩を切開ける坂を下り、之よりは主として丘陵の上を歩む事となりしが、岩石は次第に遠かり來れり。之を以て見れば、熱河の北より古北口の南迄は、西より東に亘りて岩石の山の走り居るを知るべし。之れ陰山々脈の支脈にして、北京と北方との連絡に於て、最も大切な

漢民族の防禦線

石匣

り。一旦此の山脈にして、漢民族によりて守られんか、朔北民族は其の以南に入る能はざるなり。萬里之長城も、此の山脈の頂上を傳ひて築かれ居るなり。此の地にても尙ほ、長城の見え隠れに走り居るを見るべし。余等は丘陵の上を、幾多の村落を経て進む事二十五清里にして、石匣に出て此處にて晝食す。

明時代の城

密雲縣

石匣には明時代に築かれたる城あり。現今城内には住むものなく、住民は盡く城外に家し、一小市街を爲せり。余等は石匣を出て、更に南方に向ひて進み、石匣より五十七清里にして、密雲縣に達せり。此處も古より著名なる地にして、戸數中々多く、亦明時代の城壁を存し、市街は悉く城外にあり、位置は白河の上流に位す。此の附近に於ては、山全く遠かりて丘陵となり來りしが、此の密雲縣附近よりは、白河々床の沖積層の地を歩む事となり、白河の流は南の方、際涯なき廣野の中を流れ行くなり。

辛うじて白河を渡る

此の時隨行の馬夫馬隊等は、頻に此地に一泊せん事を請ひしも、余等は之を却けて、尙ほも進む事とせり。然るに之より進むには、是非其白河を渡らざるべからざるに、此の日は水量多ければ、渡渉困難ならんと注意せられしが、兎に角渡り得らるゝ丈は渡らんと、車は馬に牽かせ、馬隊は水中を彼方此方淺瀬を探りつゝ、先導し、水は車臺に達する位なりしが、辛じ

白河を渡る
道に行き難

て對岸に達するを得たり。白河の河床の平地は漸次廣くなり來りしが、余等は其の右岸を進み行けり。時に日は暮れかゝり、廣漠たる河床の平地を進む事なれば、物寂しき事限りなし。此の邊には盜賊出没して、旅人を劫すとの事を豫て耳にし居りしかば、余等も警戒しつゝ、行を続けしが、既にして日没して全くの闇夜となれり。而も馬夫も兵士も此の道を知らず、行けども〳〵河底の砂利道にして村に達せず。夜は闇し、實に凄慘の氣に襲はるゝを禁せざりき。

夜十一時大
洛山庄に達す

余等は河に沿ひて尙も南の方に進み、密雲より三十餘清里にして、漸く一村落到達せり。此の河は河岸の丘陵上に存在する小村落にして、旅舎一軒ありしかば、之を起して一泊する事とせり。時に午後十一時頃なりき。此の家の主人は、流石北京近くに住む男とて、多少事理を解し、非常に親切に余等を待遇せり。此の日の旅程は、南天門を出て、より丘陵を傳ひ、白河に沿ひて此村に達せるものにして、此の村名を大洛山庄と稱す。

雨を引して
出發す

九月一日。前夜より雨降り出し、朝になるも止まざれど、前途を急ぐ事なれば、雨を冒して出發し、白河の沿岸を傳ひて進む。然るに夜來の雨の爲め道非常に悪く、泥濘車轍を没し進行頗

白河を渡る
牛蘭山

馬夫道を渡る

渡船物と旅
舎の食飲
孫河

る困難を極む。途中又た河を渡りしが、此の日は水量非常に多かりしかば、殆ど荷物を濡せり。正午十二時頃、二十清里にして牛梁山に達せり。北の地は北京街道に於ける一大宿場にして、平地に突起せる山の麓に位す。余等は此處にて晝餐をとりて旅行を繼けたるが、雨益々甚しく道は泥水の海を現じぬ。滋く高粱の生えるたる、廣漠始んど地平線の何處に終るかを知らざる平野に出づ。馬夫は常に慣れたる道を誤り、西方に向ひて進みしかば、行けども〳〵北京路に出でず。途中村人に就て尋ねたるに、是れ山西省道なりと。而も時は既に數里を進みし後なれど、止むを得ざれば再び元の道を歸り、泥濘の中を進む中に少しくよき道路に出で、再び白河を渡りしが此處には渡船あり。余等一行は車荷物と共に對岸に渡るを得たり。而も彼等は今日は水勢急にして、渡船困難なりしとて貨錢を多く貪れり。余等は河岸に上り暫らく進み、牛蘭山より五十清里にして、夕暮頃孫河に達し一泊する事となれり。此の地は既に北京街道にして、旅舎等も立派なれども、旅宿の主人等は頻りに貪り、人情之迄の地方と異なるが如し。余等は殆んど旅費を遣ひ果し、此の時には少額より剩さゞりしかば、此の家の支拂にも殆んど困難し、夕食を省きし位なりき。

五、北京に入る

既の如き大
道を北京に
向ふ

田舎者の都
見物

服部博士耶
に入る

北京滞在
調査物の整
理

九月二日、孫河を出發し、北京路に向つて進む。土地次第に廣く、道は凸凹無く坦々砥の如し。幾多の村落及び一小市街を經過して、専ら南方に向ひしが、暫くにして前方幽かに北京城を認めしより、一行大に歡喜し、勇を鼓し車を早めて進み行き、正午十二時頃、出發以來三十三清里にして、北京城の東南門に達せり。久振にて歸り來れる事なれば、田舎者の東京に出でたる如く、見る物として珍らしからぬは無く、車馬の絡繹たる、滿洲旗人の颯爽たる風姿等、一々目を驚かし、市街の殷盛なるを見ては、殆んど夢見る如き心地せり。

即ち豫てより北京に出る毎に世話になれる、服部博士の邸に車を入れたるに、博士及び博士夫人は、余等を迎へて非常に喜ばれたり。余等は暫らく其の邸に留まり、荷物の整理、調査及び日記の修正等をなし。之より再び旅行を始め、張家口を經過して潢河の上源地に向はんとて、馬夫及び兵士は此の附近に宿泊せしめたり。

第十五 北京より張家口

一、北京より長城南口

北京出發
潢河上源地
に向ふ

旅行準備

服部博士の
好意

京張鐵道

不便なる舊
道を辿る

九月五日。余等は是より北京を出發し、張家口を通過し、更に潢河の上源地に向はんとするなり。即ち午前十時、余等夫婦及び娘幸子の三人に赤峰より隨ひ來れる馬勇一人、馬夫二人の一行車二臺にて出發す。一臺の車には荷物を積み、一臺には余等三人便乗せり。又た今回の旅行には、以前の經驗により、パロメートル、寒暖計其他旅行に必要な物品を整へぬ。出發に臨み服部博士及同令夫人は懇切に種々の助力を與へられ、且つ特に余等のみを見送られたり。

北京の町を西門より出て主として西方に向つて進む。

爰に一言を要するは、此の時京張鐵道は未だ張家口迄は開通せざるも、既に南口迄は運轉し居りしかば、之に據れば數時間にして南口に達し得べく、即ち時間の經濟上に於て頗る利便なるは明かなりしも、余等今次旅行の目的は各地の状態を視察研究するを主とする事なれば、敢て不便なる舊道を辿る事とせり。

元時代の城

余等は北京西門を出て、進みしが、當時は雨期にして、殊に數日來の降雨の爲め道非常に悪く、車の運び最も困難なり。馬を勵まして三清里計り進みし處に、大なる土壁の横はるあり。こは元時代の城壁にして、今は僅に其跡を存するのみなれども、昔時此の附近に城を築き居りしもの、趾にして、今此の城壁の有様に見るも、其廣大なりし事想像せらる。尙其の上には磚塔の頽れたる臺趾等も残り居れり。

清河

此處を出て、よりは、或は村落となり、或は足溜の如き小市街に出て、泥濘の道を進みて午後四時頃、清河に到着せり。

美なる石橋

北京より清河迄は、僅かに三十清里許りに過ぎざれども、此日道非常に悪く、且つは日も漸く暮れんとせしかば、茲に一泊する事とせり。而して余等の宿泊せるは飲食店なるが食物等も比較的自由に於て、北京附近の事なれば旅舎の設備も便なり。

明の十三陵

清河は一小市街地にして、町の入口に花園石の大なる石橋を架せり。而も此の石橋は町に似合はぬ程美しきものなるが、此は明の永樂年間に架せられたるものにして、此の道は即ち明の十三陵に至る可き驛路に當り、明の天子屢々此の地を行幸せられたる爲め、斯く立派なる石橋を造れるなり。

果物の産地

此の附近には果物非常に多く、殊に余の之より行かんとする宣化府の如きは、葡萄の名産地なれば、此の附近には葡萄、林檎等を賣り居るもの多く、殊に葡萄は頗る美事なるものあり。

九月六日。前日の疲勞の爲めか朝早く寝入り、起き出れば旅宿の主人既に朝食の準備を整へ居れり、即ち朝食を喫し了りて直ちに出發す。

道路には雨水川の如く、且つ處々に水溜を生じ居れども、前日よりは大に宜し。然れども車を進むるに尙困難なれば、止む無く本道を避け小路に入りて歩む事とせり、道は進むに隨ひて次第に高まり來れるもの、如く、水溜等も漸次少くなりしが、暫くして復泥濘の道となり、馬の進み最も遅く、車輪泥中に没し、如何に馬を叱咤するも少しも進まず。往來の旅人等の手傳を受けて漸く車を進む。斯る畑中の道を進み小村落等を経過し、二十清里計りにして沙河鎮に到着す。

沙河鎮

沙河の朝崇橋

沙河は白河に注ぐ流にして、沙河鎮は其の沿岸に存在する市街なり。此町の入口にも花園石の大なる石橋を架し朝崇橋と稱す。此も亦清河に於けるものと同じく、欄干を附し實に美事なるものにして、其の明時代のものたるも同じ。幅二十間、長さ二三町もあるべく厚さ二尺

計にして橋上には悉く花崗石を敷詰め居れども、永き歲月を経て其の中央部凸凹甚しく、車
を走るに困難なり。又橋には鐵製の大なる錠を打ちつけて、狂はぬ用意をなせり。此町も亦
十三陵に到る道に當る。

回教信者多し
余の晝餐をなせる家は、回々教の信者にして、豚は一切用ふるを禁じ、羊を以て之に代ふ。
余等昨日より今日にかけて、經過し來れる地方には回教信者非常に多く、宣化府等は其の中心
なり。彼等は飲食其他の習慣に於て、他の支那人と異なる點多く、又た其信仰上より、他の
支那人に比して清潔なるが如し。

晝飯後更に旅行を繼げ、河岸を廻りしに、道は漸次良くなれり。進む事二十清里計りにし
て、昌平州に達す。

昌平州
昌平州は城壁の中にある。亦回教徒多く、余等の入れる宿屋も其信者なり。此地は附近に
於ける市街にして彼の密雲縣、其地二縣を管轄し、明の時には行在所のありし處なり。斯る
地に行在所を設けたるは、全く彼の十三陵に到る道なりしが爲めにして、當時は股販なりし
も、今や昔に比すべくもあらず。城中の處々に残れる石の柱、石獅子等の建築物に當時の偉
を偲ばしむるあるのみ、此處にも亦二個處に大石橋を架せり。之亦明朝の遺物にして、永安橋

永安橋

と稱す。

余等は此處に一泊する事となれるが、暮近き頃より雨降り出て、殆んど終夜歇まざりき。

降雨の爲め一日滞在
九月七日。降雨の爲め一日滞する事となり、種々の調査に従事す。然に一言すべきは、余
等は迄の旅行中、荷物は一品だも失ふ事あらざりしが、此の日珍らしく、而も此の北京近く
に於て紛失物を出せり。其も亦金子衣服等なれば敢て不思議もなけれど、蒙古の地圖を紛失
せるなり。此の地圖は露西亞文なるが、其の大き携帯に最も都合よきものなりき。此の日余
は一度此の地圖を見、其の後外出せし間に紛失せるなり。余の外出する時には、常に余の妻
留守居し居れば、其間少しの暇も無きに、紛失せるは實に不思議なり。或は余に隨行し來れ
る赤峰の馬勇取れるに非ずやとも思はるれど、彼は之迄少しの物にても盜める事無ければ、
思ふに清國官憲彼に嚴命し、余の地圖類ノート類に注意し、暇あらば奪はしめんとせるに非
ざるか。余嘗て南清を九ヶ月計り旅行したるも、絶えて斯る事無かりしに、今回北清に於て
此事ありしは、旅行者の注意すべき事なるべく、余は之に就て語るべき事多けれども、今は
たゞ事實のみを述べて、後の旅行者の注意を促し置くに止めん。

地圖の紛失

奇怪なる盜

旅行者の注

二、南口より懷來河

十三陵見物
は後日を期す

九月八日。朝來天晴る。一日の滞在は退屈し居りしかば、今日は朝早く出發せんと、早朝其の準備を爲しつゝありしに、旅宿の主人余等の前に來り、此處より十三陵迄は道も遠からず、且つ馬の便もあれば、見物しては如何と勧めしも、蒙古の方の旅行を急ぎ、十三陵は北京に歸りてよりするも、遅からずと思ひしかば、主人の言葉を拒絶せり。

余等は之より南口、居庸關、八達嶺方面に向つて進む事となれり。而して此地方の旅行には、馬或は輿を用ふるを例とするを以て、余等は馬に騎る事とせり。即ち驢馬二頭を雇ひ、車には荷物のみを載せて出發せしが、幸子は久振りにて、馬に乗れる事とて非常に喜べり。門を出て、暫くの間は道非常によりしが、次いで砂利道となり、十數里計にして河流に達す。此の河には水多かりしが辛じて之を渡り、出發以來二十清里にして南口に到着す。

南口は北京張家口街道の宿驛にして、此處より道漸く山に入り、萬里之長城も此地より始まる。南口の名あるも、萬里之長城の南の口なればなり。余の携へ來れるパロメートルにて驗するに、此地の高さは六十米突なり。日々往來する旅客も多ければ、旅舎、飲食店多く、殊に

南口

南口のホテ
ル

近來外國人の長城見物に來るもの多ければ、ホテルの名を附せるさへ一二軒あり、然れどもホテルとは名のみにて、通常の支那旅舎に異なるなく、只其内部に椅子テーブルを備へ付け、ブランドー、ウキスキー等を賣り居るのみ。而も一軒のホテルにては、裏の古壁に不完全なる佛蘭西文字にて、ホテルと書し居れり。余は以前に此處に來れる時には、此のホテルに宿泊せしが、今回は旅行の途中なれば、普通の支那旅舎に入りしに、此の家も亦回教信者にして、御馳走には羊を用ひたり。

此地よりの旅行も馬或は輿を用ひ、輿の客待するものも多かりしが、余等は再び馬によりて旅行を繼續する事とし、飲食を了りて後南口を出發す。北京より此處に至る迄は平原にして、遠く山を望みつゝ進み來りしが、之よりは愈々山路に差ししかれり。此の山は自然に朔北民族の防禦になり居るものにして、萬里の長城も之を利用して築かれ居るなり。

南口を出て、よりは、少しく北によれる西方に向つて山を登る。此道は全く岩山にして、右方に谷を見つゝ進み行く。此の時京張鐵道は既に南口迄通じ居りしが、更に張家口迄の線路も工事を急ぎ、右方の谷に道を造り、鐵路を敷設しつゝありき。而も此道は最も危険なる處なり。此時未だ旅客は運ばざるも、荷物等は輸送し得る位になり居れり。我等は驢馬の上にて

漸く山路に
入る

京張鐵道の
工事

四邊の景色を眺めつゝ、十五清里計り進みて居庸關に到着す。

此の地は元の時に設けられたる關門にして、最も要害堅固なる處なり。山の間に位し一方は谷にして、此の山を踰えんとするものは、必ず此地を過ぎざる可からざる要衝に當る。關門は大理石にて築かれ、昔時は門の上に塔の如きものありしが今は無し。而して其の天井、壁等には佛菩薩の像を彫刻し、悉く大理石を用ふ。門の入口も亦然り。之等は元朝の遺物を研究する上に於て、最も興味ある材料なり。又此の門に左右相對せる佛像の下の處にサンスクリット(古きデバンガリー)漢文、西藏、蒙古、ウイグル等の書體にて經文を記せるあり。斯く各書體にて記せるに見るも、當時元朝の盛なりしを想像するに足らん。此の居庸關に就ては寫眞繪畫等多く世上に流布し、殊に佛蘭西のプリンス、ローラント、ボナバルト家にては、大部なる本に印刷して、出版せるは有名なる事なり。余の此地を訪へるは、今回を以て二回なるが、尙此の門に就て少しく調査し、終て此地にて中食する事とせり。時に午後三時半なりき。居庸關は小市街を成し居り、旅舎も二三軒あり。此地を經過する商品に、税を課する税關警察の如きもあり。大なる町ならねど、必ず通らざるべからざる處なれば、諸種の事に就て大切なる地なり。

中食後出發し、暫くして谷に出づ。之を渡らざるべからざるに、前日來の降雨にて水量増し、且つ谷の底は大岩石にして凸凹あり。水は車臺の上に達する程なれば危険甚しく、余等の到れる際には、其の兩岸に數十臺の車、水流を見詰めて待ち居りしが、何時迄待つも水勢衰へねば、彼岸にありしもの先づ渡り始めしかば、爾餘の者亦之に勢を得て皆渡れり。而も危険甚しく、大勢の馬夫等相共力し、辛うじて彼岸に達せり。中に果物を載せ來れる車の如きは、谷の中央にて車輪岩石の間に挟まりて動く事を得ず、爲に谷水は之に堰かれて、果物を流すに至れり。余等は再び驢馬に乗りて、岩山の道を入達嶺に向ふ。此の時長城附近の景色、手に取る如くに明かに望み得たり。此附近に於る長城は、煉瓦にて築かれたるものなるが、之等の煉瓦は左のみ古きものに非ず。明の萬曆頃に重修したるものならん。其峰を傳ひ谷を亘りて、延長し居る様は實に奇觀なるが、地理書等に引用しある長城の寫眞は、多く此附近のものなり。余等は途中二三人外國婦人の、輿にて歸り來るに會ひしが、又た張家口方面より來れる馬上の日本人とも會せり。此の附近は京張線の軌道に當り、今や盛に工事中なりしが、之等の工夫等を相手に飲食店、古着屋等大に繁昌す。鐵道は旅客は運ばぬも、鐵道の要材等は既に運び居りしが、俄かに汽笛鳴り響き、列車の動き出すを見ては、赤峰の馬勇馬夫、余の娘等始め

八達嶺

て瀛車を見たる事とて、何れも非常に驚けり。

余等の進み行く道は全く山の中にして、途中高き岩石に、佛像を彫り付けたるを見しが、之れ元朝のものなり。余等は斯く岩を攀ぢ山を登りて進み行き、遂に入達嶺に到達す。此處は此附近にて最も高き處にして、バロメートルは五百二十米突を示せり。南口は六十米突なれば、余等の漸次上り來れるを知るに足らん。此附近は又た、長城の最も完全に築かれ居る處にして、長城を見るには最便利なり。又た過ぎ來し方を顧みるに、北京附近一體は、遠く平野を踰えて霞の中に朧げに見ゆ。以て平原の如何に廣きかを知るべし。更に余等の之より進まんとする方向を見るに、連山重疊、峰傳ひ山傳ひ、長城の延長し居るを見る。此の地は昔時の漢朔北兩民族が屢々衝突し、嘗ては矢叫びの音、木魂に響きて物凄かりし處にして、最も記憶すべき地なり。

古戰場

岔道

八達嶺を出發して、尙も西方に向つて進みしが、何れを見るも悉く山にして、地形の漸次變化し來れるを知る。此地方にも鐵道工夫多く入込み、只管工事を急ぎ居れり。八達嶺より五清里計りにして岔道に達す。此處は山間の驛次にして、一小市街を成し、飲食店等もあり。鐵道工夫多く入込み居り、警察の設もあり。余等は今夜此地に一泊する事となれり。此地の高

さ四百七十米突、八達嶺よりは五十米突下れども、未だ山中たるを知るべし。

三、懷來河より宣化府

懷來河を渡る

九月九日。朝早く岔道を出發す。谷間を進み行きしが、道漸く下りとなり、暫くして懷來河に達す。此の河は懷來縣の前を流れて、白河の上流たる渾江に入るものなり。即ち河を渡らんとせしが、先日雨にて橋悉く落ち、渡り得ざるのみならず、河の兩岸は濕地にして、車を進むるに頗る困難なり。而も兩岸の連絡は、僅かに一隻の舟彼方此方に通ひ居りしも、兩岸には既に數百臺の車待ち居りしかば、舟の順番は容易に來らず。余より二三日先に北京を出發せられし、塚本博士の一行は、昨夜渡りしとの事を聞けり。漸くにして余等の順番となりしが、水邊迄達するには、暫く泥の中を歩いて車を舟に積まざるべからず。されば余等のみ先づ前岸に渡り、其處に休憩して茶を喫み居る中、二三時間を過ぎて漸く車を運び來れり。舟の運搬斯の如く遅ければ、今夜は渡れずと焦るもあり、中々の混雜なりき。河岸の高さは三百六十米突にして、一帯に沖積層を成し、年代最も新しき處なり。思ふに此邊一帯は沼地或は池なりしならんか。河より更に五六清里進みて、初めて懷來縣に達す。

一隻の汽船にて數百臺の車を運ぶ

懷來縣

塚本博士と
會ふ

馬夫の病氣
一泊す

懷來縣は城の中にあり。城は周圍七清里計り門三個あり。門の永樂二十年に築けるものにして、又た清朝に入りて後、乾隆五年に之を修築せり。塚本博士の一行は昨夜此地に着し、知縣衙門に一泊せられしが、余等の到着を知りて、博士は通辯の日本人某氏と共に、態々余の寓所を訪問せられ、暫く談話を交へぬ。此地の知縣亦衙門に宿されたしとの事なりしも、余等は普通の旅宿の方却て氣苦勞も無く、心地よければとて好意を謝絶せり。博士は之より尙三寸清里も進まざれば晴はれしが、此の時余の馬夫腹痛に苦しみ居りしを以て、余等は此處に一泊する事とせし。彼は前夜宿道の旅舎に於ても、腹痛を起せしが今日も亦然り。止むなく余等は一泊するに至れるなり。此の懷來縣は宿場にして、且つ古き縣なれば、北京張家口間に於ては相當に殷盛なる處なり。

名物の餅屋

九月初十日。陰曆八月十五日、早朝懷來縣を出發す。朝の溫度七十一度なりき。河岸に沿ふて進めりしが、山は遠く距たり平地多くなり來り、殆んど平野を行くの感をなせり。途中處々に村落ありしが、全く百姓家のみにして、田舎道を迫るが如し。之より五十清里も行かざれば、飲食店無しとの事なりしかば、朝まだき途中にて餅を食ひて進む。此餅屋は此の邊にての名物と見え、早朝にも拘らず客店頭に満ち居れり。余等又其の店に入り、茶を呑みて餅を食ふ。

土城及び烽
火臺

沙城

此店を出發してよりは、途に遇へるは、夥多しき羊毛を積める駱駝の隊商等にして、次第に土地の狀勢も變化し來れるが如し。又た途上土城處々に散在し、烽火臺の二三町毎に設けらるゝあり。中には新しきものありき。五十清里計り進みて始めて沙城に入る。

新保安

又も馬夫の
病氣

沙城も亦驛次にして飲食店あり。町は城壁の中に存在す。此の城壁は土城にして、其下部には堅きセメントを用ひ、上部には煉瓦を用ひ居れども、今や漸く頽れかゝれり。此地の高さは四百五十米突にして、懷來縣よりは少しく高けれども、道には餘り變化も無かりき。此の町も亦回教信者多く、余等の入れる宿舎の如きも、それなれば羊の肉のみを用ひたり。此日客多かりしが、宿舎の主人は丁重なる男にして、余等を善き部屋に導き最も優遇せり。沙城を出て二十清里計りにて新保安に到着す。此地も亦一小驛站にして警察等もあり。此時馬夫又も病氣を起し、非常に苦しげなりしかば、宿を求めんとせしに、旅舎は外國人の泊るを好まずとて拒絶す。されば余の馬夫は、巡警の處に行きて其不都合を詰らんとせしが、恰かも巡警は、其家に鍵を掛けて用ひたる留守にして、賭博を打つに行けるものゝ如し。斯く宿舎は泊むるを許せず。巡警は留守なるに、馬夫俄かに病氣を起せし事なれば、余等も非常に

泊るに宿無
く眠るに
役人不在

支那の名月

祭

中秋無月

四〇

困却し、旅宿の主人の拒むに拘らず、無理に車を牽き入れて、其家に一泊する事とせり。此の主人も亦回教徒なるが、余等其家に入りてよりは、種々の談話をなし漸次打釋くるに到れり。此の時馬夫の腹痛益々酷しく、遂に一室に打臥すに及びしかば、明日の旅行も如何ならん、前途尙遠なるに馬夫の臥れてはと大に心配せり。

今夜は八月十五夜の名月なれば、空さへ晴れたらば、名月を見んと楽しみ居れり。支那にては今夜月を祭る風習あり。即ち夕暮頃より机を庭に控え、其上に一尺計りの月餅、水瓜、桃葡萄、林檎及び柗に高粱と黑豆とを入れたるを置き、珠數形に捻りたる線香を點じ、其兩側に赤き蠟燭を燭し、其の中央の處に、月宮殿にて兎の杵にて藥を舂き居る繪を掲ぐ。此繪は南部支那にては餘り見られざるも、北方支那にては古風尙存する爲めか、十五夜の前の月の頃より盛んに此繪を賣り出し、家々にて之を購ひ十五夜に斯く机の上に掛け、蠟燭に火を點じ、香を焚きたる後、此繪に火を附けて之を焼き、以て儀式を終るなり。支那人の考にては此の燈は天に達するとの意味にてもある事ならんが、兎に角其の古き風なるは明なり。此の夜、空は宵より曇り居りしが、遂に雨さへ降り出でければ、今年の名月は見るを得ず、いと口惜し。臥戸に入り雨を聞きつゝ、眠に入る。本日の行程僅かに七十清里に過ぎず。

馬夫の快癒

蒙古人防備
の塔墩

塔墩の研究

黒風口墩

明朝の遺跡

九月十一日。昨夜の模様にては、今日馬夫は到底旅行に堪えぬならんと思ひしが、支那人の事とて金錢の惜しと見え、先づ快くなりしとの事なりしかば、早朝出發し河を左にして進む。途上塔墩等の點々存在するを見しが、此は昔蒙古人の襲來に備へたるものと思はる。此の附近は、當時防備上最も大切な處なりしならん。斯くして五六清里計り進みたる處に、完全なる墩ありしかば、余は下馬して其の側に行き仔細に觀察せしに、單に途中より望めば恰かも土にて作りしが如くなるも、實は煉瓦を積める處もありて、正四角形を成し、一邊五十歩づゝ、即ち周圍百歩位にして、其の南の方に入口あり。而して其の中に一邊二十歩周圍八十歩の高く細長き臺を造り居れり。昔時防備の用に供したるや明かなり。而して其の入口に左の如き文字を記せる石額を掲ぐ。

黒風口墩

萬曆三十六年九月吉日立

之によりて考ふるに、今日途中にて見たる建物の多くは、明の萬曆年間に建てられたるものなり。當時は蒙古の跋扈せる頃にして、明の最も苦しめられ、北京の最も危殆に瀕せる時

第十五 北京より張家口

四一

なり。

此の附近の地形は、山と山とに介在する最も廣き處にして、其高き處には萬里の長城あれども、低き平原は斯る墩等を造りて防ぎたるものならん。而も其の年代の萬曆なるに見れば、此邊の長城を重修せる時と同じ。即ち長城重修と同時に、之等堡墩を造れる事を想像せらる。

鷓鴣山
元朝の遺跡

更に五清里計り進みて鷓鴣山に達す。此邊は小山あり、又其の前には川流れ居れり。山には廟あり。又た川の前には大理石の碑を存す。此は元時代の建立に係り、蒙古文、漢文との二様に記せるものなり。廟の前を流るゝ河は渾河にして、昔石橋架しありしと見え、其跡處々に残れり。此橋は明の時に修めたるもの、如く、今は渡る能はざれども、其の橋詰の文字を見れば明朝のものなり。此處の高さ四百四十米突なり。

鷓鴣山の傳説

鷓鴣山は一の傳説的地にして、『大清一統志』によれば、『趙襄子代王を弑す、其妹笄を磨きて自殺す、因て此山を磨笄山と云ふ、毎夜野鷓鴣屋上に來り鳴く、故に又之を鷓鴣山と謂ふ』とあり。

之より更に山道を、四百六十米突計りの處迄上る。此邊石炭多ければ盛んに採掘しつゝ、あ

上華園

りき。之より益々上りとなり、遂に五百四十米突の處に達せしが、此附近にて最も高き處なり。斯くして鷓鴣山を距る三十清里計りなる、上華園と稱する地に達せり。此の地は稍々下りとなり居れども、尙四百八十米突なれば、八達嶺よりも高し。余等は此處にて中食する事となりしが、此處に到る迄、途中中食する處も無かりき。此の邊も亦盛に鐵道工事を急ぎ居れり。余等は中食後道を急ぎ、二十清里計りにして宣化府に達せり。

宣化府

宣化府の回教及び葡萄

宣化府には知府衙門、知縣衙門等あり。北京張家口間に於て最も殷盛なる市街なり。町は方二十餘清里計りの城中に存在し、七個の門あり。此の城は明の洪武二十七年に、舊城を増築せるものにして、其の後清朝に入りてより、康熙二十一年に之を重修せるなり。此の附近に於て最も殷盛なる市街たるのみならず、回教は實に此地を中心とす。産物には葡萄あり。此地の回教はチャイニーストルキスタン附近の土耳其人によりて、傳道せられたるものにして、其の葡萄は、彼等回教徒の中央亞細亞等より携へ來れるもの、如し。傳ふる處によればサマルカンドより、持ち來れるものなりとも言ふ。

余等は知府衙門附近の旅舎に入りて一泊する事とせり。

宣化府の繁盛

新教育の普及

古土器を得たり

大理石の山

四、張家口

九月十二日。今日は張家口に向ふ日なり。余は朝早く起き出て、宣化府の町を見物せしに、此の町も既に新教育實施せらるゝと見え學校等も盛なり。其外上海等の木屋の支店もあり。其家にてはオルガン體操器具を賣り居りしが、此地の支那人には珍らしければ店頭に見物するもの多し。之等に見るも新教育の普及し居るを知らん。余は此店にて地圖其他種々のものを買ひ求めたり。十時頃漸く宣化府を出發せしが、車上町の有様を見るに、商業繁昌し毛皮の店等も多し。

町の門を出て、よりは、主として河に沿ひて進みしが、河岸の高臺に於て、赤峯附近にて拾へると同じ土器の破片を得たり。之に依りて考ふるに、此附近にも同一種族の棲息せるならんか。兎に角餘程注意すべき事なり。余等は尙も河に沿ひて進みしが、三四十清里計りも歩みしかと思ふ頃、道の右方に當りて高丘の現はれ居るを見たり。此山は大理石の丘にして實に美しく、工夫等は殆ど之を切出しつゝありき。

始め余等は河岸に沿ひ遠く山を望みつゝ歩みしが、漸く進むに隨ひて山は次第に接近し來

古墳

張家口に入る

る。斯くて尙も進み行く中に、大なる墓の前に出たり。此れは固より清朝に入りてよりのものなれども、石人、石馬等其前にあり。又た滿洲文と漢文とにて記せる大なる碑文も残り。余等は之を見て更に車を進むる中、俄かに雨降り出でしが、雨を冒して旅行を續く。暫くして雨は止みしも、之が爲め山より水流れ出る事夥しく、忽ち小川を成し、車を水中に進むる有様となれり。斯かる道を暫く進む程に、漸く張家口の町に達す。其の入口には大なる石橋を架し、之を渡れば即ち張家口の町なり。

張家口は蒙古との貿易地として盛なる處にして、其般盛なる宣化府等の如き到底及ぶ處に非ず。町は上堡、下堡の二部より成る。余は先づ下堡の旅館に泊る事とせり。此地には三井洋行もあれば、余も之を訪問せんとせしも、廣き町にして容易に知るを得ず、已むなく訪問を中止せり。即ち其夜は静かに書見等をなして寢に就けり。

第十六 張家口より多倫諾爾

一、旅行漸く蒙古的とする

九月十三日。張家口に滞在調査せんと思ひしも、前途を急ぐ事なれば調査は後の事にして

張家口の調査を後日に譲る

張家口を川
でより風
物一變す

土城子

荒れ果てた
る旅舎

元寶山

山頂の野花

出發す。町を離れてよりは川に沿ひて進みしが、道行く旅人も昨日とは大に異なり。紳士の如きはいと稀にして、多くは蒙古より牛、馬の皮を運び来る牛車のみ、又た張家口を出て、よりは、風の吹方さへも異なるが如く、急に寒さを感じるに至れり。道は漸く上りとなりしが、暫らくして谷間に位する宿驛土城子に達し、茲に下車して中食する事となれり。

此の地には一二軒の旅舎あるのみ、他には一軒の家も無し。而も其の旅舎と云ふも殆ど名のみにして、家の中に荒蕪一枚敷けるのみ、落ちかゝれる壁には蒙古字、支那字、羅馬字等の落書あり。蒙古人、支那人、西洋人等此の家に宿泊し或は中食し行く事は、此の落書によりて想像せらる。尙ほ注意して屋内の有様を見るに、天井も其他も埃堆く、全く掃除等はせぬものゝ如し、思ふに之より先は皆斯の如くならんか。

中食後土城子を出發せるが、道は次第に上りとなり、遂に元寶山に差しかゝる。余等は九百米突の處より下馬し、余の妻は幸子を抱き徒歩にて登り行けり。上りて頂上に達せしが、此處の高さは千九百米突にして、頂上には關帝廟あり。此處に立ちて過ぎ來し方を顧みるに、山も川も眼下に見え、又之より進まんとする方は、山又山にして下り道とならんとも思はれず。只大陸的のツネリを見るのみ。此の山上には野花多く、今や盛んに花を開きて美し

皮車絡繰た
り

ホホピン宿

不潔甚し

山中の月

曉の月を踏
んで出發す

石垣兒臺

さ言ふ計り無し。余等暫く憩ひたる後旅行を續けしが、途中張家口に向つて皮を運び行く牛車引も引らず、五十臺六十臺連續して行くもあり、又途中の岩角等に打當て、倒れたる牛車も敢て珍らしからざりき。

余等は暫くして千四百米突計りの處に下り、ホホピンと稱する處に達し、一泊する事となりしが、此處は宿とは名のみにして、今日の状態は、寧ろ元寶山中の飲食店とも云ふべく、不潔極まれり。此邊他に家と云ふもの無ければ、旅人は二三軒の廣き家に宿るなり。此夜月冴えて寒さ酷しかりき。此邊に至りて支那語の發音少しく異なるものあり。長城は張家口附近より此地に延長し居るを以て、余は下車して長城に登り聊かこれが調査をなしき。

九月十四日。今日の旅程は非常に遠しとの事なりしかば、余等は曉の月を踏んで出發せり。吹き來る風身にしみて寒さ酷しく、出發の際溫度を驗したるに室内にて尙ほ五十六度に下り居れり。朝早ければ幸子は尙昨夜の夢を續け居りしかば、其儘之を車に乗せて進む。行く事十清里計りにして、夜はほのゝと明け始めたるも、未だ月の光幽かに残り、途中牛車に毛皮を積みたる儘、旅宿の前に寝ね居るを見たる位なり。暫くして石垣兒臺と稱する地に到着せしが、此處には蒙古人の天幕張の家二三あり。此のシバルダイの町には支那人の家四五十

ありて、雜貨を商へるもの、萎びたる果實、肉等を商へるもの等あり。蒙古人も亦多く此町に出入す。

四六

蒙古人たるを秘す

支那化せる
チャハル蒙
古人

白廟子
板身兒

旅行漸く蒙
古的となる

此の附近の蒙古人等余の宿舎の前に來り、頻りに支那語を以て話しかけたるが、此發音及び風俗等支那人とは思はれざれば、余等は彼等に蒙古人ならんと言ひしに、彼等は容易に實を吐かざりしが、余等は暫く蒙古地方を旅行し、蒙古人たるか支那人たるかは直ちに區別し得るを告げ、蒙古語にて話しかけたれば彼等も遂に秘すを得ず、我等は蒙古人なりと自白するに到れり。此地の蒙古人は喀喇沁の蒙古人の如く、支那人に接し居る爲め、性情餘程悪しくなり居れり。此の地の蒙古人はチャハル蒙古人と稱し『蒙古遊牧記』等にも見えざるものにして、早くより清朝に服従し八旗の下に屬し居るなり。彼等の蒙古語を語るを好まざる等は、其の性質の一斑を現はし居るものと云ふべし。

余等は中食後此地を出發し、白廟子を経て板身兒に到着し、此處に一泊する事となれり、行程九十清里。

今日經過し來れる道は、益々蒙古的になり來り、草地は次第に廣く其の半は畑に耕さる。而して此邊にて耕作するは馬鈴薯、油麥、小麥、胡麻等にして今しも收穫を終れる頃なり。

蒙古人の耕作

廣漠たる平
野に出づ
鹽礮博と燈
籠樹
ドロノール
道
不便なる道
路を辿る
農家の生活
状態

又牛馬の群は彼方此方に見ゆれども、羊は他の蒙古地方に比して少き様なり。

シバルダイの高さは千二百七十米突にして、余等の宿泊せる處は千二百四十米突なり。本日
の温度は晝六十度なりしが、夜も亦同じく六十度なり。

九月十五日。朝早くホホピンを出發し、北東に向つて進む。道は漸次良くなり、遂に廣漠たる平原に出て、鹽礮博を過ぎて、燈籠樹に達せり。燈籠樹よりドロノールに行くに東西二路あり。西路は公道となりて聊かよけれども、余等は風俗の觀察上東路を歩むの必要を感じ、不便なる東路に向つて進むこととせり。燈籠樹を出て、より途中飲食店無きを以て、農家に入りて食事す。之等の農家には食ふに足るものもなければ、多くはメリケン粉等を蓄へ、之にて饅饅を作り、或は支那風の餅ピを製す。之等の著あるは中流以上なれども、其の以下にありては油麥、蕎麥粉、粟の類を食す。又馬鈴薯の多き期節には之を以て飯に代ふ。以て生活程度の異なり來れるを見るべし。此處にて余等は又馬鈴薯の收穫をなすの状況を見たり。此地の高さ六百五十米突にして本日温度は朝七十度なりき。

余等は中食後、尙も北東の廣漠たる平原に向つて車を進めしが、途中雨俄かに降り出たれば、目的地迄達するを得ず。止む無くバイチエンタンの、一農家に入りて一泊する事とな

俄雨
バイチエン
タン村

れり。此の農家には幸にして羊肉、馬蹄薯、葱、白菜等の蓄ありしかば、之等を購ひて調理し晚餐の食膳に供せり。

此地支那人の發音蒙古人に近し

秋冷の季肌

黒土窪

旅舎に飲食物なし

旅行には食糧を携帯す

余等の宿泊せる農家は支那人なるが、不思議にも此附近支那人の發音は、蒙古人の如きものあり。之は注意すべき事ならん。此の地は全く寒村にして、僅かにドロンノール、張家口等に往來する旅客の稀に通行するに過ぎず。此夜臥戸に入りしも非常に寒かりき。

九月十六日。朝早く出發す。此日寒氣最も酷しく溫度五十度に低下せり。然れども寒冷なる爲め却て心地好かりき。今日の道も亦昨日と同じく、大陸的高原にして、殆んど目に遮るものなし。五十清里にして黒土窪に達し、下車して中食する事となりしが、此の邊は總て人家少く、今朝出發以來五十清里の間に、只四五軒の村を見たるのみ。又た畑地も少くなり來り、余等の下車せる家の如きは、飲食店なるに肉も無く野菜もなく、卵も無く、只メリケン粉あるのみなれば、即ち止むを得ず餅を作らせて食へり。此邊にては馬糧も無ければ、野の草を自由に食はせるより方法なく、支那旅舎の如く、枯草を賣る事すらもせず。されば此地を旅行する者は、出發より到着迄の食物を携帯し行くを例とし、旅舎にては只湯を沸して客に供するのみなり。而して之等旅人の携帯する食物は、堅き月餅、焦し麵麩等にして、之

を嚼り茶を喫みて饑を凌ぐなり。

蒙古村の臭氣

山丹河

小河子

暫くして山丹河を渡り、山丹河の村より二三彼方なる、小河子黒土窪の店に入る。此店は全くの一軒家なれども相當に大なる店なり。然れども家古く軒傾き壁頽れ、廣き庭の中央に年來の水溜りて白色をなし、見るからに心地悪しく臭氣亦甚し。

飼猫用の梯子

蒙古的風物

此の店の主人は心正しき男にして、心して余等を待遇せり。此家にも肉は無く、只白菜あるのみ、余等即ち北京より携へ來れる支那米を炊かせ、此家の白菜と罐詰の肉にて夕食をなせり。此の家の天井に小さき梯子を掛け居れるが、此は天井の鼠をとらせんが爲め此の梯子を傳ひて猫を天井に上らしむる用意なり。されば天井は猫の小水にて濕ひ不潔なる事甚し。此の地の高さは千二百四十米突にして、此の日の溫度は五十一度を示せり。

九月十七日。例の如く朝早く小河子を出發し、道を急ぎて進み行きしが、此邊全く草地にして畑を見ず。只蒙古人等の自ら馬に乗りて、馬を追ひ行くを見たるのみ。遙かに白きもの

大梁底

古城址

古城址

古錢多し

、動くは羊の群ならんか。今日も亦途中一の河を渡れり。何處より運び來れるものか、松樹の枕木を積みたる牛車四十臺計り、張家口に向つて進むに會へり。暫くして大梁底と稱する處に達し、此處に下車して中食する事とせり。此の宿屋に蒙古の一青年居りしが、余等は久振にて蒙古語にて談話を交へたり。彼の云ふを聞くに、此地より北東七八清里の處に、オーランホトン(紅城)と稱する古城址ありと、而して彼は此の城址に就て委しき説明をなせり。又た此家の番頭を勤むる支那人も、中々話好にして種々の事を話したり。此の番頭は腰に種々の古錢を着け居りしかば、余は悉く之れを購ひしが、此の古錢の多くは、此附近にて得たるものなり。

紅城の調査
ハフテヨラ
村
袋を降らす

暫く休憩せる後、余等は更に旅行を繼ぐ。七八清里計りも進める頃、道の傍に土城あり。之れ紅城なり。近づきて之を見るに、周圍三町計りの土塼にして、余は此の城中にて大觀通寶一枚を得たるが、思ふに此は遼時代のものならんか。時に空搔き曇り雨模様になり來り、又日も漸く暮に近けるを以て、城址の調査を終るや直ちに車に上りて道を急ぎ、漸くにして大梁底より、三十清里ハフテヨラと稱する村に達し、此處に一泊する事となれり。此時既に雨降り始め、夜に入りては益々甚しく蔽さへ交るに至れり。此地の高さ千二百二十米突にし

て、夜に入りてよりの温度は五十五度なりき。

此處の宿屋にも、食物はメリケン粉及び白菜の鹽漬あるのみなりしかば、余等は之にて夕食を爲せり。此の附近には古錢多く存し、所持するものも多かりしが、余は悉く之を買ひ求めたり。此日の行程八十清里。

二、上都河流域

九月十八日。朝の温度五十四度。早朝出發す。爰に一言を要するは、余は北京にて金子を銅貨銀貨に交換して携へ來れり。其は清國にて貨幣を統一せん爲め、銅貨銀貨を鑄造し、各省に通用せしむる事とせしかば、余等も小錢を出すべき所は、銅錢を以て支拂をなし來れるに、二三日來余等の經過し來れる地方にては、此の錢を喜ばず。多く穴錢を一般に使用し、殊に昨日今日に至りては益々甚し。さればとて銀屋にて交換せんとすれば、銀屋も亦交換せずと云ふ。爲めに之より先の旅行に大に不便を感じせり。將來此地を旅行する人は注意すべき事なり。ハフテヨラを出發してよりは、始め小砂利交りの砂地を進みしが、次いで砂漠の如き道を迎り、三十清里にして邊嶺と云ふ處に達し、此處に下車して晝食する事となれり。

支那銅錢通
川せす

邊嶺

旅會に支那兵滿つ

昨日も然りしが此の邊の宿屋は、全く支那兵の宿泊所に宛てられ、此の家の如き十人二十人の支那兵宿泊し居れり。此の支那兵は即ち巡查なり。此の家の如きは廣けれども、彼等の爲に室を占領され居るを以て、客を善き室に案内する能はずとて此家の主人嘆息し居れり。されば余等をも止むを得ずとて埃堆く、障子の穢き室に室内せり。此家にも亦肉、野菜、卵等無く、メリケン粉あるのみなりしかば、之にて餅を焼かせ、携へ來れる支那の漬物にて晝餐を終る。

上都河の沿岸

此處を出て、よりは、愈々ドロソール街道となるなり。上都河に沿ひて進みしが、土地全く砂漠となれり。途中蒙古人の天幕の三々五々存在する見たるが、道の右方、上都河の沿岸にも、亦遙かに蒙古人の天幕を望めり。牛馬の群も漸次多くなり來り、二三百頭を牽き行くものを見たり。又た蒙古人の馬に乗りて、幾百頭の馬を追ひ行くをも眺め、愈々蒙古に入れる心地となれり。

蒙古家屋の土塼

此邊の蒙古人は、其住居の附近に、周圍三十間計の正方形或は圓形の、土塼を築き居れるが、余等は十數個所に之を見たり。而して其形式は、何れも東南の間に入口を設け、兎に角此は古きものなるが、其の入口を設くる方向は、現今の蒙古人と似たり。

上都河上源地の古住民

此附近は上都河の沿岸地にして、上都河は即ち灤河の上源地なり。昨日見たる古城及び今日途中にて多く見たる、小さき方形或は圓形の土塼に見るも、上都河沿岸には古くより住民ありしを知るべし。

東胡の遺物

余等は更に北東に向つて進みしが、三十清里計りにして、一村落を經過せり。其よりは砂地愈々盛んにして、諸所に砂丘を形成し、車の進行最も困難なり。之を以て見れば、此邊の砂地は既に、砂漠の一部分を成し居るを考ふべし。大砂丘を三つ四つ越えたる頃、漸くドロソールの市街を望み得たり。而も砂は余の脚を没する位に歩行亦困難なり。余等は此の砂丘の或部分に於て、灤河流域に於て得たると同じき、石器時代の土器石器等を發見せり。而も亦、之等遺物の中には、例の鐵鏟も交り居り。其の或る處の如きは、鐵器製造所にもありたるかと思はるゝ程、多量に之を存せり。余は之等遺物によりて、灤河の上源地も亦、考古學上確かに、當時東胡民族の居住し居れるを發見せり。加之此地に存する土器の様子は、灤河沿岸に存するものと同じければ、愈々之を確むるを得たり。尙ほ又た、此附近に新らしき時代の、支那人の墳墓もあり。而して此は既に破壊して砂の中より露出し、木棺、人骨及び之と共に埋められたる陶器等四邊に散亂し居れり。

支那人の墳墓

斯くて漸く上都河の沿岸に達せるが、河の前岸は多倫諾爾なり。町の西方には喇嘛廟の堧を見る。

往時の上都河

多倫諾爾に入る

上都河はチャハル蒙古附近に源を發し、ドロノールの處より彎曲して南方に流れ、更に幾多の河流と合して熱河に出て、更に南流し遂に灤河となりて下るなり。元朝の時に於ても此邊は最も重要な地にして、忽必烈の行宮も此地にあり。上都河の名も其時盛に用ゐられたるものなり。

余等は上都河に車を入れ、水を渡りて前岸に達し、五時頃多倫諾爾の町に入り、或る旅舎に投宿す。此の日行程九十浬。此の地の高さは千百二十米突なり。

三、多倫諾爾

多倫諾爾在

多倫諾爾と喇嘛

九月十九日。多倫諾爾滞在

多倫諾爾は一名喇嘛廟と稱す。此の地に大なる喇嘛廟あるが爲めなり。而も支那人は斯く稱し居るに拘らず、蒙古人等は依然多倫諾爾の名を用ふ。抑も多倫諾爾とは七つの湖の意味にして、元此地に七個所の水溜ありし爲め此地名を生じたるな。而して其附近には灤河

市街の地勢

喇嘛廟の美觀

商業盛なり

佛像製造

の上流なる上都河流れ居り、此の地に一度喇嘛廟の建てられしより以後は、多くの商人此の寺を目的とし集まり來り、遂に今日の市街を成すに到れるなり。

市街の位置は一小河を隔て、喇嘛廟と相對し、市街は東方に位し、寺は西方に在り、而して兩者を隔つる此の流は上都河に注ぐ河なり。市街は悉く支那人の町にして、現今の人口三萬計り有り。

喇嘛廟の位置は、後に低き丘陵を負ひ、前は上都河に臨めたる廣漠たる原野にして、野には一面に青毛氈草敷きたる如く小さき草密生せり。廟の建築は西藏と支那とを折衷せるものにして、之に住む僧侶は五千餘人の多數に上る、喇嘛廟と其前方の廣き庭とは、殆んど極樂城も斯くやと思はるゝ計りの美景なり。されば蒙古人は又尊稱して、ボクトフリエンとも云ふ。

多倫諾爾の市街には、人家軒を並べ、道路には石を敷けり。此の敷石は往時はなかりしならんが、今は凹凸甚しく車を行くに困難なり。又た人家の軒下をも歩み得る様になり居れり。此の町の商人の重なるものは、喇嘛廟相手の者に非ざれば、蒙古人を得意として、佛像其他の器物を販ぐ店なり。殊に此の地の佛像製造は、中々盛なるものにして、大なる店大なる工場等もあり。北京以外に於ける喇嘛の佛像製造所としては、此の多倫諾爾と庫倫とを以て其主たる

蒙古人向きの雑貨

毛皮店

旅舎

衙門

ものと爲すべし。又た蒙古人に賣る品物としては、蒙古人等の常用たる乳と茶とを交ぜたる茶を盛るべき銅製茶壺及び箆筒、桶、靴、其他蒙古人向一切の貨物にして、之等以外蒙古婦人の髪飾、耳飾等の製造も亦盛なり。又此地には毛皮の店非常に多く、種々のものを賣り居れるが、他の地に比して價安し。旅店も亦盛にして、支那人の宿泊する旅舎、蒙古人の泊る旅店等を區別せるもあり。

多倫諾爾の衙門は宣化府の管下にして、撫民府と稱し町の東方に位す。其の附近には關帝廟等もあり。此の地に居住する支那人は、概ね回々教の信者にして、旅店等も殆んど其の信者なれば、豚の肉等は一切用ゐず。余等の宿泊せし旅館は非常に大なるものにして、支那人蒙古人等の客も宿泊し居れり。

要するに多倫諾爾の町は、蒙古に接近し居る處にては、最も繁華なる市街なり。而して此の地は支那の管轄より言へば、宣化府下に屬すれども、蒙古人の方より言へば、チャハル蒙古の一部にして、其の北は直ちに克什克騰蒙古に接し居れり。

貨幣不統一の不便

余等の此の地にて大に困難を感ぜざるは、通貨の事なり。此の地にては、當時北京政府にて始めて鑄造せる、新貨幣銀貨銅貨等は全く通用せず。當時猶ほ銀塊及銀錢を使用し居る有様なれば、其の用意無き余等は非常に困難せしなり。此の地には郵便を取扱ひ、又た爲替をも取扱ひ居りしが比較的確實なり。此の郵便局にては洋銀銅錢等を通用し居れり。

多倫諾爾の斯く盛大なりし原因は、喇嘛廟の影響其の主たるものなれども、喇嘛廟の無き以前より、既に相當の處たりしは明なり。其は此の附近は即ち上都河の流域にして、元朝の上都城は、此の地の西北約一日行程の處に、在るに見るも明かなり。此の城は元の忽必烈の時に設けたる行宿なれば、此の上都河の兩沿岸には、今尙小城處々に遺り居れり。之等に見て當時此附近の盛なりしを想見するに足らん。其他遼、金等の土城の跡も存し居れるが、古くは東胡民族の遺跡の殘存せるを見たり。以て上都河と此地方との關係の深きを知るべし。

上都河沿岸の遺跡

元朝の行宮

遼、金、東胡の遺跡

市中見物

余等は車に乗りて市中を見物し、又た喇嘛廟へもいたれり、衙門よりは特に余等を招待せられしも、仕事多ければとて其好意を謝絶し、唯だ、明朝此地を出發するに就て、案内者として護衛の兵を附けられん事を請求せり。

斯くして一日を費せるが、今日の温度は朝五十一度、晝五十三度、夜五十二度なりき。

第十七 多倫諾爾より經棚

一、上都古城に向ふ

衙門の遺跡
衙門に直線
上都古城に
向ふ

九月二十日、余等は早朝五時に出發する豫定なりしかば、其の時迄に護衛兵を遣はされ度しと、豫め衙門に巾迄み置きしに拘らず、既に五時を過ぐるも來らず。止むを得ざれば、余等は馬車に乗りて、衙門へ行き直談判をなせしに、役人等は低頭平身平あやまりに謝罪り、即刻兵を呼び來りしかば、即ち彼を案内として出發せり。此の時既に七時を過ぎ居たり。

上都古城に
向ふ
住民古城の
存在を知ら
ず

余等の是より行かんとするは、第一に元の上都の遺跡なり。衙門より余等に附せる馬勇は、乘馬にて隨ひ道案内する事となりしが、彼は勿論、此處の衙門に就て問ふも上都古城の事を知らず。其の存在さへも知るもの無く、斯るものは無しとのみ答へたり。然れども外國人にも既に此の城址を訪へる者あり。又た書籍は勿論地圖にも記載し居る處なれば、誰彼の別無く、之が存在を問ひ試みたるに、何れも要領を得ざるには大に困却せり。されば余等は専ら地圖と書籍とに頼り、兵を先達として進む事とせり。

先づ道を喇嘛廟の方にとりて進む。喇嘛廟前の草原に朝露の置けるなど心地よし。余等は

喇嘛廟

二つの大喇嘛廟の間の道を進みしが、今其の傍に近き見れば、二者の中左方のもの尤も大きく、其の中央に見ゆる高樓の堯は海老茶色を呈せり。余は此處にて廟の寫眞を撮影せり。

荒廢たる草
原

此の附近一帯に沙地にして、喇嘛廟の後方にも細き流ありしが、廟の後方よりは悉く赤土となり居れり。廟を出發してよりは、丘陵の上を進む事となりしが、此の間には支那人の家も蒙古人の家も無く、只起伏せる丘陵に草生を茂り、處々少許の樹木残り居るのみ。目を遮るものとは無く、只途中草刈りの支那人等が、草を積みて三角形に作れる家に、殆んど穴居の如き状態にて住み居るを見たるのみ。余等は只管西北に向ひて進めり。

行けども人
家無し

途上の光景斯の如き有様なれば、空腹を感じ來れるも食事を取るべき處も見當らず。人家に達する迄前途尙ほ幾何なるかも分らず、大に困難せしが、其中に一人二人道行く支那人と會ひて之に問ひたるに、尙ほ十二清里計りも進まねば、人家なしとの事なりき。單調なる丘陵の上を進む事、暫くにして低き草地に出づ。此の草地は上都河の流域にして、此よりは上都河の流域を傳ひて進む事となれり。此の附近にも亦丘陵ありしが、左方に位する丘陵の上に、烽火臺の如きものを見たり。蓋し元朝の遺跡ならんか。

上都河流域を進むこと暫くにして、馬を驅りて進み來れる二人の喇嘛僧と會ひたれば、彼

蒙古人の里
数は常に成
らず

シヤンテン
コル村
上都河の蒙
古名

チャハル蒙
古の古風
上都河以北
の蒙古風

に上都迄の里程を問ひしに、尙ほ八十清里計りもあらんと答へぬ。元來蒙古人等の言ふ里數は、常に實際より遠ければ、其の言一向當に成らず、凡そ其の半分位に見て妥當なり。斯くして多論諾爾より四十清里も進める頃、始めて蒙古人の村落に到着せり。此の地はチャハル蒙古にして、村の名をシヤンテンコルヌアイラと云ふ。シヤンテンコルとは上都河の蒙古名なり。此の村は天幕張り十四五計りの部落にして、其の天幕の附近には草を食ひ居る牛馬を見たり。チャハル蒙古は、上都河の南に於ては、支那化され居る事多けれども、今此の地の状態を見るに、殆んど蒙古固有の風を存し、美しき毛氈の天幕を張り、男女の衣服其他總て蒙古風を存す。其の語る言語も蒙古語にして、支那語は殆んど通ぜざる有様なり。上都河を隔て、風俗の全く異なるは、之を以て知るを得べし。此の時村内の或る家に、喇嘛の僧來りて祈禱をなし居れり。

余等は一軒の家に入りて、茶を喫まし呉れよと頼みしに、家人は乳の茶などを持ち出でて大に歡待し、余等は久し振にて、再び蒙古の風俗に接したる心地せり。此村にて數種の寫眞を撮れり。

チャハル蒙古は、今は滿洲八旗の下に隸屬し、昔日の俗は見るを得ざれども、此の邊の住民

は未だ往時の風を存せるを見る。されば眞正のチャハル蒙古を研究せんと欲せば、此の邊によりて調査せざるべからず。

余等は此の村にて休憩せる後、更に旅行を續げんとせしも、之より先の道充分明かならねば、此の村より案内者を雇ひて進む。暫くにして上都河を渡り、其よりは丘と丘との間なる廣き草地を、更に西北方に向ひて進めり。此の時シヤンテンコルヌアイラの前より、伴ひ來れる案内者暇を請ひしかば、其請を容れて彼を歸らしめ、余等一行にて不案内の道を通りしが、暫くにして前方遙かに上都城の城壁見え始めしかば、一行勇を鼓して進み、最近頃漸く上都城附近に達せり。此處は一小村落をなし、蒙古人の家彼方此方にあれども、余等の來れるを見て村人悉く逃げ隠れ、泊るべき處も無かりしが、漸く一軒の家を捜し出し、今夜は不自由を忍びて此處に一泊する事とせり。余等の中食せる處より此の村迄三十清里なれば、多論諾爾よりは七十清里計りの行程なり。

上都古城に
達す

二、上都古城の研究

上都古城の
研究

九月二十一日。朝早く出發し車を早めて上都古城に向ふ。上都古城の位置は、余のパロメ

トルによれば、千百米突計りの高さにあり。城は殆ど南東に面し、城の周囲は總て石を以て積み、高さ三間計り周囲八清里計りあり。而して此の城壁の處々には突出を設く、又た城壁より二清里計り内部、即ち城の中央部には、更に煉瓦にて作れる城壁あり。其周囲四清里計りもあらん。煉瓦の壁の内部には、建物の跡を存し居れるが、煉瓦と石との間にも亦建物の跡を存せり。而して之等建築物の跡には、煉瓦、瓦、陶器等の破片の落ち散るを見たり。又た此の煉瓦の城壁の門の入口には、アーチを組みたる處もあり。其の處にて壁を計り見たるに、余の足にて二十三歩計りありたり。

城外東の部分に亦た處々に高臺あり。又た往時此の城下に往む者有りしものか、城の附近には處々建物の礎の跡残り居れり。其の他青き石にて作れる、獅子等の轉がり居るも見たり。此城は元朝の當時に建てられたるものにして、歴史上有名なる處なれば、余は之に就て尙ほ詳しく述べ度けれど、此處には之を略し論文の方にて記すべし。

城内には今一の建物も無ければ、更に喇嘛廟を建てんとて、此の時支那人の大工左官等頻りに其工事をなし居りしが、煉瓦等は即ち古城のものを其儘に用ふるなり。彼等は喇嘛廟を建てんとて、穴を掘り土を起す際に指輪、古錢等種々の古物を發掘し居りしかば、余は出來得る

喇嘛廟の新築工事

丈け之を採集せり。

蒙古人等は上都城をチヨロナイムゾムと稱す。百八の寺と云ふ事なるが、此の名に據りて昔此の地に寺の多かりしを知るべし。蒙古人等此の城は彼等の祖先によりて、築かれたる事を知るものなく、見向きもせぬ状態にして、却て外國人等の時々訪ひ來る者あるのみ。

上都古城の調査も了へたれば、余等一行は更に東南に向つて旅程を續く、即ち前に過ぎ來れる道を歸り、昨日中食せる村に一吋立寄り、此處よりは上都河に沿ひて東方に向ひ、南北に丘陵を望みつゝ、上都河流域を進みしが、地は平坦にして草多く、處々に牛馬羊の群を爲し居るあり。此間亦村落無く食事も得ざりしが、昨日途中にて見たると同じき、草薺の支那人家ありしかば、其れに頼みて湯を沸さしめ、茶などを飲みて纔かに飢を凌げり。斯くして上都古城より四十清里、始めて白城に達せり。

白城は丘陵の上に位し、高さ千百米突の地なり。周圍四清里高さ二里半の城にして、外壁の處々には突起せる處あり。又た城壁内の中央部には建物の趾ありて、其處には煉瓦を敷きつめたる跡を存す。此の城は最も正しく東西南北に面し、城壁は石を積みたるものにして、上都の城と同じく元時代のものならんと思はる。余等は此城趾に就て、種々の調査を爲したる

地中の遺物を採集す
百八寺

白城の研究

東胡の砦跡

後此處を出發せり。

崇

茲に一言を要するは、白城の西五清里計りの處にて、砦跡を見たる事なり。此の砦跡は三段になり、恰かも我が北海道に存する、チャシコツ及び蒙古英金河附近に存する、赤峯の砦跡に彷彿たり。而して其附近には、東胡族の遺せる土器の破片及び、之に混りて陶器の一小破片、鐵の破片、小刀の折れ、其の他石鏃、石器、石剃刀等の破片を存せり。之等によりて考ふるに、時代は下り居るも、東胡民族の此地に砦を構へ居れる事明かにして、余は先日上都河の南岸に於て發見せる遺跡と聯想して、東胡族の上都河流域に居住し居れる事を、愈々實際に確むる事を得たり。

蒙古人余等
を見て逃れ
去る
支那兵の亂

白城を出發し東方に向ひて暫く進む程に、蒙古人の一村落到達す。此處には二十計りの天幕ありしが、余等一行の影見ゆると共に、蒙古人等は周章馬を驅つて逃げ去りしが、其の有様よく見られたり。之れ支那兵の同行し居れる故恐れたるならん。余等は其中一軒の天幕に入りしに、中に恐れ慄きて残り居れる蒙古人は、非常に驚きたる様なりしが、余等は支那兵の如く悪き事はせずと告げれば、彼も漸く安心せるものゝ如く、雖て其家の美しき妻君も出て來り、又た其他の者共も歸り來れり。

バインボ
ツク村

此村に支那商人あり。三つ計りの天幕を張りて商賣を營み居れり。其の支那人は物の分る男なりしが、蒙古語も頗る達者にして、傍にて聞けば恰かも純粹の蒙古人の如し。余等の入れ居る蒙古人の家には、食物なしとの事なりかば、又一には後來の爲めにもと、此の支那商人より黍等を少し計り買求む。此の村にて蒙古人の乞食の如き男出て來り、頻りに物を欲しがる如く最も煩はしかりき。

今夜は此の村に一泊する事とす。村の名をバインボツクと云ふ。正午の溫度六十九度。

三、經棚に向ふ

地上霜を結
ぶ
上城の跡

九月二十二日。朝早く出發する豫定なりしかば、夙く起き出てたるに、地上霜を置けるを見たり。即ち溫度を驗せるに三十三度なりし。雖て此村を出せしが、村を出てんとする處に、周圍百二十間高さ二尺計の土城あり。東方に而し其の中央を土壁にて縦斷し、壁の附近には入口あり。此の土城は遼、金若しくは元時代のものならん。

昨日より今日に亘り、主として上都河に沿ひて歩み居りしが、バインボツクの村より、三清里計りの處にて上都河を渡り、北方に向ひて二三の村落を經過し、十五清里計り進みてマン

上都河流域
を離る

河には薄氷
張れり

ハの丘陵に達せり。此處迄は上都河の流域なりしが、之よりはマンハの丘陵を進む事となり、車を行るに最も困難せり。此の途中又た上都河に注ぐ小流を渡りしが、之には既に薄氷張り居るを見たり。又た此の途中の村落は、蒙古人のものなれどもバイシングル多く、其間に支那人雜居し、不完全ながらも旅舎の設けもあり。丘陵に差しかゝりてよりは、或は上り或は下り二十五清里計りにして、イチャルホラーと稱する村落に達し、此處に下車して中食す。時に温度は五十度を示せり。此の地の高さは千百米突なりしが、此日經過し來れる丘陵の高さは、略々一定し最も高き處にて、一千五百五十米突を出でざりき。此の日途中多少の旅人に會ひしが多くは支那人なり。

中食後暫らく休憩せるも、馬疲れて進み得ず。止む無く新なる馬に換へて行を續く、之迄は赤峰より伴ひ來れるものなりしが、爰にて發病せしかば、換馬をする事となりしなり。余等はイチャルホラを出發し、東北に向ひて十清里計り進みしが、北方に大なる道あるに拘らず、案内者は東方に向て進む故、余は何故北方の道を行かぬかと問ひしに、彼は其の道は濕地にして、歩行困難なる故通らぬなりとて、如何にするも大道を進むを肯せず、依然此道を東方に進む。道は丘陵の間にして草多し。東方に進む事二十清里計りにして、方向を轉じ北方に向ひて

馬斃る

案内者の不
親切

蒙古の紅葉

迂迴せる道
を歩む

ヤチクダラ
村

新なる案内
者

更に五清里計り進みしが、此の時既に夕暮近くなり、案内者は馬のみを殘して前に歸りしかば、余等一行にて行を續け、暫くして一河岸に達し、之を渡りて丘陵の上に出づ。此の河は上都河に注ぐものにして、河中一面に樹木生え、左右の丘陵の上にも木立あり。木葉は既に紅葉して、得も言はれぬ美しさなり。余は蒙古に入りてより、紅葉を見たるは之を以て初めとす。余等は流に沿ひて、丘の上を進みつゝありしが、其中に日全く暮れて困難せり。此の時先發せる余等案内の兵士は、旅舎の準備既に成れりとして、途中に出迎へ居たり。河を渡りてより二時間計り進みて、漸く一村落到達す。余等は彼方此方迂迴せる道を辿り來りし故に、斯く長時間を要し六十清里計りも歩みしが、曩に中食せる處より此村迄は、三十清里に過ぎざるなり。此河に砂山の間を流るゝ一の深谷なり。

此村は支那人の一小村落にして、不完全ながらも宿屋の如きもの一二軒あり。余等は其の中の大なる家に入りて、一泊する事とせり。此の旅舎にバイラーと呼ぶ蒙古人居りしが、彼は孤兒にして此の家の下僕をなし居れり。元はクシクトン蒙古の生れなりとの事なるが、支那語も解し非常に伶俐なる男なり。余等と共に旅行せずと言ひしに、行くも宜しとの事なりしかば、此より彼を同伴する事とせり。

余等の豫定

余等は最初多倫諾爾より伴ひ來れる馬勇に案内せしめて、一直線にグライノール湖のある方に向ふ豫定なりしなり。此の線は英人カンベル氏の曾て通過せるものなるが、余等を案内せる支那兵は少しも役に立たず、且つ又た此の道を通行すべくも見えざる有様にして、殆んど其必要無ければ、彼をば此處より歸す事とせり。

此の日通過し來れるは概ね支那人の村落にして、殊に中食せる村の附近にては、多數の支那人の盛んに農業を營み居るを見たり。又た此附近には昔樹木多かりしもの、如く、今も處々に古木残り居れり。思ふに此の邊も亦支那人の侵入せるは、比較的近頃の事なるべし。彼等は森林を切り開きて、遂に今日の如き禿山にせるもの、如し。現今は此附近に蒙古人全く居らず。之を以て如何に蒙古人の勢力の及び居るかを知るべし。

余等の宿泊せる村は、チャクダラと稱し高さ千二百二十米突あり。其前を流るゝ河をチャクダラと稱す。

九月二十三日。多倫諾爾より伴ひ來れる支那兵を歸し、此の旅宿に居れる蒙古人を同伴する事とせり。彼は支那語を話し又た蒙古語を語る故、蒙古の旅宿には最も適當なる男なり。

朝此の村を出發せる時の溫度は四十三度にして、地には一面に霜の結ぶを見たり。然れど

支那人の侵入

五六十清里の無人境
ウインヂャ
インズ村

粗末なる旅舎

も昨日に比すれば餘程暖氣を加へ、毛衣さへ脱ぎ得るに至れり。今日も亦昨日の如く馬を換へつゝ進みしかば、車の進む事非常に速し。道は依然たる砂漠にして人家絶えて無く、全く無人の境を東北に向つて進む事、五六十清里計りにして茫々たる草地に出づ。途中土城の存するを見たり。之より更に十清里計り進み、始めてウインヂャインズと稱する地に到着し、此處に一泊する事とせり。

余等の入れる家の客室は、物置と主人の居間とを兼ねたる様の處にして、戸隙子も上敷も無き粗末なる室なれども、止むを得ず此處に一泊する事とせり。寢床の下には管を通じ、其傍なる竈に火を焚くなり。此家には食ふものとても無ければ、余等は北京より携へ來れる支那米、罐詰、白菜等を取出して食事をなし寢に就きしが、寢床の下に管を通じ居る爲め、比較的暖かゝりき。

此の日經過し來れる途中は、最も高さ處にて一千二百八十米突なりしが、中食せる處は稍々下りて千二百六十米突なりき。以て高低甚しからざるを知るべし。又た途上の砂山には處々に樺の木多かりしが、元此附近には樹木多かりしものと思はる。晝の溫度は五十八度なりき。

黄河上源地
に入る

砂丘の起伏

紅葉青松谷
間を彩る

支那人の農
業

山林河

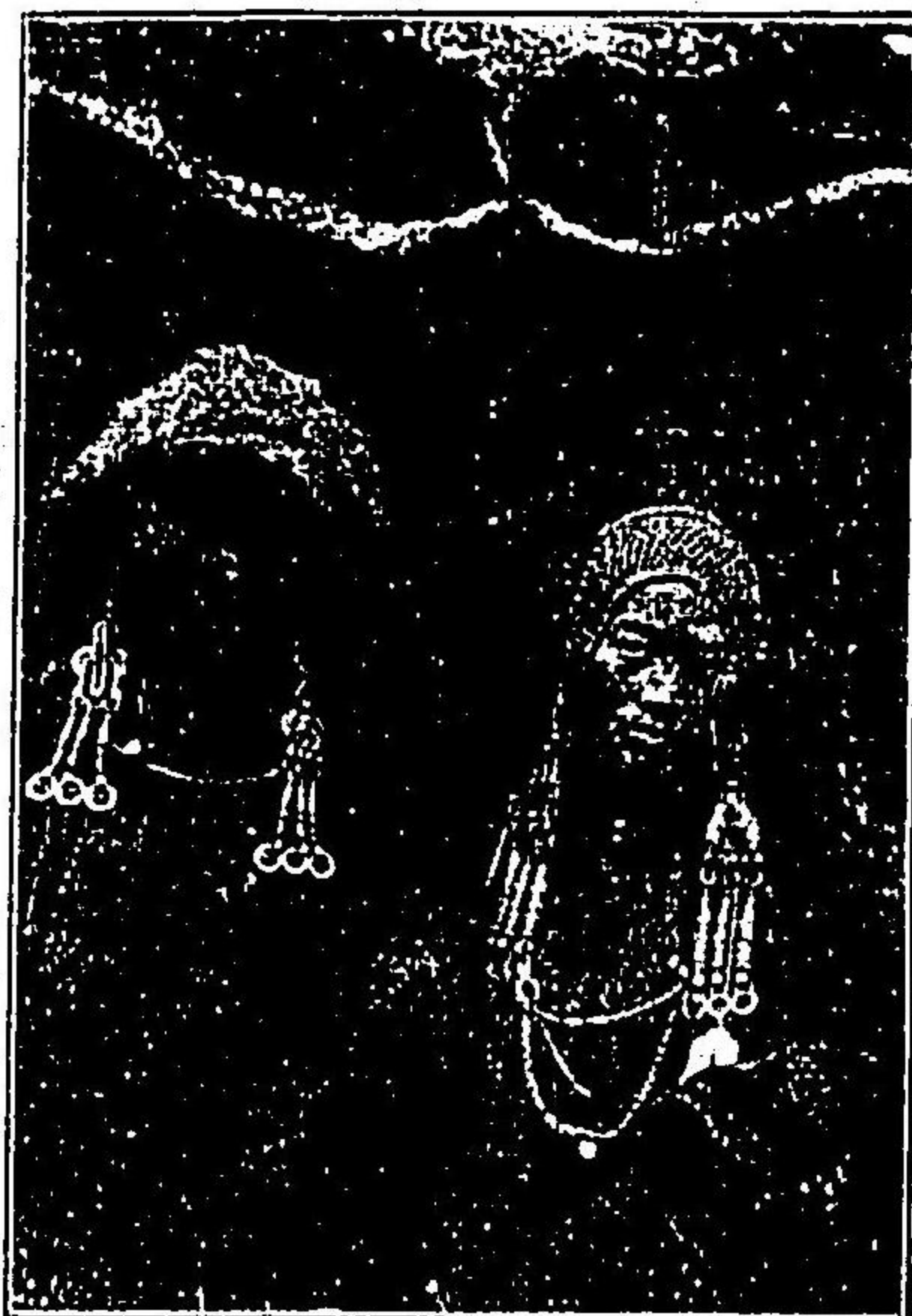
九月二十四日。早朝出發す。砂地は未だ盡きず。山を行く事暫くにして谷に入り、漸くにして谷益深くなれり。此の附近は既に黄河の上源地となり居るなり。其の砂山の起伏し居る様眞に奇觀にして、日本などには到底見るを得ざる景色なり。而して此の砂丘の低き處を傳ひて、河流あちらこちらに流れ居れり。之等に見るも、黄河の上源地たる事明かなり。之によりて考ふるに、昨日迄余等の旅行し來れる地は、濛河の上流即ち上都河の上源地なりしが、今日は既に黄河の上源地に入れるなり。之れ尤も注意を要する事なり。而も砂山の間には松紅葉等多く、殊に紅葉は黄或は紅に彩られ、松の青葉其間に點綴して美しき事限りなし。谷間には又た岩骨處々に露はれ居れり。

此の附近人家は道端に近く處々に在りしも、悉く農家のみなり。即ち此地に住する支那人は、何れも農業を營み居るものにして、其家も富裕なるが如し。之等に見るも黄河の上源地は、既に支那人に占領せられ居るを見ん。此の黄河上源地の溪流は水いと清く、彼方此方より細き谷川の、幾筋となく流れ居れるが、之等の細流合して、遂に黄河の源流となるなり。余等は山林河と稱する處にて晝食せり。此地の高さ千六百十米突ありき。この所支那人の村落にして。戸數又多し、山林河は最も深き溪間にして、左右には頗る高き丘陵の聳ゆるあ

阿巴嗎蒙古婦女



西島珠穆の婦女



蒙古婦女



上都河の白城

り。これに因て、この河の侵蝕作用の盛なるを知らる。又た河には水多く、既に潢河の水源の本流に属するものならん。この邊又樹木の残り居るを見る。

中食後山林河を出發す。道は次第に上りとなり、遂に千三百六十米突の處迄達せり。此處は此の附近にての最高處なり。斯くて尙も丘陵の上を傳ひ行き、夕暮近き頃漸く一村落に入り、此處に一泊する事とせり。

旅客雜居の
旅舎

此地も亦高き處にして松樹等多し。宿屋も一二軒あれども、一軒は兵隊の役所になり居るを以て、余等は他の一軒に入りて泊る事とせり。此家は客室は一つにして、衆客皆一緒になり居れり。南より來れるも、北より來れるも、悉く一堂に集まり居るなり。余等も其中に入り一方に座を取りて泊る事とせしが、中には煙草を喫むもの阿片を吸ふもの等あり。室内煙朦々として實に苦しかりき。

クングンテ
ン村

此の日は谷間より丘陵の道を歩み居りしが、里程一百滑里なり。途中松樹多きは尤も注意すべし。此の村はクングンテといふ。其位置潢河の上源地にあるを以て、潢河上源地の狀態、如何を知るには適當の處なり。

遼史の松地
平林

彼の遼史に、遼の天子屢々松地平林に、獵を試みられし事を記載しあるが、之は此邊の事

に非ざるか。此の地の松樹多きは、兎に角注意すべき事ならん。又た植物帯の之迄の地方と變化し來れるも、之によりて知るを得べし。

砂丘連り車
を
行
る
に
困
難
なり

九月二十五日。朝早く谷間の宿を出發す。此より道は愈々下りとはなれるも、復た砂山を歩む事となれり。此の附近には松樹の外落葉樹亦多く、此の時悉く紅葉し居れりしかば、頗る美しかりき。斯くして進み行く中に、一方に谷を控へたる砂山の上に出づ。車の進む毎に砂は谷底に落ち行けり。而して道端の砂の陥れる處には柴を組み、其上に砂を盛りて道を造り居るを以て、車を行るに困難なり。

喀喇沁人の
飲食店

斯る砂山を或は上り或は下りて、進み行く事四十清里計りにして、始めて村落に達す。此處には不完全ながら飲食店もあり。此店は近頃出來たるものにして、其家の主人は喀喇沁中旗の男なり。余等も一年半程其地に在りしを語りしに、彼は非常に喜び、種々の御馳走を持出て又た色々の話をなせり。彼の言に據れば、此の地には旅舎も飲食店も無かりしを、彼は喀喇沁より此地に來り、數年以來飲食店を開き裕かに暮し居るなりと。彼の本業は農にして、傍ら旅人宿及び飲食店を營み居るなり。

支那人の墓

此處に到る途中、砂漠の間にて支那人の墓を見たるが、中には木棺破れて死屍の露出せるも

のあり臭氣甚しかりし。一行の馬夫の如きは色を變じて恐れたり。

潢河の源流

少時休憩せる後、此の店を出發し潢河の岸に達せり。此は既に潢河の本流にして、河幅も廣く水量亦多く、水も溜り居らざりき。辛うじて之を渡りて對岸に上り、尙も流に沿ひて進み、出發せる處より六十清里にして、始めて宿を取れり。

克什克騰王
の別邸

此家は旅舎に非らず。クシクトン蒙古王の所有家屋にして、前年迄王妃之に住ひ居りしなり。されば其の建築實に立派にして、王妃の室、侍女の室等なり。其の門も大きく一の宮殿と稱するを得べし。又た其の裏の方には倉庫等もあり。然れども今や住む人も無ければ軒傾き、荒れ果て、只四五人の支那兵の屯し居るを見る。余等の入れる一棟の建物には七十許りの蒙古人の老婆と、十五許りなる其の孫との住むのみなり。此の老婆は王妃の下婢なりしと云ふ。彼は此時米無しとて、非常に困窮し居るか如かりしが、斯る事を云ふは蒙古人の常にして、余等は其を聞き慣れ居るを以て、敢て驚かざりき。聞く處によれば、此の家には老婆の主人其他の家内もあるとの事なれば、余等の來れるを見て逃げたるならん。余等は此家に一泊する事とせり。

克什克騰家
古の支那化

此の地は既にクシクトン蒙古にして、王府も此處より近しと云ふ。即ち余等はチャハル蒙

古を離れたるなり。而して其の位置は黄河の上源地なり。前日チャハル蒙古人の語れる如く、クシクトン蒙古はイルグンボルチ(支那化した)の語に違はず、其の風俗の如きも長靴長衣を用ひず、一見支那人と同じ。又た其の言語も支那人の影響を受け、不完全ながらも支那語を練り居れり。

思ふに黄河の上源地は、以前はクシクトン蒙古の遊牧地なりしを、其後盛に支那人侵入し來れるより、斯の如く全く支那化するゝに到れるならん。

此の日クングテンとバカボトカとの谷間の間なる、マンハの潰れたる處にて、鼠色の土器の破片を二個計り得たり。之は曾て黄河河畔なる巴林のニーマモリ、東翁牛特の遺跡にて得たるもの同一なるが、之等は餘程注意すべき事なり。此の日の温度は晝七十二度、夜七十七度なりき。

鼠色の土器
クシクトン
チヤンザイ
ンズ
旅店の者逃
げ去る
止む無く旅
行を續く

九月二十六日。朝夙く出發し、黄河の流に沿ひて谷間の道を進み、二十清里計りにしてチャンザインズに達す。此處には旅店少し計りあれども、其家人余等の一行を見て逃げ去れり。是迄處々にて余等を見て逃れたるものあれども、旅店の者の逃げ隠れたるは初めて見たる處なり。止む無く余等は今日の目的地たる、經棚に向つて行を續くる事とせり。十清里計り進める

經棚に至る
全く支那人
の村落のみ

頃、經棚の方より流れ來り、黄河に往くビルギンコロと稱する河に達せり。之より河を北に廻る事、更に十清里計りにして經棚に達す。此の間或は黄河上源地の合間を歩み、或は河を渡り或は丘陵を傳ひて進みしが、處々に散在する村落は、悉く支那人の部落にして、蒙古人は全く居らず。余等は經一の旅舎に入りて一泊する事とせり。此の地の高さは八百四十突。

經棚市街
役人の風俗
支那人の勢
力

經棚は黄河上源地に於ける支那人の一小市街にして、其人口一萬人内外あり。此附近に於ける支那人の需要は、重に此の町より供給す。されば雜貨店旅店等盛んにして、其他蒙古人向の貨物を販ぎ居るもあり。此の町には小なる役所ありて、支那の武官駐在せり。此の衙門より余等の旅館を護らせん爲め、二名の兵士を派遣し、又た役人も余等を訪問せり。訪問せる役人の風を見るに、彼は馬に乗り、赤き天蓋を差しかけさせ來れり。

支那人は此町を經棚と稱すれども、蒙古人はベロホトンと呼べり。これに因て考ふれば昔日此處に城ありしや明なり。町には蒙古喇嘛廟一字あり。支那人の此地に入り込めるは、近頃の事なれども、其勢力侮り難きものあり。黄河上源地に於ける、支那人等の中心地とも稱すべく、さればこそ僅かの間に、斯かる市街地を爲せるものなるにして、最も注目し値する處なり。

見物余等の
旅館を圍む

余等の此の地に入るや、此町の支那人等は余等外國人を珍らしが、殊に日本の婦人小供

等は、彼等の初めて見る處なれば、煩しき程旅館の周圍に集まり來れり。此の町には又た蒙古人の往來するをも見たるか、彼等はクシクトンの蒙古人なり。此町の喇嘛廟の僧侶等も、余等の蒙古語を解するを聞きて話しに來り、余等も色々の事を聞くを得たり。今日の温度は晝六十二度、夜六十四度。

五六

四、ダライノール附近

九月二十七日。今日は愈々ダライノールに向ひて進む事となれり。然るに赤蜂より伴ひ來れる馬勇及び馬夫等は、此處より歸り度しとの事なりしかば、彼等に暇を遣はし、尙ほ友人知己等に送るべき書面を之に依托し、久しく同行せる彼等と訣れたり。余等即ち新に經棚の車を雇入れ、護衛の兵士を案内者となし、余等親子三人は車に乗り、西方に道をとりにて此地を出發せり。

經棚よりは河に沿ひたる丘陵の道を進みしが、暫くにして本流を離れ、之に注ぐ一小流に沿ひて進み、十五清里計りにして、トロオボと稱する處に達せり。此間處々に村落ありしが、悉く支那人の部落なり。又た此の途中の道端に當り、恰かも鳥籠の如く格子を附けたる箱に、

ダライノールに向ふ

赤蜂の馬勇等と別る

トロオボ

鼻首を見る

首を入れて柱に高く吊し居れるを見たり。是は近頃この附近にて土匪をなし、民家に侵入せしもの首なりと云ふ。

東胡の遺物
トロオボ附近の谷間には、例の東胡民族の土器散亂するあり。其中には石器を作る材料等もありしが、注意して其遺跡を見るに、之等遺物の土中に挿まり居る状態は、今日の地上より二尺計りの處にして、曾て余等の見たる黄河流域の巴林、翁牛特等に在存する状態と酷似す。

更に進む事二十清里にして、余等の傳ひ來れる流れは漸く盡きぬ。此附近に支那兵の居る營所ありしが。余等は其處にて食事をなし、尙も西に向ひて進み行けり。此邊一帶の砂漠にして人家少く、唯だ砂漠の北方の方に、五六の蒙古家屋を見るのみ、南の方には殆んど人家を見ず。

日昇れて人家に達せず
砂漠中の喇嘛廟
余等一行は起伏せる丘陵の上を、西へ西へと進み行く中に日全く没せり。夜を冒して二時間計り進める頃、犬の吠ゆるを聞き、始めて人家の在るを知り、其を直指して進み行きたしに、此は砂漠の間に建てられたる一小喇嘛廟にして、其の中に五六十人の喇嘛僧居れり。余等は之に一泊を請ひて其内に入れり。此の廟をタラインソムと云ふ。此の地の高さは千〇八十米突

なり。本日の温度は晝六十二度、夜は五十八度を示せり。

又た此の喇嘛廟の東方、三清里計りの處にても、地中に散亂せる、東胡の土器の小破片を見たり。此の附近にても、曾て同民族の居住せしを確めたり。

九月二十八日。朝の温度五十六度。

タラインソムとは海の寺の意味にして、此の附近に大なる湖水あるが爲なり。蒙古人は湖をタライ即ち海とも云ふなり。以てタライノールの近づけるを知るべし。

朝まだきタラインソムを出發す。道は廣漠たる砂漠地なり。經棚の兵士も道を知らずとの事なりしかば、此處の喇嘛僧一人案内する事となれり。余等は西方に向ひて進み、すてにして湖畔に出づ、其南岸を歩むに數十清里の間人家を見ず。又た道行く人も無く、只廣漠たる湖畔を辿るのみ、途中僅かに喇嘛の一隊、西烏珠穆沁より鹽を運び歸れるに會へり。

五十清里計り進みて、ダラハンソムと稱する寺に到着す。此處の高さは千百米突なり。此寺は全部新らしき建築にして、其中に二三百人の僧侶居るが如し。又其附近には支那商人の店もあり。支那人蒙古人の男女の往來するをも見たるが、彼等は余等一行を珍らしが、見物に来るもの多かりき。彼等の中にはクシクトンの蒙古人、阿巴噶蒙古人等もあり。余は彼等の

湖水近し

ム
ダラハンソ

の風俗を寫眞に撮影せり。

此處を出發して更に西に向つて進む。砂漠地なれば車は一向抄どらず。漫々として進み行く中に夕暮の空漸く迫り、且つ此の時より時雨さへ降り來れり。此の邊は既に湖水の渚なるが、湖畔の夕時雨亦一種の物凄さを感ぜり。

既にして日全く没す。余等暗中の道を辿り、漸くにしてホーレンゴロと稱する、蒙古人の一村落入れり。始め村人余等の宿泊を肯ぜざりしが、余等は強て其家に入りしより、彼も遂に承諾せり。此家に荷物を解き、雨を聞きつゝ、眠る、夜間の温度は五十八度なりき。

此の村の附近に、湖水より流れ出づる同名の河あるを以て、ホーレンゴロと稱するなり。此の地は、既に阿巴噶蒙古にして克什克騰に非ず。而して此の村の位置はタライノールの西岸にあり。

余等此の日の旅行中、ダラハンソムに到着する五清里計り東の方に於て、東胡民族の遺せる土器の破片地中に埋まり居るを見たり。

九月二十九日。朝早く起出でたるに、今日は風寒く寒暖計は四十四度に下れり。

余等のタライノールに來れる目的は、實は元朝の應昌府の跡を見んが爲めなり。應昌府の

湖畔時雨に
會ふ
ホーレンゴ
ロ村

阿巴噶蒙古
に入る

應昌府の遺
跡を訪ふ

遺跡の調査

遺跡は此の村より近ければ、余等は此處を出發し、車を早めて進みしに少時にして到着せり。

遺跡はダライノール西岸の丘の上に存在し、周圍八清里計りの土壁を築けり。城内には建築物の趾、或は高く或は低く處々に残り居れるが、又た青色の瓦、柱の礎石等もあり。或はありし昔の位置の儘、整然と存する礎石もありき。其他石獅子、花形の彫模様ある臺石等もあり。大理石にて作り色々の形せる、碑文の臺石も二個計りあり。又た挽臼の如きものも残り居れり。之等によりて考ふるも當時應昌府の盛なりしを知るに足らん。此の地の蒙古人は此城をルンワンホトと稱す。ルンワンは支那語の龍王にして、ホトンは蒙古語の城の義なり。

カンヘルの旅行記に據れば、此の附近には遠、金等古き時代の土城をも存すとの事なれば、余等は之をも捜さんと。此の地の蒙古人に尋ねたるも分らざりしかば、止むを得ず此處を捨て。再び湖畔の道を過りてダラハンソムの方に歸れり。應昌府遺跡よりダラハンソム迄は四十清里なり。

湖水の變遷

此の附近の地形を見るに、現今の湖畔の低地は、往時一帯に湖水の一部なりしもの、如し、即ち今は湖水の面積餘程小さくなるなり。湖水は南北に長くして東西に狭く、即ち一般に東北より西南十六マイル、東より西十マイルと云へるが、蒙古人の言に據れば、湖畔一地點より馬に騎して左右に出發すれば、一日にて出て會ふとの事なり。而して此湖水はクシクトン

ルンソノホ
遊金等の土

蒙古アバカ蒙古とに及べり。

ダラハンソムは全く湖畔に存する寺院なり。余等之より尙ほ旅行を續けんとせるも、是より先には人家無く、非常に困難せる前日の經驗に顧みて、日尙ほ高けれども此寺に滞在する事とせり。今日も亦阿巴噶、克什克騰等の蒙古人等、余の處に來り種々の話をなせるが、余は之を利用して寫眞等を撮影せり。

晝の溫度六十五度、夜は五十六度を示せり。

應昌府城趾の高さは千四百米突にして湖水の處は千六十米突なりし。

五、再び經棚に歸る

九月三十日。經棚の方に向つて隨る事とせり。東方に向つて進む事七八清里計りの處にて、東湖民族の土器を得たり。寺より四十清里計り右方の丘陵の上に、一小林を見しが概ね松及柏なり。尙此附近の他の丘陵にも松あるを見て、當時此の附近に樹木多かりしを知らん。途中中食をとりて更に行を繼けたるが、道漸く爪先上りとなり、千百六十米突の高さ迄登れり。

再びダラハ
ンソムに歸
る

松柏の林